

デート・ア・オルガ

宮本竹輪

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

鉄華団団長 オルガ・イツカ

彼は鉄華団の団長として闘い抜き、

敵の凶弾に倒れ、儚く散っていった。

そんな彼が目覚めた世界は《精霊》という少女が存在する別世界だった。

果たしてこの世界でオルガを待ち受けるものは。

——命の糧は戦争デットにある。

※初投稿ですが、生暖かい目で見守って下さいませ。

因みに作者はデアアラと鉄血の両方とも、全話視聴済みです。

目次

プロローグ

デート・ア・オルガ

プロローグ

2

十香デッドエンド

第一話 四月十日

7

第二話 邂逅

29

第三話 戦闘

34

第四話 人類の脅威

46

第五話 ラタトスク

57

第六話 訓練

71

第七話 戦争(デート)の前の

245

第十七話 悲哀

260

第八話 彼女の名

100

第九話 暴虐なる姫君(プリンセス)

133

四糸乃アグニカ

第十話 兔の少女

170

第十一話 屋根の下にて

183

第十二話 二つ目の訓練

196

第十三話 ハーミット

211

第十四話 アグニカの魂

223

第十五話 白き翼の悪魔

235

第十六話 再開のアグニカ(馬鹿)

第十八話 注文の多い鳶一家 |

第十九話 凍て付く大地 |

第二十話 氷渦の中で |

狂三キラ

第二十一話 悪夢との邂逅 |

第二十二話 学校案内 |

291

301

324

348

367

プロローグ

デート・ア・オルガ

プロローグ

『団長！車の用意出来ました！』

ライドの声が商会の中で響く。

『おう、じゃあな』

『はい、お気を付けて』

オルガとクーデリアが笑顔で別れの会話を交わす。

別に寂しくない訳ではない。

しばしの別れとなると寂しい気もしないわけではなく、彼らが鉄華団が乗り越えて来た、地獄に比べれば、なんてことはない。

そう思いながら、オルガとライドの二人は、車が用意されている、出口に向かって歩き始める。

すると、ライドがオルガに話しかける。

『なんか静かですね。町の中にはギャラルホルンもないし、本部とは偉い違いだ』

『火星の戦力も軒並み向こうに回してんのかもな』

『まあ、そんなのもう関係ないですけどね』

『上機嫌だな?』

『そりゃ、そうですねよ!みんな助かるし、タカキも頑張ってたし!俺も頑張らないと!』

上機嫌に話すライドにオルガは『ああ』と頷く。

確かにそうだ。彼ら鉄華団は地獄のような戦いを何度もくぐり抜けできた。

それがようやく終わろうとしている。

犠牲は出てしまった。

しかし、今まで積み上げてきたことは無駄にならずに済んだ。

だからその犠牲になった仲間の分まで生きていこうとそうオルガは心に決めた。

そして車の待っ出口に向かいドアを出たそのとき――

キキイイイツ　ガチャン

車の急ブレーキ音とドアの開く音が聞こえた。車内から銃を構えた男達が現れ、オルガ達に向けて発砲し始めた。

これに応戦したオルガは仲間を守ったが死んでしまった。

仲間に残りを残して……

『……だからよ、止まるんじゃないぞ……』

その後鉄華団は壊滅した。こうして必死に生きるために戦い続けた少年達の物語は

終わった。



少年は息を呑む。

非現実的過ぎる光景が少年の周りに広がっていた。

消し取られたかのような街並み。

隕石でも落ちてきたかのような、巨大なクレーター。

後ろで倒れ込んでいるオルガ。

たちの悪い白昼夢のような馬鹿げた景色。

だが士道はそれを臆気にしか見ていなかった。

「そんなものより遙かに異常なものが、士道の目の前にあったからだ。

その異常なものは、少女だった。

奇妙なドレスを纏った一人の少女。

その異常な少女が士道の目の前に立っている。

「あ」

呆けたような声を発する。

例え、周りがどれだけ異常な要素でも、不純物に成り下がってしまうくらい、それほ

どまでに目の前の少女の存在は圧倒的だった。

布のような、金属のような、不思議な素材で構成され、そこから広がる光のスカートは士道の目を引いた。

しかし、少女の姿容は、それすらも脇役に霞ませる。

肩に腰に絡み付くように煙るは、長い闇色の髪。

凜と蒼穹を見上げるは、不思議な宝石のような双眸。

女神にさえ嫉妬を覚えさせるであろう貌を物憂げに歪め、静かに唇を結んでいるその様子は。

視線を、

注意を、

心をも、

一瞬にして、奪い去った。

それくらい、

あまりにも、

尋常でなく、

暴力的なまでに、美しい。

「君、は」

呆然と。

士道は声を発していた。

少女が、ゆっくりと視線を下ろしてくる。

「……名、か」

心地のいい調べのような声音が、空気を震わせた。
しかし。

「……そんなものは、ない」

どこか悲しげに、少女は言った。

「……っ」

そのとき二人の目に交わり、——二人の少年と少女の物語が、始まった。

そのとき。

二人の目に交わり、——二人の少年と少女の物語が、始まった。

十香デツドエンド

第一話 四月十日

「ああく……、ウウツ！」

オルガは朝から死にかけて。

なぜなら、妹に寝ていたにも関わらず自分の腹などをリズミカルに踏んでいるのである。気持ちよく寝ているのにいきなり踏まれて無理矢理起こされたら、一部を除けば、そりや不快な気持ちになるだろう。

四月十日、月曜日。

昨日までの春休みが終わり、今日からまた学校が始まるというダルい気持ちでいっばいな朝だ。

そんな日に妹にリズミカルに朝から踏まれる。

最悪だとオルガは密かに心の中で呟いた。

すると隣のベッドで寝ている五河士道は布団をかぶったまま眠そうな声を発した。

「あー、琴里。俺の可愛い妹よ」

「おおう！」

とここでようやく妹が士道が起きていることに気づいたようだ。

士道とオルガの体の上ののつていた妹の琴里が二人の方に顔を向ける。二つに括られた髪が揺れ、まるでどんぐりのような丸い双眸が二人を見つめる。

「なんだ!? 私の可愛いお兄ちゃん達よ!」

可愛いと言いながらも、足を退ける様子もなくそう言ってくる。

すると死にかけている声でオルガが口を開く。

「なんて時間起こしやがる……。」

そうオルガは突っ込みを入れる。そしてオルガのセリフに士道も便乗する。

「そうだよ、下りろよ! 重いよ!」

士道が言うと、そのまま琴里は高く飛び跳ね、二人の腹に向けて強烈なキックを繰り出した。

「ぐふっ!」 「ヴウツ! うわあああ!」

オルガはキックの衝撃でベッドから落ちてしまった。

今の衝撃でオルガの体を受けたダメージが蓄積されてオルガは床に倒れ込む。

「……だからよ、止まるんじゃねえぞ……。」

しかしそんなオルガに目もくれず、琴里は士道の断末魔に反応した。

「あははは、ぐふだつて! 陸戦用だ——!」

「……………」

士道は無言で布団を被り直した。オルガは床で寝ている。

「あー！なんでまた寝るのだー!?!」

琴里が声を上げながら、士道の布団をゆっさゆっさと揺さぶっている。

「起きろー、起きろー、おにーちゃん！起きろー!」

すると士道は苦しそうな声で話し出した。そしてここでオルガも生き返り、体を起こそうとしていた。

「逃げろ…………。琴里…………」

「え?」

「俺は『とりあえずあと一〇分寝ていないと妹をくすぐり地獄の刑に処してしまうウイルス』、略してTウイルスに感染しているんだ…………。」

「な、なんだってー!」

「なんだと!?!」

琴里とオルガはトンデモない情報を知ってしまった人のように驚く。

「逃げろ…………。琴里、俺の意識があるうちに…………」

「で、でも、おにーちゃんはどーなるのだ!?!」

「俺のことはいい…………。お前さえ助かってくれれば…………、早く…………!」

「そんな！おにーちゃん！」

「ガーッ！」

「キヤーッ！」

「ヴウッ！」

土道が布団を吹き飛ばし叫ぶ。

そして琴里がベッドから飛び降りた。

しかし着地点にオルガがいたことで体を起こしていたオルガが琴里に踏まれてまたオルガは床に倒れる。

そのまま琴里が凄まじい悲鳴を上げながら部屋を出て行った。

「……だからよ、止まるんじゃねえぞ……」

「オ……、オルガ？」

「うわあああ！」

土道が話しかけようとしたときにオルガは叫び声を上げながら、逃げてしまった。

「やれやれ」

土道は呆れながら、学校の支度を始めた。

「ああ〜」

土道は自分の部屋を出て、あくびを一つしながら、階段を下りて、リビングに入って

いく。

すると、リビングがいつもと違う光景が広がっていた。リビングに置いてある木製のテーブルが横に倒れており、その後ろには、琴里とオルガがしゃがみ込んでいた。

「うー……、Tウイルス……、怖い……」

「確実に殺されるぞ……」

どうやら、二人は先程の士道の嘘を信じてしまっているらしい。

士道は足音を立てずにテーブルの後ろに回り込む。

「がーっ！」

「うわあああ！うわあああ！」

「ヴウアアアアア!!」

士道が後ろで叫ぶと、琴里とオルガは壁際に追いつめられ焦っていた。

「落ち着け。いつものおにーちゃんだ」

「お、おにーちゃん？」

「怖くない怖くない。オレ、コトリトモダーチ。」

士道が片言で言ってくる。

その様子を見てオルガは構えていた銃を下ろし、琴里は顔から緊張が抜けていく。

「なんだよ、いつも通りじゃねえか……。そうやってお前は」

「う、うん！」



その後士道は朝食を作っていて、琴里とオルガはテレビを見ていた。オルガと琴里はソファーに座りながらニュースを見ている。

『今日未明天宮市近郊で小規模な空間震の発生が確認されました。被害は比較的軽微で付近周辺の死傷者もなく、空間震の発生条件については現在も調査中で・・・』

士道達は反応する。なぜなら士道達の住む街の名前が出たからだ。

「またか。近いな」

「だね」

『空間震』原因不明の広域震動現象。

発生原因、発生時期ともに不明。その名の通り空間そのものが揺れる現象である。

三〇年前に初めて観測された。

『ユーラシア大空災』と呼ばれた現象は一夜にして当時のアジア諸国が消失した。死傷者、約一億五〇〇〇万人。

まさに最悪の犠牲者を出した災害である。

そして半年後に日本でものちに『南関東大空災』と呼ばれる空間震が起きる。

東京都南部から神奈川県北部の地域が焦土と化した。

それからしばらくの間は大きな空間震は確認されなくなった。だが五年程前に再開されたこの天宮市で空間震が確認された。それを皮切りに日本では空間震が確認され始めたのである。

「なんか、最近多くないか？」

「そうだな」

「・・・そーだねー。ちよつと予定より早いかな」

「あ？」

その台詞を聞いてオルガは目を潜める。

「今何か言ったか？」

「ううん。何でもない！」

「そうか、ん？お前なあ・・・」

琴里の言葉の内容は気になったが、オルガは琴里の様子を見てあきれた。

琴里は大好物のチュッパチャプスを食べていたのだ。

「おーい、土道」

「どうした？」

「こいつ」

そう言つてオルガは琴里を指差す。

「こら！飯の前だぞ！」

「んー！んー！」

士道は飴玉を取り上げようと棒を引つ張るが、琴里が唇をすぼめて抵抗してくる。士道が力を入れて抜こうとする。だが、中々飴玉を取り上げることができない。

「……つたく、ちゃんと飯も食うんだぞ？」

「おー！愛してるぞ！おにーちゃん！」

結局士道が負けた。

そんな会話をしていると、インターホンが鳴った。

「誰だ？」

「俺が出るよ！」

そう言うのとオルガは玄関に向かいドアを開ける。

「オルガおはよう」

「おお、ミカじゃねえか」

ミカと呼ばれた黒髪と碧眼のこの少年三日月オーガス。オルガと比べると比較的低身長だが、士道達と同一年である。

玄関に上がり士道達のいるリビングに入っていく。

「おはよう三日月」

「おはよーなのだ！三日月」

「おはよう二人とも」

二人に挨拶をすると、士道が口を開いた。

「昼飯何かリクエストあるか？」

今日は春休み明けの新学期なので、午前中に学校が終わる。

「デラックスキッズプレート！」

「チョコレート」

琴里と三日月がリクエストしてくる。

「三日月のは買えばいいけど、琴里のはファミレスのメニューじゃねえか。当店ではご用意できかねます。」

「ええーいいじゃん。お願い、お願い。お願いするのだ、おにーちゃん」

「……」

士道は仕方なさそうな顔をして食パンを食べた。

◇

「ふふくん。デラックスキッズプレート〜。ファミレスでお昼〜」

その後士道達は家を出て、学校に向かった。結局琴里のご要望通り昼食はファミレスで食べることに決定した。

「ファミレスでそんなに浮かれるなよ」

「いいの、ありがとね。おにーちゃん」

「まあいいんじゃないの、なあミカ」

「だね」

四人で会話をしながら学校に向かう。

街では沢山の人がいた。出勤前のサラリーマンや登校途中の小学生など様々な人がそれぞれの朝を迎えている。四人はファミレスの前で立ち止まる。

「それじゃ、おにーちゃん学校終わったらここで待ち合わせね」

「分かったよ」

「絶対だぞ！絶対約束だぞ！お店がテロリストに占拠されても、絶対だぞ！」

「なんだそりゃ、占拠されてちや飯食えないだろ。いいから」

そう言うのと土道は琴里の頭を撫でる。

「気をつけて行くんだぞ」

その様子を近くで見ていた女子高生三人亜衣麻衣美衣の亜衣がその様子を見ていた。

「ん？あれ五河くんじゃない？」

「仲よさげ。シスコンで噂マジなんだ」

「まじひくわー」

既に変な噂が立っていた。

琴里は約束の最後の確認を土道達とした。

「絶対の絶対だぞ！空間震が起きても絶対だぞ！」

「ああ。分かったから早く行け。」

土道は手を振りながら琴里を見送っていた。

「おはよう、五河」

すると土道の手を後ろから掴まれた。土道達は後ろを振り返る。

「おお、殿町」

「新学期早々元氣そうで何よりだ」

殿町と呼ばれた少年は土道の手を掴んだままで挨拶する。

手を掴んだままなので、はたから見れば色々と勘違いされそうだった。

そのホモオな様子が続けて見ていた亜衣麻衣美衣は遠目でさらに見ていた。

「まっこつちの噂も在るけどね」

「殿町君両刀って話だし」

「まじひくわー」



朝から色々あったが、土道達は学校に着いた。

ここ都立来禅高校はの数年前に再開発された高校である。数年前に創られたというのもあり、内装や外装には殆ど傷がついていない。さらに地下シェルターも最新のも物が設えてある。

士道達は今学校の二年四組の教室にいた。

「しかし、奇遇だな五河。またお前と同じクラスになれるとは。この殿町宏人運命を感じちゃうよ」

「そうか？」

殿町の発言に士道は少し引き気味で返事をする。

すると誰かの携帯の通知音が鳴った。どうやら殿町の携帯のようだ。

「おっと、すまん彼女だ」

「へえ、いつの間に」

「紹介しよう。ほら」

殿町はポケットからスマホを取り出す。

そして士道に彼女を見せてくる。

スマホに映っていたのは、アニメキャラのような少女の絵が映っていた。

「つてギャルゲーかよー！」

「彼女には変わりない。偏見を持つなギャルゲーには女性との接し方やとるべき行動の

全てが詰まっている！正に恋愛の教科書だ。」

「どういうことだ？」

「特にこの『恋してマイリトルシドー』はアプリが充実していて……」

「三日月・オーガス」

殿町の話を聞いてみると、三日月は不意に横から声をかけられた。

声をかけられた方を見ると同じ制服を着た少女がいた。

肩に触れるか、触れないかくらいの髪に人形のような端正な顔をした少女である。

しかし彼女の顔はとても無表情だった。

「あんた誰？」

率直に三日月は訊く。

「ミカ、知り合いか？」

「ううん」

「覚えていないの？」

しばらく、三日月と少女は見つめ合ったが、そのまま少女は特に反応も示さずに無言で自分の席に座った。土道は少女について殿町に質問する。

「誰だ？」

殿町は驚きながら、訊いてくる。

「お前ら、超天才鳶一折紙を知らないのか!？」

「……鳶一……折紙?」

「誰なんだよそいつは」

「成績は常に学年首席。体育も完璧。おまけにあの美人だ。俺調べの恋人にしたい女子ランキングトップスリーから落ちたことない安定ぶりだぞ」

「ああ、分かったよ!とにかく上げえやつじゃねえか。」

その話を聞いてオルガはどうやら理解できたらしい。殿町が続ける。

「しかしお前ら校内一の有名人を知らないとは。でも何故鳶一は三日月のこと知ってるんだ?」

「知らない」

三日月は殿町に対し、短く返す。

だが三日月には全く心当たりが無かった。

三日月含め三人が折紙のことを知ったのはたった今だ。

心当たりも何も無い。

するとチャイムが鳴る。ホームルームのチャイムだ。

オルガ達生徒は自分の席に着く。

教室の扉が開けられ、眼鏡をかけた小柄の女性が入ってきて教卓につく。

辺りから小さなざわめきが聞こえてくる。

「タマちゃんだ！」

「いいんじゃないの、なあ」

案の定生徒たちの反応は好意的なようだ。

「はい、おはようございます。これから一年皆さんの担任を務めます、岡峰珠恵です」

社会科担当の岡峰珠恵教諭こと通称タマちゃんが自己紹介をする。

するとオルガは自分の席から立ち上がり、自己紹介を始めた。

「俺はオルガ・イツカだぞ」

その様子を見て生徒たちは色めき立つ。

しかしそんな中で三日月は視線を感じていた。

視線の方を向くと、左隣の席に座った折紙がこちらをじーっと、視線を送っていたの

である。一瞬目が合う。

（鳶一：：折紙？）

三日月は少し疑問に思ったが、すぐに目を逸らした。



始業式が終わり、先程からおよそ三時間が経過した。

「五河一緒に帰ろうか」

他の生徒が帰り支度が終わった生徒たちが教室を出て行く中で肩に鞆をかけた殿町が声をかけてきた。

しかし、土道は琴里との約束を思い出した。

「悪い。先約がある」

「はあん、女子か？」

殿町は土道の机に手をかけて、聞いてくる。

「まあ一応。琴里だけだな」

「分かっている。俺の調査によればお前と食事をするほど好感度の高い女子はいない」

すると三日月は少し怒り気味で言った。

「・・・お前にだけは言われたくないよ」

「落ちつけ、ミカ」

オルガは苦笑しながら、三日月をなだめるようにして言う。

「お前、一言多いな」

「じよ、冗談だつて」

殿町が苦笑して誤魔化した

瞬間。

ウウウウウウウウ

「「・・・なっ!」」

不快なサイレンが街中に鳴り響く。

オルガ達も含め教室中の生徒たちは会話を止め、目を丸くした。

サイレンに続きアナウンス街中に響いた。

『ただ今当区域に置いて、空間震の予兆が観測されました。これは訓練では、ありません。』

「来るのか!」

「ひとまず避難しよう。学校の地下シェルターなら安全なはずだ」

「ああ、行くぞ」

士道達は額に汗を浮かべていた。

だが生徒たちは緊張や不安を滲ませているが皆落ち着いていた。

この街は三〇年前の空間震の深刻な被害を受けている。

しかしその後はこの街は再開発されたため、小さい頃から士道達は避難訓練を受けていた。加えて、この高校には地下シェルターが設けている。

士道達生徒は走らない程度に急いで、教室から出ようとしていた。地下シェルターへ

と避難していた。

——と土道は眉をひそめた。

皆が地下シェルターへと移動している中で一人の女子生徒が別の方向に走っていたのだ。

「鳶……?」

なんと別方向に駆けていたのはあの鳶一折紙だった。

土道は足を止めて様子を見ていた。

すると、三日月が、あ、と声を発する。

「どうした、ミカ?」

「忘れ物した」

三日月の言葉にオルガは、おいおいと言う。

本来ならば、取りに戻りたいところだが空間震なら、戻ったら、危険だろう。

しかし、三日月は

「ごめん、忘れ物取ってくる」

「はあ?! おい、ミカ!」

オルガの制止を振り切り、そのまま走り去ってしまう。走り去っていく三日月を呆然と眺めていた。

別に二人のことが気にならなかつたわけではない。

もしかしたら鳶一も忘れ物をしたのかもしれない。すぐにシエルターに来るはずだ。きっと空間震が起きる前に戻ってくれば間に合うだろう。

「お、落ち着いてくださーい！おかしを忘れないでくださーい！押さない！駆けない！しゃれこうべ！」

「先生が落ち着いて下さい」

生徒を誘導している珠恵の姿があつた。先生が一番焦つており、生徒に注意されていた。

その姿を見て、生徒たちの緊張がほぐされたのか、生徒たちの中ではくすくすという笑い声が漏れていた。

その中で土道はポケットの携帯電話で着信履歴から『五河琴里』の名を選んで電話をかける。

電話をかけながら、土道はある琴里との言葉を思い出した。

（空間震が起きても絶対だぞ！）

まさかあの言葉通りにファミレスで待っているということはあるまい。琴里も何度も空間震の避難訓練をした。避難しているはずだ。

（大丈夫だ。避難でバタバタしていて気づかないだけだ）

しかし土道は不安で仕方がなかった。

電話をかけるが繋がらない。土道は携帯を操作し、スマホのGPS機能を開く。琴里のスマホには位置確認のGPSが対応していた。

「……ッー」

土道は琴里の位置を見て、息を詰まらせた。琴里の位置がなんと約束のファミレスの前で停止していたのである。

土道は生徒の列から抜け出して走りだした。

「お、おい待てー！土道ー」

その様子を見てオルガも土道について行った。

「お、おいッ、五河!？」

殿町の言葉を背にそのまま土道とオルガは外へと駆けていつてしまった。

そのまま土道とオルガは琴里のもとへと向かうため、校門を抜け街中を駆けていた。オルガたちの住む街は不気味に変貌していた。

街中静まり返っており誰もいなかった。

土道とオルガは必死で走り、ファミレスへと向かっていた。

オルガも土道から事情を聞いて琴里のもとへ向かうことにした。

「……なんで街がこんななってるのに、なんで馬鹿正直に残ってやがんだ……!」

叫びながら士道たちは走る。

士道の後ろでオルガは焦っていた。

だが焦っている暇など彼らになかった。

ただ琴里のもとへとたどり着くためにただ進み走り続ける——！

「足を止めるなあ！あと少し、あと少しで！．．．ん？なんだありや？」

「え？」

士道とオルガは顔を上方に向ける。その時である——。

「うわ．．．ッ!?」「ピギユッ!?」

突然進行方向がまばゆい光と耳をつんざく爆音とともに突如前方から来た衝撃波に

巻き込まれ士道とオルガは後方に吹き飛ばされてしまった。

「．．．．士道大丈夫か!？」

「ああ俺は大丈夫だ。つてえ．．．なんなんだ一体．．．?」

士道とオルガは身を起こし、目の前の景色を見る。

「——は？」

「．．．．．ッ」

士道は間の抜けた声を発し、オルガは絶句した。

自分の目に映っていた光景を疑った。

先程までビルが建っていた場所が削り取られていたのである。それも先程まであった街路樹やビルも跡形もなく消えていた。

何もなかったかのよう。

土道とオルガはクレーターを見る。

すると土道はクレーターの中心部に何か鉄の塊のようなものが聳えていることに気づいた。

「・・・なんだ・・・？」

よく見るとその鉄の塊は玉座のようだった。

そしてその玉座らしき物体に誰かが一人佇んでいた。

そこに——は一人のドレスを纏っている少女がいた。

第二話 邂逅

(・・・何やってんだ、あの子?)

玉座の肘掛けに足を掛けている少女は、奇妙な恰好をしていた。

遠くではつきりは見えなかったが不思議なドレスを纏っているように見えた。

「誰だ、ありや?」

「・・・さあ?でもなんであんなところにいるんだ?」

その光景はまさに異様だった。

少女は玉座の背もたれから生えた柄のようなものを握るとそれを背もたれから引き抜く。

それは幅広程の巨大な剣だった。

その剣は星のような虹のような輝きを放っていた。少女が剣を振りかぶり——
「……………」

士道たちの方へ剣を振り下ろした——!

光輝く軌跡を描きながら真つ直ぐに士道の横を通り過ぎ、横にいたオルガに当たった。

「ヴァアアアア!!」

オルガはそのまま光の刃とともに後方へ飛ばされてしまった。そしてオルガと刃は後方の家屋やビルに当たり、建物の崩落音が聞こえた。今の一撃で士道の横の地面には剣の軌跡が刻まれていた。

「な」

士道は今少女の放った一撃に間の抜けた声を出す。

先程まであった建物が一瞬で崩れたのである。そこには崩落に巻き込まれ倒れ込んでいるオルガの姿があった。

「……だからよ。止まるんじゃねえぞ……」

士道にとつてこの状況は理解出来なかった。

ただ理解出来たのは、あの一撃に当たっていたら、自分も後方の建物と同じように木っ端微塵になっていたということだ。

様子を見れば分かるとおり、あれに当たれば一溜まりもないだろう。

「……オルガ!!」

士道はオルガに駆け寄ろうとする。

すると後方から、黒い光線が士道の頬を擦った。

「……ッ」

士道は頬を抑えると、ひどく摩擦したような声が後方から聞こえ士道は振り向く。

「…………… お前もか……………」

「……………」

そこには先程までクレーターの中心にいた少女が士道の目の前に立っていた。

士道に剣を向けながら、少女は口を開く。

「…………… お前も…………… 私を殺しに来たのか」

「…………… っ！」

少女は剣を前に突き出す。士道は後ろに下がろうとしてバランスを崩してしまった。歳は士道たちと同じくらいだろうか。

夜色の膝につくほどの長髪で水晶のような瞳。装いは、ドレスに金色の金属のような装飾が施されていた。継ぎ目やインナーなどどころどころが光の膜で構成されていた。

その風貌はとて凛々しく、まさに戦乙女とようであった。

そしてその手には巨大な剣が握られていた。

「君、は……………」

呆然と。

士道は声を発していた。

一瞬でも目をそらしたら、オルガのようになってしまうことも視野に入れて。

少女が、ゆつくりと視線を下ろす。

「……名、か」

心地のいい調べの声音が、空気を震わせた。
しかし。

「……そんなものは、ない」

どこか悲しげに、少女は言った。

「……っ」

そのとき。土道と少年の目が、初めて交わった。

消しとられたかのような街並み。

隕石でも落ちてきたかのような、巨大なクレーター。

まさに異様と呼べる状況だった。

だが、目の前の少女は周りのものより遙かに異常だった。

まさに、少女は暴力的なまでに美しい。

少女はひどく憂鬱そうにまた土道に先程と同じ質問を問うてきた。

「……お前も私を殺しに来たのだろう。……ならば、早めに始末するまで」

「ちよ、ちよつと待った！ そんな訳ないだろう！」

土道は慌てて少女に呼びかける。

少女は信じがたそうにこちらを睨んできた。

「何?」

「こ、殺すだなんて……。大体君は……?」

「ん?」

「どうした?」

士道が声を発した途端、急に少女の指に先程の黒い光線が集まり始めた。

「……つて、ちよ、ちよつと待って!!いきなりどうした!?!」

士道は彼女に訊くがそのまま答えず、彼女は指から光線を放った。

「……うわっ!」

士道は咄嗟に腕で顔を覆う。

だが

「あれ?」

士道は体を固めるが無事だった。

すると後方から男の声が聞こえた。

「……うおッ!」

士道はその声を聞いてすぐさま振り向いた。

なんとそこには先程殺された筈のオルガが立っていた。

第三話 戦闘

「……え？」

士道は間の抜けたような声を発した。

士道の目の前には異常なものが立っていた。

それは少年だった。

長身に銀髪の士道と同じ来禅高校の制服を着た少年だ。

それだけ見れば普通の高校生なのだが、問題はそこではなかった。

士道は少年の名を呼んだ。

「……オ、オルガ？」

「……よ、よう」

オルガと呼ばれた少年は少し気まずそうに返答する。

オルガ・イツカ先程殺された筈の男だ。

そんな彼が士道の目の前に立っている。

士道は何故なのだと考えるが、全く分からない。

もしかしたら、幽霊なのではないかなどという発想が脳裏をよぎったが、だがそんな

ことあるわけない。

自分には靈感はないと言いつ聞かせながらも恐る恐るオルガに訊く。

「……オルガお前あのとき死んだ筈じゃ?」

「……え?俺が死んだ?いやでも、あながち間違っちゃいねえのか……?」

またも士道は間抜けな声を発した。

「は?でもお前後ろで倒れて、死んだんじゃ!」

「……いやな、あのとき意識が切れたような感覚はあんだよ。けどよ、目が覚めた途端、なんつーか生きてるっていう感覚があつたんだ。」

士道は状況がさらに分からなくなる。

先程後方で死んだ筈のオルガがこうして士道の前に立っているのだ。

果たして何故なのだろうか。

すると——オルガの足元に黒い光線撃ちこまれる。

「うお!!」

するとオルガの足元に黒い光線撃ちこまれる。

一発だけだったのだから避けた。

士道の背後の少女が摩耗したような声で言った。

「……まだ生きていたか。先程ので仕留め損ねたとは。まあいい、二人まとめて蹴散ら

してくれる」

少女が剣を振りかぶろうとした瞬間

ドゴオン！

上空から何かが降り注ぎ、少女の背後が爆発した。

「……………っ」

「…………… なっ!？」

今の爆発で周囲に瓦礫が飛び散った。

士道とオルガ、少女は腕で顔を覆う。

「…………… 今のはなんだ?…ん?」

オルガは空を見上げた。

上空から複数の影がこちらに飛んでくるのが見えた。

「…………… つてて、オルガどうした?」

「いや、あれなんだ?」

「あれ?」

オルガは上空の影に指さす。

鳥にしては大きいし、飛行機にしては小さい。

「…………… おい!あれ人じゃねえか!」

「…… んなっ！」

士道は目を見開いた。

そこには奇妙な恰好をした人間数名が空を飛んでいた。あまつさえ、手に持っている武器からミサイルをこちらに攻撃してきた。

「うわああああ!?!」

「ヴァアアアア!!」

思わず、叫び声を上げてしまう。

だがいくら経っても士道たちの意識ははつきりしたままだった。

士道は目を開く。

少女は空から放たれたミサイルは見えない手にでも掴まれたかのように空中で静止していた。

「……こんなものは無駄と……何故学習しない。」

少女は剣を握っていない方の手をグツと握る。

すると空中で静止していたミサイルは圧縮されるようにその場で爆発した。

爆発の規模は小さい。

空中にいる人たちは狼狽するのが、なんとなくだが分かる。

だが、攻撃をやめようとせず、次々とミサイルを撃ち込んでくる。

上空にいる人間たちは今度はロボットに向けて光線を放ってくる。

だがロボットは手にした武器で光線を防ぐ。

そして背中のスラスタを駆動させて空を飛んでいる人に武器を振り回す。

ロボットはその巨体に反して、俊敏に動き、豪快に戦う。

まるで悪魔のように。

今度は少女とロボット両方に向けて光線を放つ。

だが少女は見えない壁のようなもので光線を防ぎ、ロボットは光線を避け、武器を振り回す。

少女とロボットの方が数的には不利だった。

だがその差を一瞬で埋めてしまうほど力を少女とロボットが奮っていた。



士道はこの場から逃げようとしている最中オルガはロボットの戦いを呆然と見ていた。

このような戦場で呆然としているとは、自殺行為なのだろうか。

しかしオルガはあのロボットを見た瞬間頭の中で何かが引つかかった。

「俺はこのロボットを見たことがある……？」

そう思った途端オルガの頭に打ち付けるような鈍痛が起きる。

「……ッ……なんだ？この痛みは……？」

鈍痛とうずきによって思わず膝をついてしまう。

すると士道が振り向いた。

「オルガどうした？」

「……いや、大丈夫だ」

オルガは頭痛を抱えたまま士道の後をついて行った。



その後士道とオルガは攻撃が来なさそうなところで腰を下ろしていた。

ようやく、身を潜められる場所に来れた。

そう思うと士道とオルガは大きなため息をついた

「はぁ………」

「どうなっただこりゃ。」

「分かんない」

そう会話をしていると、あの少女がミサイルを切り裂き、戦っている姿が見えた。

次に頭上を何か飛び去っていき、士道たちの目の前に着地した。

あのロボットだ。

「やべっー！」

少女とロボットが離れたところで光線を撃たれていた。

士道たちはまたもこの場から逃げようとした。

すると士道たちの後方から何者かが舞い降りた。

「ッ。な、なんなんだよ次から次へとー！」

そこに降り立つた影を見て士道とオルガは体を硬直させる。

そこには——機械を着たとでも言うべきだろうか。

背中にスラスターを背負い、見慣れないボディスーツを覆った少女である。

手にはゴルフバッグのような形状の武器を携えていた。

士道たちが身を凍らせた理由は単純だった。少女の顔に見覚えがあったのである。

「あ、あんた……」

「鳶——折紙……？」

今朝、殿町から教えてもらった名を呟く。

そう、そこにいたやたらメカニカルな恰好をしていた少女はクラスメートの鳶一折紙だった。

折紙がちらと士道とオルガを一瞥する。

「五河士道とオルガ・イツカ——？」

返答のように士道とオルガの名を読んだ。

「は？な、なんだその恰好」

と、士道とオルガが折紙に視線を寄こした途端、少女は手にした剣を折紙に向けて振り抜いた。

折紙は地面を蹴って、剣の太刀筋の延長線上から身をかわし、少女に肉薄する。

いつの間にか折紙の手には光で構成されている刃が出現し、少女に振り下ろした。

「ぬ」

少女は眉根を寄せて、手にしていた剣で折紙の一撃を受け止める。

瞬間。

少女と折紙の攻撃によって、凄まじい衝撃波が発せられた。

「ままま、待つてくッ、ヴァアアアア」

「うわあああああ——!？」

士道とオルガは情けない声を上げた。

士道は身を丸めてそれをどうにか、やり過ぎしたが、士道の横でオルガが倒れた。

「……………だからよ。止まるんじゃねえぞ……………」

折紙が攻撃を弾かれて、少女と折紙の距離を離れた。

そして士道たちの頭上を何かが通り過ぎる。

地面に立ったそれは先程のロボットだった。

二人は武器を構えて、睨み合う。

ロボットも手にしたメイスを構える。

「……………」

「……………」

「……………」

士道とオルガを挟んで、謎の少女とロボットと折紙が、鋭い視線を混じらせる。

まさに、一触即発。何か小さな出来事があれば、戦闘が再開されてしまいそうな状況だった。

「……ッ。」

士道としては気が気でない。

額に汗を滲ませながら、どうにかこの場から逃れようと考えてる。

そのときオルガが身を起こした。

「なんで俺たちが巻き込まれなきゃ……………」

「……………」

「……………」

「……………」

それが合図だった。オルガが起き上がると同時に少女と折紙が地を蹴り、ロボットはスラストを駆動させ、オルガを巻き込むように土道の真ん前で激突する。

「ヴアアアアアアアアアア!!!」

「ぎやあああああつ!」

その圧倒的な力のぶつかり合いに土道とオルガは巻き込まれた。

◇

久しぶり。

やっと会えたね、XXX。

嬉しいよ。でも、もう少し、もう少し待つて。

もう、絶対離さない。もう、絶対間違わない。だから………

◆

どこかの町の路地裏にて

パアン!

乾いた銃声が鳴り響く。銃を撃つたのは幼なじみの黒い髪をした少年。少年の目の前には先刻、彼が撃った奴の死体が転がっており、そいつの血が流れていた。

その様子を呆然と見ていた俺を黒髪の少年は振り向き俺に問う。

『ねえ、次はどうすればいい？』

少年の問いに拳を握り締める。俺は数瞬の余韻のあと口を開く。

「…………… 決まってるだろ」

「え？」

俺の答えに少年は疑問そうに首を傾げる。

「行くんだよ」

「どこに？」

「……じゃない、どっか」

そう言うと、俺は少年に手を伸ばす。

ああ、思い出した。

第四話 人類の脅威

「……はっ！ヴァアアアアアアアアアア!?!」

オルガは目を覚まし、すぐさま叫び声を上げた。

オルガの目の前で見知らぬ女がオルガの臉を開いて、ペンライトのようなものを目に光を当てていたのである。

そして驚いたオルガはベッドから転げ落ちた。

「……だからよ。止まるんじやねえぞ……」

「……ん？目が覚めたかね」

女はぼうつとした声でそう言った。

「……大丈夫かい？」

「……こんくれえなんてことはねえ」

オルガはそう言つて身を起こし、女を一瞥する。

軍服らしき服を着た、眠そうな女だった。先程起き上がったときにベッドから転げ落ちたせいで女の顔が見えなかった。

「だ、誰だ……あんた？」

「……ん？ああ自己紹介がまだだったね……。ここで解析官をやっている、村雨令音だ。免許こそ持っていないが、簡単な看護くらいはできる」

「(ま、まるで安心できねえ)」

「俺は鉄華団団長、オルガ・イツカだぞ……」

オルガは周囲を見回す。

周りには医療器具やベッドが並んでいた。

最初はそのあと病院か医療機関にでも運ばれたと思っていたが、天井を見ると、病院などにはあまり相応しくない、鉄パイプや配線が剥き出しになっていた。

それに、無免許の看護師がいる時点でそうではないのだろう。

「ところで何処ですか？(こら)」

「……へフラクシナスの医務室だ。気絶していたので勝手に運ばせてもらったよ」

「ああ？へフラクシナス……？てか気絶してそうだ。確か俺らは戦いに巻き込まれて」
頭をくしやくしやくかきながら、声を発する。オルガの中で違和感があった。

「あつ、土道は無事なんですか!?それに琴里も!あの馬鹿、空間震警報が鳴ってんのに街んなかにいて……」

「……落ち着きたまえ。彼なら君の隣のベッドで寝ているよ。起こしてあげるといい。それに、もう一つの件だが、彼女は無事だ。」

「本当ですか!？」

「君たちに紹介したい人がいる。悪いが、どうも私は説明下手でね。詳しい話は指令に聞くといい」

言つて令音は出入り口へと向かった。

オルガは士道を起こして、令音のあとについていった。

向かう最中オルガは士道に琴里は無事らしいということと話した。

道中で令音が三十年間も眠れておらず、大量の睡眠薬を躊躇いなく飲んでいたりして、この人本気で死ぬんじゃないかと思つてた。

そんなことがありながら、着いたのは電子的なパネルのついた扉だった。

令音がパネルを操作する。

するとパネルが軽快な音を鳴らし、扉がスライドする。

「……さ、入りましたまえ」

言われてオルガと士道は扉の中に入る。

扉の向こうには、船の艦橋のような場所だった。

半楕円形の空間が広がっており、その中心には館長席と思しき椅子が設えられている。さらに滑らかな階段が延びており、そこから下りた下にはコンソールを操作している

クルーたちがいた。

「……連れてきたよ」

「ご苦労さまです」

館長席の横に立った男が礼をする。

ウェーブのかかった髪に、日本人離れた鼻梁。耽美小説に出てきそうな風貌の男だった。

「初めまして、私はこの副司令、神無月恭平と申します。以後お見知り置きを」

「……俺は鉄華団団長、オルガ・イツカだぞ」

「……はあ」

オルガはいつもの調子で自己紹介をして、土道は小さく礼をした。

神無月は体を館長席に体を向け話しかけた。

「司令、村雨解析官が戻りました。」

するとこちらに背を向けていた、館長席がこちら側にゆっくりと回転した。

「……歓迎するわ。ようこそ、ヘラタトスクへ」

「……」

そこには『司令』と呼ばれるには少々幼いような声を響かせた少女と無言で館長席の横に立っていた少年がいた。

大きな黒いリボンで括れられた二つの髪と小柄な体軀でどんぐりのような丸っぽい目。口にはチュッパチャプスをくわえていた。

一方少年は黒髪で中性的な、少し小柄な体軀をして、こちらをジッと見ていた。士道とオルガは眉をひそめた。そこにいた少し女と少年はどう見ても

「…… 琴里？」

「…… ミカ？」

そう、少年の方は士道とオルガの友人である

三日月・オーガスだ。

そして恰好、口調、それに全身から発する雰囲気など、違いは数あれど、その少女は間違いなく士道とオルガの可愛い妹・五河琴里だった。

◆ 陸上自衛隊・天宮市駐屯地

「…… 五河士道、オルガ・イツカ」

鴛一折紙は小さく呟き、頭の中で彼の姿を思い浮かべた。

間違いなく、今朝彼と共にいた少年だ。

何故、彼らがあの場にいたのか気がかりだった。

あの戦場で〈プリンセス〉とASTとの戦いに巻き込まれたはずだ。

しかし、いつの間にかいなくなっていたのだ。

もしかしたら、あの場から逃げることができたか、それとも……。

いや、そのようなことを考えても拉致が明かない。

折紙はその考えを脳裏から振り払った。

しかし折紙は先程の戦闘を思い起こし、小さく呟いた。

「また、邪魔された。」

先程の戦闘で上空から飛来した巨大ロボット。

折紙たちがあのロボットを見たのは初めてではない。

モビルスーツ

世界を殺す災厄、精霊の観測から十年後に造られた対精霊用のパワードスーツ。

モビルスーツは着成型接続装置《ワイヤリングスーツ》と異なり、魔術師《ウィザード》の適性がなくても運用することができる。

そのため対精霊部隊には基本的にモビルスーツが配備されている。

その中でも初期に造られたといわれているモビルスーツ。

それがガンダムフレーム。

悪魔の名を冠するモビルスーツ。

ガンダムフレームが設計された当時は技術もあまり発展していなかったため、その数

も僅か72機だった。

しかし、その72機のうちほとんど機体が搭乗者への負荷が大きいなどの様々な理由で後に解体されることになる。

だが、1年ほど前から失われたはずのガンダムフレームのうちの一機がこの天宮市で精霊の出現とともに出現し、魔術師ウィザードに敵対していた。

そのため精霊討伐への障害になると上層部は判断し、件のガンダムフレームには現在、破壊命令が出ていたのであった。

しかし、折紙はこの命令に対し、今一つやる気が見いだせなかった。

今回の件だってそうだ。〈プリンセス〉との戦闘で上空から飛来したガンダムフレーム。

ASW—G—08 ガンダムバルバトス。

この機体名はガンダムフレームを開発した組織からの情報提供で得た名前だ。

この機体は一度ならず、何度もASTと精霊との戦闘に割り込んできた。

もちろん折紙もこの機体に挑んだことはある。

だが、ガンダムに対して並大抵の装備の攻撃では効いている様子ではなかった。

しかし敵はガンダムフレームだけではない。

世界を殺す災厄・精霊。

折紙たちがいく束になってもガンダムフレーム以上に傷一つ、つけることが叶わない異常。

どこからともなく現れ、気まぐれに破壊を撒いていく、天災的怪物。

「……………」

結局、今日の戦闘もガンダムの乱入によって、精霊の消失ロストにより幕引きとなった。

消失ロストといつても精霊が死んだわけではなく、この世界とは違う別世界・臨界に移動した。

要は、精霊に逃げられたのである。

そしてまた、ガンダムも精霊の消失ロストとともにいつの間にかその姿を消していた。

書類上はASTの働きによって精霊とガンダムの撃退に成功した、ということになるだろうが——折紙を含め現場で直接戦っている隊員たちは皆、理解していた。

ガンダムのパイロットがこちらをどう思っているかは分からないが、少なくとも精霊は、こちらを何の脅威とも思っていないことは分かっていた。

「……………っ」

表情を変えず、折紙は奥歯を強く噛み締めた。

「折紙」

格納庫の奥から声が響いてきた。

無言で振り向くと、そこにはAST隊長日下部燎子一尉が立っていた。

「ご苦労さん。よく一人であの精霊とガンダムの二体を撃退してくれたわね。取りあえず、後で離脱した二人には私からきつく言っとくわ。全く折紙一人にあの二体を任せるなんて」

「撃退なんて、していない」

折紙は静かに言う、燎子は肩をすくめた。

「上にはそう伝えときゃなんないのよ。モビルスーツ相手に撃退でも成果は出てますって言わないと予算が下りないの」

「……………」

「そう怖い顔しないの。褒めてんだから。実際あんたがモビルスーツを相手にしなきゃ、それこそ死んでた人間もいたかもしれないの。あんたは充分頑張ってるわよ」

言つて、息を吐く。

「ただねえ」

燎子は視線を尖らせ、折紙の頭を掴んで自分に向けさせた。

「あんたは無茶しすぎ。——そんなに死にたいの？」

「……………」

燎子は折紙に視線を向けたまま言葉を続けた。

「あんた、自分がどんな怪物相手にしてるかわかっているの？バルバトスはただのモビル

スーツじゃない、ガンダムフレーム。うちにあるモビルスーツと全く違うものよ。そのうえそこら中を破壊する天災の精霊も相手にしなきゃいけない。最低限被害は最小限に抑えなさい。少なくともこっちは化物を二体も相手にしてるんだから無駄な危険は起こさないこと」

「……違う」

折紙はまつすぐ燎子の目を見つめ返すと、小さく唇を開いた。

「精霊を倒すのが、ASTの役目」

「……………」

燎子が眉根を寄せる。

彼女はASTの隊長。対精霊部隊の名の意味を隊長として最も理解しているはずだった。

だからこそ彼女は言ったのだ。

自分たちには、被害を抑えることしかできないのだと。

「……私は精霊を倒す。そのためにガンダムが私の前に立ちはだかるといふのなら、それさえもねじ伏せてみせる。」

「……………」

燎子は息を吐くと、折紙の頭から手を離した。

「……別に、あたしは個人の考えに口出すつもりはないわ。あんたの好きにしなさい。——でも、戦場で命令に背くようなら、部隊から外すわよ。さつきも言ったけど、あたしたちはガンダムと精霊の二つを相手にしないと、いけないんだから」

「了解」

折紙は小さく答えると、身体を起こし、そのまま歩いていった。

第五話 ラタトスク

「——でこれが精霊と呼ばれてる怪物でさつき消滅^{ロスト}、つまり消えちゃったわ。で、こつちが——」

「ちよ、ちよつと待った！待った！」

説明を始めた琴里に土道は声を上げた。

「何よ？折角司令官直々に説明してあげてるのに。もつと光栄に咽び泣いたらどう？今なら特別に足の裏くらい舐めさせてあげるわよ？」

「ほ……ッ本当ですか!？」

喜んで声を上げたのは、琴里の隣に立っていた神無月だった。琴里は即座に、「あんたじゃない」と鳩尾に肘鉄を放つ。

「ぎやおおッ……！あ、ありがとうございます……！」
神無月は満足げに倒れた。そんなやりとりを眺めながら、土道とオルガは呆然としていた。

「……こ、琴里……だよな？」

「あら、妹の顔を忘れたの、土道？そしてオルガ？」

「呼び捨てかよッ！」

「物覚えが悪いとは思っていたけど、さすがにここまでとは予想外だったわね。今から老人ホームを予約しておいた方がいいかしら」

果たしてどうなっているのだろうか。そう思いながら、士道とオルガは頬に汗を一筋たらしめた。

士道とオルガの可愛い妹は、お兄ちゃんたちのことは呼び捨てにしないはずだが。

「お前、何してんだ？ここどこだ？それに――」

琴里が、はいはい、と言いながら手を広げて士道の言葉を止めさせる。

「とにかく、詳しいことはまた後で説明してあげるから、次のことだけ理解なさい。」

言つて、琴里が艦橋のスクリーンを指さす。

そこには、先程士道とオルガが遭遇した黒髪の少女と、巨大なロボット、機械の鎧を纏った人間たちが映し出されていた。

「二つ、彼女は、精霊。本来この世界存在しないモノであり――出現するだけで己の意思とは関係なく、辺り一帯をドーンと吹き飛ばす。」

「ドーンと……」

オルガは渋面を作った。

すると、琴里が「頭、悪いわね」とかたをすくめる。

「つまり、空間震って、呼ばれてる現象は、彼女みたいな精霊が、この世に現れるときの余波だって言ってるのよ」

「な——」

士道とオルガは眉根を寄せた。

空間そのものが揺れる空間の地震。空間震。

人類を、世界を蝕む蝕む理不尽極まりない災害。

先程の空間震もあの少女が引き起こしたというのか——？

「二つ目、これはA S T。陸自の対精霊部隊。精霊が出現したらその場に急行し、処理する。要はぶつ殺す」

「………ッ！」

「なんだと………!?!」

別に琴里の言葉を予想していなかったわけではない。だが、いざその言葉を聞いた途端に士道とオルガは心臓を掴まれるような感覚が襲った。

士道とオルガは琴里の言っていることは理解できた。精霊。確かに人類にとっては空間震を引き起こす危険な存在ではある。

そのとき、ふと、士道の脳裏に先程の少女の台詞が浮かんできた。

（おまえも、私を殺しに来たのか？）

少女の言葉の意味が理解できた。

そしてあのときの顔の意味も。

「三つ目、あなたたちが見た巨大なロボット。モビルスーツ。これは元々対精霊用に作られた兵器。まあ今回はASTはモビルスーツを出してはいなかったけど。あなたたちが見たのはガンダムバルバトス。通常のモビルスーツとは異なるガンダムと呼ばれる機体よ」

「……」

オルガは先程の情景そしてを思い起こす。悪魔のように戦うロボット、ガンダム。

だがオルガの中で違和感が引つかかる。

オルガは琴里に問う。

「待ってくれ、んじやあなんで本来対精霊用に作られたモビルスーツがなんで精霊を庇っているんだ……?」

オルガは表情を歪めながら言うと、琴里は興味深そうにあごに手を当てた。

「まあ、確かにその点については気になると思うわ。なんで本来精霊を倒すために作られたはずモビルスーツが庇ってるということね。それはバルバトスを『ラタトスク』が所持しているからよ。」

「んじやあ、パイロットはどうなる? あんなにデカイやつを器用に動かせるやつがいな

いとバルバトスはあるな速い動きできねえだろ。あれを――」
「皆まで言わなくても分かるわよ。つまり、あんたはバルバトスのパイロットが誰なのか、聞きたいのね。それなら、そこにいるじゃない。」

「ん？」

琴里は隣にいる少年を指さす。

それは士道とオルガの親友である、三日月・オーガスだった。

三日月はこちらを振り向いた。

「……ミカ？あれはおまえが動かしていたのか？」

「うん」

三日月はオルガの質問に対し、短くこたえる。

「ええ、三日月はガンダムバルバトスのパイロットよ」

「……」

オルガは頬に汗を一筋たらしめた。

まさか、自分の親友があのおボに乗り込んでいるなんて思ってもいなかった。

「三日月、お前」

「なあ、ミカ」

「ん？」

オルガが口を開き、三日月はこちらを振り向く。

「お前も精霊のことは知ってガンダムに乗っているのか？」

「うん」

オルガの質問に対し、またも三日月は短く答える。そして三日月は続ける。

「俺はあれを見たとき助けたいって思った。自分の意思でもないことで怯えているのを見て放っておけなかったから」

三日月はオルガの目をじっと見つめて言う。

すると土道が口を開いた。

「・・・な、なあ三日月」

「どうしたの？」

「お前と琴里ははいつ精霊のことを知ったんだ？」

「それは・・・」

「はいはい、その話はまた今度にして、次よ」

三日月が答えようとした途端琴里に遮られてしまった。

そのまま琴里が続ける。

土道は少し腑に落ちなかったが、そのまま琴里の話を聞いた。

「四つ目、精霊の対処方法にはASTのやり方の以外にもう一つあるわ。それには土道

とオルガの力が必要不可欠なの」

「え？俺たち？」

士道とオルガは互いの顔を見る。

三日月のことについては聞きたいことは山ほどあったが、なんとかこらえて、話を進める問いのみを士道が発する。

「……んで、その方法ってのは、何なんだよ」

言うと、琴里は小さく笑みを浮かべた。

「それはね」

そしてあごに手を置き、

「精霊に——恋をさせるの」

「……はい？」



「だくかくらく、さつきから言ってるでしょ！あんたたちはコンタクトして、精霊に恋をさせなさいって！」

「いやだから、なんで精霊に恋をさせれば、空間震が無くなんだよ！大体この組織が俺たちの為に作られたってどういうことだよ！」

「あんたたちは特別なの！」

「……何これ？」

「……さあな？」

オルガは琴里の話したことの意味が分からず、琴里とオルガはケンカをしていた。士道と三日月は二人のケンカを見ていた。

なぜこうなってしまったかというところ、それには先程の琴里の言葉の続きにあった。

二つ目の精霊の対処方法は、対話によつて解決させるということ。ASTが武力での対処ならば、《ラタトスク》は対話による対処だ。

だが、問題はここからだ。その対話の手段がまさかの『精霊に恋をさせる』というものだった。

そして《ラタトスク》はなんと士道とオルガのために設立されたというのだ。

士道とオルガはなぜなのか、納得はいかず、オルガが琴里にそのことを話した結果現在に至る。

琴里がオルガにビシツと指差す。

「いいから覚悟決めなさい！このカミキリムシ！とりあえず、精霊をデートしてデレさせるのよ！」

「いやだからって……」

「あなたの意見は聞いてないの。返事はYESだけよ」

「……ぐっ」

さすがにそう言われ、オルガもぐうの音も出なかった。

オルガは壁を向いた。そして軽く、壁を蹴る。

オルガは小声で不機嫌そうに口を開いた。

「……ほんつと上から目線だよな」

「……はあ、オルガ」

琴里は息を吐くと、司令席から立ち上がり、背中を向けているオルガを呼んだ。

「……なんだよ」

不機嫌そうにオルガは振り向く。すると……。

琴里がオルガの頬を殴った。

「ぐはっ！」

オルガはそのまま後ろに倒れ込み、いつもの台詞を言う。

「……だからよ、止まるじゃねえぞ……」

「司令の悪口を言った罰よ。少しは反省しなさい」

琴里は倒れこむオルガを一瞥し、土道を見ながら言う。

「土道」

「お、おう」

「どうするかは、あんたの自由だけど、あの子を助けたいのならば、手段は選んでいられないんじゃないの？」

琴里は不適な笑みを浮かべる。

実際その通りだった。

ここまでされたら、士道に逃げ道はなかった。

だが士道はもう一度あの少女と話をしたかった。

もしもなんの後ろ盾を持っていない士道が、少女と話したくても、無理な話だ。

だが、ASTのやり方は論外だったし、この方法以外にないのも事実だった。

そのとき、士道は決意した。

「もう、あの子にあんな顔させたくない」

「…… わかったよ」

士道は苦々しくうなずくと、琴里は満面の笑みを作った。

「…………… よろしい。んで、さつきから倒れてるあんたはどうすんの、オルガ？」

すると後ろのオルガが体を起こした。

「…………… はあ」

オルガは一つ大きな溜息を漏らし、そして声を張り上げた。

「ああ解ったよ、救ってやるよ！どうせ他に方法がねえんだ、救ってやろうじゃねえか！

途中にどんな地獄が待ってようとあいつを救ってやるよ!」

「いいわ。さっきの発言は見逃してあげる。今までのデータから見て、精霊が限界するのは最短でも1週間後。早速明日から訓練よ。」

「は?くんれん...?」

士道は呆然と呟いた。



「ああそうだ、あなたたちちよつと待ちなさい」

「・・・どうした?」

士道たちが帰ろうとした途端に背後から琴里が声をかけてきた。

とつきに声をかけられ、士道たちは振り向く。

「あなたたちにもう一つ話さなきゃいけないことがあったわ」

「なんだ?」

士道が訊くと、琴里が話始める。

「オルガについてなんだけど。オルガあんた、さつきへプリンセスの攻撃をまともにくらっていたわよね?」

「そういえば、オルガ大丈夫なのか?」

確かにあのときは色々あつて気にしてなどいらなかったが、改めて考えてみると、

なぜ精霊の攻撃をくらってまともに生きているのか疑問に思う。

「それについてなんだけど。あんたはあのとき一度死んでる」

「…………… なっ?」

琴里の発言にオルガと土道は目を白黒させる。

「…………… 俺が…………… 死んだ?」

「ど、どういうことですか!？」

何を言っているのだと戸惑いつつ令音に問う。

それはそうだ。誰しも自らが一度死んだなど急に切り出されても信じれるはずがない。

「…………… 君は既に一度死んでいる。安心してくれ。一度死んでいるとは言っても、本当に死んでいる訳ではない。」

「…………… は、はあ」

そう言われても、安心できなかった。自分が死を経験しているとすると少し恐怖を覚えた。

「…………… 君の体は特殊だね。外部からの衝撃を受ける際に一度リセット・つまり一度死ぬ。君にも心当たりがあるんじゃないか」

「…………… そんなこと、あ」

「心当たりがあるのか？」

「そういえば」

今朝琴里に踏まれたとき、精霊の攻撃を食らったとき、先程琴里に殴られたときも意識がなくなつたのである。

「……一度リセットされた君の肉体は自動的に君の体を癒す。最終的に君の体は完全に修復。それが君の体に備わっている能力だ。しかしその力は君の気力と体力が尽きなければ——という話だがね」

「……いやいや、待ってくれ！なんで俺にそんな力があるんだよ!？」

「そんなの知らないわよ。だけどオルガのその力は精霊との対話にも使えるかもよ」

「それはどういうことだよ」

「あんたのその体質なら精霊の攻撃を受けても容易にコンタクトができるはずだよ」

「それは俺が盾になれってことか？」

「まあそうとも捉えられないわね。でもあんたがあの子を救いたいって言ったんでしょ。だったらやって見せなさい」

「……………」

なんか納得出来なかった。自分の生死がなんとかなるなどすこし納得いかない。

だが——精霊を救いたいという気持ちはオルガにとつても同じだ。

彼女のようには悲しそうにしているのを見てみると、それが例え他人であろうと、救ってやりたい。

「……よし」

士道と同じ重い荷物を背負い込んでしまったが、一度決めたからには絶対救ってみせる。

オルガはそう深く心に刻んだ。

第六話 訓練

「……ふあゝ」

「悪いな琴里。こんな時間にまで起こしちゃまって」

「別にいいわよ」

「それで話って何なんだよ。オルガ」

「……………」

時刻は午後十一時を回った。

五河家のリビングには、四人の人間が集まっていた。

リビングには土道、オルガ、琴里、そして令音が集まっていた。

今こうして集まっているのは、先程オルガのことを話してから戻ろうとしたときである。

「そーいや、三日月はどうした？」

「全く急に話があるなんて言い出して、まだ決心していなかったの？」

「いや、そのことじゃないんだ」

「んじゃ何よ」

「ふう、よし話すか」

オルガは琴里と相対して座っていた。

その後オルガは自分の見た情景について話した。

自分の過去である。

話の内容としては火星圏での開発が進み、オルガたちは火星で〈ヘヒューマンデブリ〉という奴隷のような扱いを受け生活していたという事。

ガンダムフレームは元々三百年前に起きた〈厄災戦〉という戦いで開発された機体だという事。

オルガと三日月は〈鉄華団〉という少年だけで構成された組織に入っていたという事。

三日月はバルバトスに乗り込み、ギャラルホルンと戦っていたという事。

そして――オルガと三日月は一度死んだという事。

他にオルガたちが知っているガンダムフレームの名や鉄華団のことなどについて話した。

全部を話したわけではないが大方説明した。

「……」

皆困惑している様子だった。さすがの琴里もこの話を聞いてみて唖る。

琴里はあごに手を置いた。

「…… つまりあんたと三日月は鉄華団？という組織に入っていて、ガンダムフレームは本来三百年前に造られた兵器のことで、あんたたちはそのことギャラルホルン？っていう組織と戦って死んだということかしら」

「ああ、そういう事だ」

「…… ふむ、にわかには信じ難いがね」

「そう簡単に信じられんないのも分かります。だけど、この世界は俺たちのいた世界じゃないと思うんです」

「…… どうして？」

琴里は頬杖をつきながら、訊いてくる。

「さつきも話したけどよ、この世界じゃ人が火星に住めるようになっているところか、話によるとまだ人類は火星に行ったことすらないらしいじゃねえか。なにより」

「なにより？」

「俺たちの知っている限りだと、俺たちのいた世界では空間震なんて災害なんぞ、聞いたことすらなかった。それが俺たちの知っている世界じゃないっていうなよりの証拠だ」

「……………」

「……」

「……」

「……………」全部が嘘というわけではないはずだ。なにより三日月は初めてバルバトスに乗ったとき、一度乗ったことがあるかのように乗りこなしていた」

「そうだったのか……………」

「先程三日月から聞いたが、三日月は生まれながら、鉄華団のこともバスケットや昭弘、マクギリスのことを覚えていた。」

「理由は分からないが、どうやら今の所、このことを忘れていたのはオルガだけらしい。」

「いやいやちよつと待てよ！」

「すると、先程まで黙っていた土道が声を上げた。」

「それって可笑しくないか？」

「可笑しいって何がだよ？」

「だってオルガと三日月は鉄華団に入ってギャラルホルンっていう敵と戦って死んだんだろ？ だけど何でこうして普通に生きてるんだよ？」

「確かにね、オルガはともかく三日月が一度死んだのだったら三日月がこうして生きていること自体可笑しいはず……………」

「……成る程な」

オルガは眉を潜めた。

士道たちと日常を過ごさせている。そのように考えて見ると士道の言う通り可笑しい。

それでは今オルガたちが生きているこの世界は一体何なのだろう。

一度死んだはずの人間がこうして生きています。

そしてモビルスーツが存在している。

しかし、ギャラルホルンも鉄華団も無く、今の人類は火星圏の開発すら進んでいない。

自分たちのいる世界と全く異なっている。

もしかしたらギャラルホルンと鉄華団のどちらかの影響でモビルスーツが開発されたのではないかと思った。しかし、先程の反応を見る限り、琴里たちは両組織のことをオルガの説明で始めて知った様子だった。

「……《異世界転生》というものかもしれないね」

「《異世界転生》？」

「ああ、君たちは一度は死んだのだろうか？そんな君たちが生きています。それに、君の言う鉄華団などの組織を私たちは知らない。それに三百年前も前のその〈厄災戦〉という争いも少なくともこの世界では起きていない。もしかしたら別世界に《転生》してしまっただのかもしれないね」

「別の世界か……」

しかし令音の考えにも一理ある。

オルガたちがいた世界が元の世界と考えると、今この世界は別世界という解釈がとれる。

オルガたちのいた世界では、モビルスーツは三百年前の〈厄災戦〉で使用されたモビルアーマーという兵器を倒す為に造られたものだ。

しかし、この世界ではモビルスーツは精霊を殺す為の兵器となっている。

戦闘という目的で使われているのは一緒だが、戦う対象が丸つきり異なっている。

だがしかし、それを言ってしまったら、なぜこの世界にモビルスーツが存在する？

思考を張り巡らせるが、一向に答えが見えない。謎が謎を生むとはまさにこのことである。

「……今はその話をしても仕方ないわ。令音の言う通りあんたたちが一度死んで生き返る《転生》というものかもしれないし。第一何もわからないのが現状だしね」

「……そうだね、オルガ」

「はい」

「このことを話しても構わないかね？ 勿論一部の人間にしか知らせないよ」

「別に構いません」

「決定ね。取り敢えずあなたたちは今日はもう寝なさい。さつきも言ったけど、あんたたちは明日から訓練なんだから」

「そうだな」

（そのことを考えても仕方ねえ。それについてはまた後でも考えられる。）
オルガはそう心の中で呟いた。



次の日、来禅高校、士道たちのクラス二年四組にて。

「ふあ〜」

士道は一つを大きなあくびをした。

それはそうだろう。士道は琴里に早く寝るようには言われたが、結局あのあと一時間も出来なかったのである。

士道たちが精霊という存在と（ヘラタトスク）という組織のことを知り、夜中にオルガと三日月は別世界の人間かもしれないと云われ、頭の整理が全く出来なかった。

強烈な出来事があった士道は気怠い感覚がのしかかる中で学校にいた。

「えっと、新学期二日目ですけども今日からこのクラスに副担任の方がついてくれることになりました。」

士道たちの担任である岡峰珠恵先生、こと通称タマちゃん先生がいつもの間引きした

ような声で言ってきた。

「先生、入ってきて下さーい」

タマちゃん先生が言うのと、クラスのドアが開き、一人の女性が入ってきた。

「……村雨令音です。担当教科は「物理」よろしく……」

「ぶっ！」

土道とオルガはその場で思いつきり噴き出した。それもそのはず副担任はまさかの〈ラタトスク〉の解析管の令音だった。



場所は移り、現在土道とオルガそして三日月令音に呼び出され、四階の物理準備室にいた。(令音には敬語でなくていいと言われたので、オルガはほぼ敬語使わなくなつた。)

「……令音さん、何やってんだあ！」

「……ど、どういうことですか？村雨解析管」

「令音で構わないよ、しんたろう、オルガ」

「し、しかあつてねえ！」

「……ああ、すまないね、シン」

「直す気ゼロか！」

士道が声を上げて叫ぶが、どうやら令音は士道の言葉など聞いていない様子だった。

「教員として、君たちの傍にいた方が何かと都合が良いからね」

「そんなこと少し考えれば分かるでしょ。このこのミイデラゴミムシ」

「ヴウ！」

オルガは呻き声を上げると、なぜか血が流れ出し、左手を伸ばしながら倒れ込む。

そしていつもの台詞を残し死んだ。

「《……だからよ、止まるんじゃねえぞ……》」

「オ、オルガ!？」

「うむ、今のは恐らく琴里の罵声によるメンタルブレイクでの死亡だろう」

「お前そんなにメンタル弱かったか!?! ってか何冷静に死因の解説しているんですか!？」

そんなやり取りをしていると、先程発したセリフで体が治ったオルガが立ち上がった。

「大丈夫か?」

「……こんくれえ、なんてことはねえ」

「俺は別に気付いていたけど」

三日月が淡々とした調子で言ってくる。

その言葉を聞いて、三日月は適応や理解が早いと改めて思ったオルガたちであった。

「やっぱりすげえよ、ミカは。」

「ほんとにな、そういや琴里、なんでお前ここにいるんだよ。中学どうした。」

「ちゃんと手続きしてきたわよ」

そう言うのと、琴里は足を指す。よく見ると、来賓用のスリッパと入校証をつけていた。それで、俺とオルガに何させる気だ?」

「そうね、あんたたちには調きよ……ゲフンゲフン。昨日言った訓練をしてもらうわ。」
「ため今調教って言いかけただろ」

「気のせいよ——オルガ」

「どうした?」

「少し令音の目の前に立ってくれるかしら」

「え?なんでだよ?」

「いいから」

オルガは首を傾げたが、琴里に指示されるままに令音の目の前に立った。

「こうか?」

「ええ」

すると、琴里がいきなりオルガの頭を押し、令音の胸に押し付けた。

「……………ッ!?!」

「……ん？」

令音が、不思議そうに声を発した。

オルガの両頬を柔らかい感触が襲い、脳がとろけるようなほどのいい匂いが鼻腔を駆け巡る。

「……って、おい！」

士道はすぐさま琴里の手を退かすと、オルガの顔をバツと上げさせた。

「大丈夫か……？……んなツ！」

士道はオルガの顔を見ると、息を飲んだ。

オルガは何かを悟ったような表情になっていた。

試しに士道がオルガの顔の前で手を振ってみると、オルガは前方に倒れ込んだ。そしていつもの台詞を言う。

「《……だからよ、止まるんじゃねえぞ……》」

「はん、オルガダメダメね」

琴里が嘲るように肩をすくめる。そして倒れていたオルガが立ち上がった。

「……おい、琴里でめ何しやがる……ッ！」

「チエックよ、チエック。あんたが女性との接し方で緊張してないかの」

「いや、こんなこと滅多に起きることでは無いと思うけど……」

少なくとも、このようなことは日常では起きないことだ。少なくとも、士道はこんな事態見たことない。

「ついでに士道も大丈夫か、確認しなくちゃねえ」

そう言つて琴里は満面の笑みでこちらを見てきた。

「へっ……？」

士道が間の抜けた声を出した後どうなったかは大体予想がつくだろう。



「はあ、はあ、短時間だけどつと疲れた気がする……」

「これで分かったでしょ。あんたたちは女性への対応に慣れておかないといけないの」

「だからってこれはねえだろ……」

「対象の警戒を解くため、ひいては好意を持たせるためには、まず会話が不可欠だ。大体の行動や台詞は指示を出せるが……やはり本人が緊張しては話にならないからね」

「だからあんたたちにはこれをやってもらおうわ——令音。」

「ああ」

令音が短く答えると、机の上にあるモニタの電源を入れ操作する。

すると画面に可愛らしくデザインされたヘラタトスクの文字が表示され、カラフル

な髪の少女たちが順番に表示され、タイトルと思しき『恋してマイ・リトル・シドー』というロゴが見えた。

「これってギャルゲーかよッ！」

「ま、まさかこれか……？」

「……………」

「……………」

「……………」

そのまま数秒が経過した。

「……………」

「スルーかよッ！」

士道とオルガは声を上げた。もはや尊敬するレベルのスルースキルだ。

するとオルガは三日月がジツとこちらを見ていることに気づいた。

「あ？てかミカはやらないんすか？」

「彼は既にこのゲームをクリアしているからね」

「えっそうだったんですか？」

「ああ、確か彼は……二日でクリアした。」

「早っ！」

オルガと土道は声を合わせて叫ぶ。

土道たちは腑に落ちないものを感じつつも、コントローラを手を取った。

「仕方ねえ……気引き締めていくぞ。土道」

「……ああ」

そうやり取りすると、二人はスタートボタンを押した。

——これが二人にとって地獄のような日々の開幕とは知らず。

第七話 戦争（デート）の前の

ガタンツッ！

「……ヒツ」

オルガは机を手を叩きつけて、無言で立ちあがった。

「さすがにオルガでも限界か……」

「……いやったあああああ!!!」

「へ?」

オルガがいきなり大声を上げて叫びだしたのである。

オルガの目元を見ると令音レベルの濃いクマが作られていた。そのままオルガはい

つもの台詞を残し横に倒れ込む。

「……止まるんじゃねえぞ……」

オルガが倒れ込む様子を士道と琴里は怪訝そうに見ていた。

琴里と令音の強化訓練が開始されてから、十日が経過した。この数日間オルガたちにとつて地獄のような日々だった。オルガたちがこのゲームをプレイしている際に間違った選択肢を選ぶと、キャラクターシチュエーションの行動が突っ込み所満載で二人

はほぼ毎回突っ込みを入れながらプレイしていた。さらに選択肢を間違えれば二人の黒歴史が世界中に公開されてしまったりと、大変だったのである。それにより士道たちの精神はゴリゴリと削れていった。

オルガの使用していたパソコンを覗き込むと、ゲームのハッピーエンド画面になっていた。恐らくさつきのかげはゲームをクリアしたことによるあまりの嬉しさによるものだろう。

「オルガもクリアしたのか、よし俺も頑張るか」

士道はそう言うのとまた画面に顔を向けた。

数十分後。

「どんなもんじゃーいッ!」

士道もようやく、ゲームをハッピーエンドでクリアをすることができた。オルガがクリアした後も何度か選択肢を間違えてしまった為、数十分も掛かってしまったのである。三日月はこれを二日でクリアしたと聞いたが、信じられない。因みにオルガはクリア後しばらく仮眠をとっていた。

そこからさらに数分後。

「それで、士道、オルガ、そして三日月。あんたたちには次の訓練をもらおうよ」

「……」

琴里は神妙な面持ちで言ってくる。士道とオルガは息を呑み、三日月はポツケから火星ヤシを取り出して口に放り込んだ。

「…… 次の訓練って、なんなんだよ」

士道は不安な気持ちを抑えながら問う。

「…… そうね、単刀直入に言うと、あんたたち三人はこれから女性を口説きなさい」

「はあッ!」

オルガと士道は口を揃えて叫ぶ。

「どうかしたの?何か問題でも?」

「問題しか無いわ……!大体なんで急に女性を口説けってなんだ!」

「…… まあ、落ち着きたまえシン。それについてはちゃんと理由がある」

「へ?」

「…… 本番、精霊が出現したら、君たちは小型のインカムを耳に忍ばせて、こちらの指示に対応してもらおうことになる。そのために実戦を想定して訓練しておきたかったんだ」

「…… なるほど、って納得いきませんよ!」

「仕方ないでしょ、実戦ではもつと難物相手に挑まなきゃならないんだから」

「……くッ」

琴里の言う通りである。本番では精霊相手にコミュニケーションをとらなければ、いけないのだ。そう考えれば女性を口説く訓練をしなければいけないのかもしれないが、士道は納得いかなかった。

「いやでも、待ってくれ」

「どうしたの？」

先程から黙っていたオルガが口を開いた。

「さっき三人って琴里、お前言ったよな？」

「そうよ」

「いやでもそれって可笑しくねえか？」

「どこがよっ…」

「恐らくお前の言った三人って俺と士道、そしてミカだろ？ だけど精霊とコンタクトするのは俺と士道だけなんだろ？ なのにギャルゲーの時もそうだけど、ミカに訓練を参加させる意味があるのか？」

確かにその通りだ。主に士道とオルガの二人が精霊とのコンタクトを行うとなると、三日月は何故訓練をしたのだろうか。

「なるほど、確かにあなたの言うとおりよ。だけど意味があるから三日月にも参加させ

てるの。三日月にも一応レディとの接し方を覚えておかないとね」

琴里はそうオルガの問いに答える。

「…… ああそうだ、君たちに渡すものがあつた」

言うのと令音は机から何かを取り出し、土道たちに手渡した。次いでマイクと、ヘッドフォン付きの受信機らしきものを机に置く。

「…… 何これ？」

「…… 取り敢えず、付けてみたまえ」

言われるがままに土道たちは右耳にはめ込む。

すると令音はマイクを手に取り、囁くように唇を動かした。

「…… どうかね、聞こえるかな？」

「うおっ!？」

「ヴァアアアアア!?! ヴウ!!」

突然耳元で令音の声が響く。土道は肩をびくつと震わせません跳び上がり、オルガは驚きの余り、椅子に足をぶつけてしまった。そのままいつもの台詞を言つて倒れる。

「…… だからよ、止まるんじやねえぞ……」

「…… うむ、驚かせてしまったかね？取り敢えず様子を見るにちゃんと通っているね。音量は大丈夫かい？」

「は、はあ…… まあ一応……。それよりもオルガが……」

土道が肯定すると、オルガが立ちあがる。

「…… なんかもう、慣れた気がする……」

「お前もう重症だろ」



その後土道は岡峰珠恵教授、オルガは女子生徒を三日月は折紙を口説くことになった。

土道は珠恵教授を口説いていたが、もうすぐ三十代の先生は令音の指示で土道が言った『結婚』という単語に思いつき切り食いつかれてしまい、土道はなんとか振り切つて来た。

オルガは女子生徒と言われ、亜衣麻衣美衣を口説いたが、なんとというか会話がイマイチ発展せず、そのまま戻ってきてしまった。

そして三日月は――。

「鳶」

「なこ」

「髪型可愛いと思う」

「ありがとう」

「……」

「……」

三日月の相手は鳶一折紙だった。理由としては、彼女と接した数少ない人物が三日月だったからである。だが、お互いあまり口数が少ない性格が相まって、そのまま変な沈黙が流れてしまっていた。

『ちよつと何黙ってんのよ!?三日月!』

「……ごめん、何話せばいいの?」

『いきなり他力本願か、ミカア!』

確かに先程土道が先生を口説いた時は、取り敢えずひたすら褒めていた。恐らくはそれを真似たつもりなのだろうが、急にすれ違った女子生徒の髪型を褒めるのは流石に会話が続くものではなかった。

『……三日月、手伝おうか?』

と、焦れたのか、令音が助け船を出してくれた。三日月は右耳から聞こえる令音の言葉に従い、淡々と声を発していく。

「あのさ、鳶一」

「なに」

「俺、鳶一のこと知ってた」

「そう」

三日月と折紙は素っ気ない声のまま会話を続けていく。

「私も、知っていた」

「そうなんだ、それで俺、鳶一と同じクラスになったのが嬉しくて。ここ一週間ずっと鳶一のこと見てたんだ」

「そう、私も」

完全にストーカーの言う台詞じゃないか。土道とオルガはそう思いながらも三日月の様子を物理準備室からモニター越しに見ていた。

「俺、それだけじゃなくて、放課後折紙の教室で鳶一の体操着の匂いを嗅いでる」

「私も」

「そう、俺たちなんか気が合う」

「うん」

「それじゃ俺と付き合わない？」

『って急展開すぎんだろいくらなんでも！』

もう訓練とかはどうでもよかった。土道はたまらず叫びを上げる。

途中の折紙の返答には驚いたが、それ以上令音の指示とはいえ、三日月の言っていることに正直言って、引いていた。

『…… いや、まさか本当にそのまま言うとは』

『ミカにそのまま言えつつたのあんたじゃねえか!』

オルガは怨嗟を声に乗せて発した。

すると折紙から予想外の返答が返ってきた。

「構わない」

『『……… は?』』

三日月ではなく土道とオルガはインカムの向こうで間の抜けた声を発した。二人の目が点になる。いつの間にか口が半開きになっていた。

ちよつと待て。今この少女なんと答えた? 『構わない』と答えたよな。

ありえない。普通に考えればありえない。だって、数えるくらいしか会話をした男にいきなり交際を迫られて、OKをだす女が普通いるのだろうかいやいやい（反語）。

しかも話の内容としてはずっと見ていただったり、体操着の匂いを嗅いでいたなど、とんでもない変態会話である。普通だったらドン引きされ断られるはずだ。

しかし折紙は『構わない』という答えを返してくるとは想像がつかなかった。土道たちが呆然としている最中三日月が口を開いた。

「どこかに出かけるのに付き合ってくれませんか?」

折紙が小さく首を傾げた。

「そういう意味だったの？」

「どういう意味だと思ったの？」

「男女交際のことかと思っていた」

『……………ッ！』

士道とオルガはまたも呆然とした。

何というのだろう、折紙の口から『男女交際』なんて言葉が出るのは、恐ろしく背徳的な感じがしたのである。

「違うの？」

「ううん、違わない」

「そう」

三日月が顔色一つ変えずに答えると、折紙は何事も無かったかのように首肯する。

士道たちは怪訝そうにモニタを見つめていた。何故この二人は表情一つ変えずにこのような会話を平然とできるのか、正直呆れを通り越して最早尊敬すら感じた。
と。

ウウウウウウウウウ

瞬間空間震警報が辺りに響き渡った。

物理準備室にいた士道たちが目を開いた。

それと同時に、折紙が顔を軽く上げる。

「急用ができた。また」

そう言い残して踵を返して走って行ってしまった。

ほどなくして三日月のインカム越しに声が聞こえてくる。

『三日月、空間震よ。』

「やっぱり精霊……?」

『ええ。出現予測値点は――』

来禅高校よ』



時刻は十七時二十分。

三日月は避難する生徒の目をかいくぐり、来禅高校上空のヘフラクシナスでオルガたちと合流した。

館長席に腰掛け、クルーたちと会話していた琴里が唇の端を上げた。

「――土道、オルガそして三日月」

「うん?」「どうした?」「なに」

「早速あんたたちには働いてもらおうわよ」

「……………ッ」

琴里の言葉に、土道たちは体を硬直させた。

「だけどあんたたちかなりラッキーよ」

「どういうことだ？」

「C Rユニットは、元々屋内での戦闘を目的として作られたものではないのよ。いくら随意領域テリトリがあるとはいっても、屋内では遮蔽物が多く、通路も狭い建物の中では確実に機動力が落ちるし、視界も遮られてしまうわ」

「つまり……？」

「今精霊が屋内にいる以上、下手にA S Tは手を出せないってことよ。だからあんたたちはA S Tからちよつかいなしに精霊とコンタクトができるってわけ。本当にラッキーね」

理屈は取り敢えず分かった。

だが、オルガは琴里の台詞に引っかかりを覚えた。

「琴里、一つ訊きたいことがあんだけど」

「どうしたの？」

「……もし精霊が普通に外に現れたら、どうやって俺と土道とミカをあいつに接触させるつもりだったんだ？」

「A S Tが全滅するのを待つか、ドンパチしてる中に放り込むか、ね」

「……」

オルガは先程よりも今この状況がどれだけありがたいものか改めて実感させられた。すると琴里が口を開いた。

「コンタクトに關しても、安心しなさい二人共。へフラクシナスへクルーには頼もしい人材がいっぱいよ」

「そうなのか？」

土道が訝しげに聞き返すと、琴里が上着をバサツと翻して立ち上がった。

「そうね、例えば」

そう言うと、艦橋下段のクルーの一人をピシツと指さす。

「五度もの結婚を経験した恋愛マスター・〈早過ぎた倦怠期〉川越！」

「いやそれ四階離婚してることだよな!」

「何をしたらそんな離婚でkindだよ!」

「夜のお店のフィリピーナに絶大な人気を誇る、〈社長〉幹元!」

「それ完全に金の魅力だろ!」

「夜の店って……おい」

「オルガがなんか察したんだけど!」

「恋のライバルに次々と不幸が。午前二時の女・〈ネイルノッカー〉椎崎!」

「絶対呪いかけてるだろそれ!」

「そこまでするほど何があったんだよ!？」

「百人の嫁を持つ男・〈次元を越える者〉中津川」

「聞こえは良いけど、それ二次元のことじゃねえか!」

「ちゃんとZ軸のある嫁だろうな!？」

「その愛の深さ故に、今や法律で愛する彼の半径五百メートル以内に近づけなくなった女〈保護観察処分〉箕輪!」

「なんでそんな奴らばっかなんだよ!」

「……なあ、俺もう帰って良いか?」

「……皆、クルーとしての腕は確かなんだ」

艦橋下段から令音が申し訳なさそうにぼそぼそと言ってくる。

「そ、そう言われても……」

『いいから早いところ行つてきなさい。精霊が外に出たらASTが群がってくるわ』

確かに琴里の言うとおりだ。精霊が外に出れば、状況が悪化してしまう。精霊が屋内にいる状態でASTが迂闊に手を出せない今しかチャンスがないのも事実だった。

「……わ、わかったよ」

『心配しなくても大丈夫よ。土道とオルガなら一回くらい死んでもすぐニューゲームできいてるから。』

「そんな軽く言わないでくれ……。え？」

『それじゃグッドラック』

「お、おう」

ビツと親指を立ててくる。

士道たちは先程の言葉が少し引つかかったが、軽く手を上げて返す。

二人の心臓は未だに高鳴っていたが——この日機を逃すわけにはいかなかった。

正直士道とオルガは精霊を倒すとか、恋をさせるとか、世界を救うとか。

そんな大それたことは全く考えていない。

ただ——またあの子と、話しかかったただけだ。

琴里はモニターに映された少女にチュッパチャプスを向けて唇を動かす。

『さあ——私たちの戦争^{デート}を始めましょう』

第八話 彼女の名

へフラクシナスへ下部に設えてい顕現装置リアライザを使い、土道たち三人は学校内に転送された。オルガは壁に目を向ける。壁の至る所がごつそりと削れている。どれだけ酷い惨状だったかが見てわかる。

「こうして見るとんでもねえな……」

『へプリンセスの反応はここからよ』

琴里からの指示で目的の場所に着いた。三日月は口を開き教室のプレートを指さす。

「ねえ土道。ここって」

「どうした？　——　ここ俺たちのクラスの二年四組じゃねえか」

『あら、好都合じゃない。まったく知らない場所よりはよかつたでしょ』

三人の心臓の鼓動は早鐘のようになっている。

するとオルガが少し緊張気味な声で話しかけてきた。

「な、なあ土道。最初にかける言葉って決まってるのか？」

「え？　あ、ああ『……　やあ、こんばんわ、どうしたのこんなところで』って言うつもりだ……」

「そ、そうか……」

オルガは渴いた唇を舐め、士道は唾を飲み込んだ。士道は「よし」と意を決してオルガたちに問う。

「いくぞ……」

「ああ……」

「うん」

二人の応答と同時に士道は教室のドアを開ける。夕日で赤く染まった教室の様子が士道の目に映った瞬間。

「あ」

頭の中で考えてた、薄っぺらい言葉が全て吹っ飛んだ。

前から四番目、窓際から二列目――丁度士道の机の上に、不思議なドレスをそ

の身に纏った少女が片膝を立てるように立っていた。

幻想的に輝く瞳を物憂げな半眼にし、黒板を眺めている。

その姿は、見るものの思考を一瞬にして奪ってしまうほどだった。三人は呆然と彼女の姿を見ていた。

「ぬ？」

少女が士道たちの侵入に気づき、目を開きこちらを見てくる。

「…… ツーや、やあ」

士道がどうにか心を落ち着けながら手を上げ…… ようとした瞬間。

「…… ツー！伏せて！」

三日月の声と共にいきなり後ろから倒され、士道と三日月はその場に倒れ込む。その直後士道の頭上を一条の黒い光線が通り抜けていった。

「い……!?」

「…… ヴウ！」

後ろからの呻き声に振り向くと、先程の光線が見事オルガの胴体にクリーンヒットしていた。

「あ——」

士道が間拔けな声を発すると同時にオルガは地面に倒れ込みいつもの台詞を口に出す。

「…… だからよ、止まるんじゃねえぞ……」

オルガの後ろにあった先程士道が手をかけた教室の扉と、廊下の壁やガラスの崩れる音が聞こえた。

「…… くッ！」

三日月の毒づいた声と共に壁の後ろに隠れる。士道たちが倒れ込んでいた場所に光

の奔流が通り抜ける。そして立ちあがろうとしていたオルガの体にまたもやヒットした。

「…… ヴウ!?」

そして倒れ込み再度あの台詞を吐く。

「…… だからよ、止まるんじゃねえぞ……」

その後も、何度か連続してこちらに向けて黒い光線が放たれた（ただし全てオルガにヒットした）。

「ま、待ってくれ！俺たちは敵じゃない！」

随分と風通しが良くなった廊下から声を上げる。すると、土道の言葉が通じたのか、それつきり光線が放たれることはなかった。

土道はゴクリと唾を飲み込んだ。そして先程まで死んでいたオルガも生き返り、教室の入り口に立つ。

「…… 止まれ」

少女が凜とした声音を響かせる。土道が体を硬直させる瞬間オルガが口を開いた。

「…… 止まるんじゃねえぞ……」

「はっ！」

ギャグで言ったのだろうか、急にオルガはいつもの台詞を吐き出す。二人の声が重

なった途端オルガは下を一度向いてから神妙な面持ちになって言った。

「まあこれっぽっちも面白くなかったがな」

すると先程から黙っていた三日月が口を動かした。

「何言ってるのオルガ」

そう言うとき三日月はオルガに向けて銃を構えてオルガの体に銃弾を撃ち込んだ。

「……ヴウ！」

そしてまたもやオルガは希望の花を咲かせた。

「……だからよ、止まるんじゃないぞ……」

「ふー、続けていいよ」

「続けていいよ、じゃねえ！」

細く息を吐いた三日月の言葉にたまらず土道は声を上げてしまう。

「なんでいきなりオルガのこと撃ったんだよ!？」

「ん、琴里にオルガが余計なことしたら、希望の花を咲かせろって」

「いやそれもそれで可笑しいだろ!!」

またも土道は声を上げる。こちらの様子を見ていた少女が凍りつくような声音を響

かせる。

「……おい、貴様ら何をしている」

『なにしてんのよ、あんたたちが余計な会話なんてしてるからへプリンセスの機嫌値が下がってきたじゃない』

琴里がインカムの向こうで言ってくる。確かにこの状況は非常にまずいかもしれない。土道は何を話そうかと思案していると少女が凜とした声で言ってきた。

「お前たちは、何者だ」

「……つ、俺たちは――」

『待ちなさい』

と、土道が答えようとしたところで、なぜか琴里からストップが入った。

へフラクシナスの艦橋のスクリーンには今、光のドレスを纏った精霊の少女が映されており、その周りには『好感度』をはじめとした配置されていた。

令音が・顕現装置《リアライザ》で解析・数値化した各種パラメーターが画面下部に表示されている。

画面中央にウィンドウが表示される。

① 『俺は五河土道。君を救いに来た！』

② 『通りすがりの一般人です辞めて殺さないで』

③ 『人に名を訊ねるときは自分から名乗れ』

まるでギャルゲーのような選択肢が画面に表示される。令音の操作する解析用・顕現装置《けりアライザ》と連動した《フラクシナス》のAIが、精霊の心拍や微弱な脳波などの変化を観測し、瞬時に対応パターンを表示したのだ。

「全員これだと思いう選択肢を選びなさい！五秒以内！」

クルーたちが一斉にコンソールを操作する。その結果が琴里の手元にある端末に表示される。

琴里はその結果にふふんと鼻をならした。

「……みんな私と同意見みたいね」

「……お、おい、なんだってんだよ……」

琴里の言葉で制止された土道たちは、気まずい空気の中立ちつくしていた。

「……もう一度聞く。お前は、何者だ」

少女が苛立しげに、目をさらに目を尖らせる。

と、その時ようやく琴里からの声が届いた。

『士道。聞こえる？今から私の指示通り言いなさい。』

「お、おう」

『人に名を訊ねるときは自分から名乗れ』

「人に名を訊ねるときは自分から名乗れ。…… って」

「おい、何やってんだ、士道おおお!!」

「いや琴里からの指示で……。ってまずい！」

オルガの言葉に釈明しようとした士道だったが、だが時既に遅し。少女は不機嫌そうに顔を歪め、黒い球体を投げつけられる。その衝撃波で三人は吹き飛ばされてしまう。

吹き飛ばされたことによる衝撃でまたもオルガは死んだ。

「…… だからよ、止まるんじゃねえぞ……」

「…… つぐあ……」

『あれ、おかしいな』

「おかしいじゃねえ…… ツ、殺す気か…… っ」

「…… 士道、こんな状況であんなこと言ったら怒るの普通だと思っただけ……」

「…… そうだそうだ士道。お前ほんつとに何やってんだ！」

「いや、今のは琴里に言われたんだよ！」

『あんたたち何してんの、それどころじゃないわよ』

「へ？」

「これが最後だ。答える気が無いなら、敵と判断する」

士道 of 机の上から少女が言ってくる。

「お、俺は五河士道！この生徒だ！敵対する意思はない！」

「……俺は鉄華団団長、オルガ・イツカだぞ……。んでこっちはミカこと、三日月・オーガスだ。俺ら二人もこの生徒であんたに敵対する意思はねえぞ……」

両手を上げながら士道とオルガが言うと、少女がゆっくりとした足取りで士道たちの方に寄ってくる。そして士道とオルガの顔を凝視し、「ぬ？」と眉を上げた。

「そっちのお前は知らんが、お前たち、前に一度あつたことがあるな……」

少女が言うそっちとは恐らく三日月のことだろう。バルバトスに搭乗していない状態で三日月と話すのは初めてなため、彼の顔を知らないのは当然だろう。

「あ、ああ、今月の……確か、十日に」

「おお」

少女は得心がいったように小さく手を打つと、姿勢を元に戻した。

「思い出したぞ。何やら可笑しなことを言っていたやつだ。」

「ぎ……ッ!？」

士道は前髪を掴まれ顔を上向きにされる。

「……確か、私を殺すつもりはないと言っていたな？ 見え透いた手を。言え、何が狙いだ。油断させて後ろから殺すつもりか？」

「士道！」

「……………っ」

士道は、小さく眉を寄せ、奥歯をぎりりと噛んだ。

少女への恐怖とか、そんなものより先に。

少女が士道たちの『殺さない』という言葉を、微塵も信じていることができないのが、気持ち悪くて、たまらなかった。

「人間、は……………ッ」

士道は喉を震わせた。

「お前を殺そうとする奴らばかりじゃ……………ないんだッ……………！」

「嘘だ。私の会った人間は皆、私が死なねばならないと言っていたぞ」

「そんなわけ……………ないだろッ！」

「……………では聞くが。私を殺すつもりがないのなら、貴様らは一体何をしに来たのだ」

「き、君に会うためだ」

「私に？ 一体何のために」

「そ、それは——ええと」
『士道』

士道が口ごもると、琴里の声が右耳に響いてきた。へフラクシナスの画面の中央にまたも選択肢が表示された。

① 『君に興味があるんだ』

② 『君と、愛し合うために』

③ 『君に訊きたいことがある』

「んー…… どうしたもんかしらねえ」

選ばれた選択肢に思わず琴里はあごをさすった。

「…… き、君と…… 愛し合うために」
「……」

少女は手を抜き手にし、横薙ぎに振り抜く。

そして士道の頭上を風の刃が通り抜け――教室の壁を切り裂いて外へと抜けていった。

「ぬわっ……」

「……冗談はいらない」

ひどく憂鬱そうな顔をして、少女が呟く。その様子を見ていたオルガは唇を噛む。普段は表情を変えることがない三日月も僅かながら焦りを見せていた。

「士道――」

「だ、大丈夫だ。オルガ」

士道はオルガに制止の声をかける。

士道は顔を少女へと向け直すと視線をキツと鋭くする。

「――ああ、そうだ、この表情だ。俺が大嫌いな顔だ」

士道は少女が浮かべるこの表情が大嫌いだった。

全てに絶望し、自分が愛されているなんて微塵も思っていないような――悲しい表情。

気がつくくと士道は思いつく限りに言葉を並べていた。

「俺は……ッ、お前と話をするためにここに来たッ」

「……」

「内容なんてなんだっていい。気に入らないなら無視してくれたって構わない。けど一つだけわかってほしい。俺は……ッ」

『士道、落ち着きなさい。私たちの指示通りに……』

「今は何も言つてやんな」

士道を諫める琴里の言葉が聞こえてくるが、オルガがそれを止める。

士道にはこの少女が何を思つて現界しているのか分かるわけではない。

しかし士道には一つだけ分かったことがある。

少女には手を差し伸べてくれる人間が誰もいなかったのだ。

何かを言つてくれて手人間が誰ひとりいなかったのだ。

無意識のうちに空間震を起こし、いきなり現れた人間に敵意を向けられる。酷く理不尽なことなのかもしれない。

この場に居る士道、オルガ、三日月たちには手を差し伸べてくれる人がいた。

しかし彼女には誰もいなかった。

敵意しか向けられなかった。

だからこんな悲しい表情になってしまう。

その顔が嫌いだったから、そんな顔はもうさせたくないから——士道が言う
しかない。

「俺は——お前を否定しないッ！」

士道は足を踏み締めて胸を張って強く言った。

「……………ッ」

少女は眉根を寄せると、士道から目を逸らす。そしてしばらく黙ったあと、士道に問う。

「………… シドー。シドーといったな」

「——ああ」

「本当に、お前は私を否定しないのか？」

「本当だ。それにそれは俺だけじゃないぜ」

士道が言うと、少女はオルガたちの方に視線を移した。

「………… オルガとミカだったか、お前たちも私を否定しないのか？」

「そんなの当たり前じゃあないか？ なあミカ？」

「うん」

「本当の本当か？」

「本当の本当だ」

「本当の本当の本当か？」

「本当の本当の本当だ？」

土道が間髪入れずに答えると、少女は髪をくしゃくしゃとかき、ずっと鼻をすすするような音を立てると、土道たちに視線を戻した。

「ふ、ふん。誰がそんな言葉に騙されるかばーかばーか」

「っ、だから、俺たちは」

「……だがまあ、あれだ」

少女は複雑そうな表情のまま、続けた。

「どんな腹があるかは知らんが、まともに話をしようとする人間は初めてだからな……この世界の情報を得るために利用してやる」

「……は、はあ？」

「べ、別に貴様らからこの世界の情報を得るためだ。うむ、大事。情報超大事。」

「そ、そうか……」

「おい。土道これって……」

「ああ、上手く行った、みたいだな？」

つまり土道たちはこの少女とのファーストコンタクトに成功したということなのだろうか。

「ただし不審な行動を取ってみろ。お前たちの身体に風穴を開けてやるからな」

「…… ああ、分かつてる——あ」

「どうしたのだ？ オルガ。ああ、そう言うことか」

オルガは声を詰まらせた。すると少女が何かに気付いたのか眉をひそめてくる。

「…… そうか、会話を交わす相手がいるのなら、必要だな」

そう頷いて、

「シドー。オルガ。ミカ。——お前たちは、私を何と呼びたい」

「「は？」」

思わず三人とも理解できず問い返す。

「私に名をつけろ。どうせお前たち以外と会話する予定はない。問題あるまい」

「「「……」」」

少女の言葉に三人とも黙り込む。

微妙な空気が周囲に流れていた。

『うつわ、これまたヘビーなの来たわね』

「どうすんだよ……？ 急に名前をつけろと言われてもよ」

右耳から琴里の声が聞こえてくる。

さすがに急に名前をつけると少女に言われ、何と答えればいいのか琴里も迷っているようだった。

『うーんそうねえ。彼女には古式ゆかしい優雅な名前がぴったりの気がするからトメつてのはどうかしら?』

「わ、分かったんじゃあ、あんたの名前はトメだ!」

オルガが言った途端、オルガにマシガンのように光球が撃ち込まれた。

「ヴウ!? ヴウヴウ!!…… 止まるんじゃねえぞ……」

「…… なぜかわからないが、無性に馬鹿にされた気がした」

「…… オルガ、流石にトメはないと思うけど」

先程から黙り込んでいた三日月がオルガのことを半眼にしながら唇を開いた。三日月の言葉に士道も申し訳ないが全国のとめさんには悪いけど、今どきの子につける名前ではないわ。

確かに古式ゆかしく優雅だが、妹のネーミングセンスを疑った。

「み、三日月は何か思いついたか?」

「ゆい…… でもありきたり過ぎる気がする。名前考えるって難しいね」

三日月も悩んでいるようだった。起き上がったオルガも思案している様子だがこれといったものは思い浮かんでいない感じだった。こうしている間にも少女の顔は不機

嫌になつていく。

士道は心臓を押さえ込みながら、考えを巡らせる。

「と、十香？」

「ぬ？」

「お？」

「ん？」

「ど、どう……かな」

「……」

少女がしばらく黙り込んだあと

「まあ、トメよりはマシだ」

士道は見るからに余裕のない苦笑を浮かべて後頭部をかいだ。

だが…… 四月十日にあつたから十香というのはあまり安直過ぎただろうか。

(多分士道のことだから、四月十日に出会ったからっていうことだろうけど)

十香という名前の意味を理解した三日月は士道をじつと見つめている。三日月の視線に気付いた士道は三日月から目を逸らす。

「それで――トーカーとは、どう書くのだ？」

「ああ、それは――」

土道は黒板の方に歩いていくと、チョークを手に取り、『十香』と書いた。

「ふむ」

少女は小さく唸ると、土道の真似をするように指で黒板をなぞる。

「おいおい、チョークを使わないと……」

オルガが言いかけて、言葉を止める。黒板には不格好な『十香』という文字が削られていた。

「なんだ？」

「……いや、何でもねえよ」

少女の様子にオルガは頭をかく。少女はしばしの間自分の書いた文字をじつと見つめる。

「シドー、オルガ、ミカ」

「な、なんだ？」

「十香」

「へ？」

「十香。私の名だ。素敵だろう？」

「あ、ああ……」

「いいんじゃねえの？なあ」

「うん」

十香の言葉にオルガと三日月は頷く。十香は満足げな表情を浮かべる。すると十香は土道の方を向き、口を開いた。

「シドー」

「と、十香……」

心臓が、どくと跳ね上がる。

初めて見たの十香の笑顔。

途端。

「え……？」

『三人とも床に伏せなさい！』

琴里の声が右耳に響いてくる。

突如、校舎を凄まじい爆音と震動が襲う。何が何だかわからないまま土道たちは床にうつぶせになる。

次の瞬間、ガガガガガツという、けたましい音を立てながら、教室の窓ガラスが一斉に割れる。向かいの壁にはいくつもの銃痕が刻まれていた。

「な、なんだこりや……ッ!？」

『外からの攻撃ね。精霊をいぶり出すためじゃないかしら。それとも校舎ごと潰して、精霊が隠れる場所をなくすつもりかもね。』
——— それに向こう側は今回モビルスーツまで出してるみたいだし』

「奴ら正気か!?こんな建物一つを精霊のためにモビルスーツだと!？」

『今はウイザードの災害復興部隊がいるからね。すぐに直せるなら、モビルスーツを出して、いぶりだしても大丈夫ってことでしょ』

「マジかよ……ッ!？」

オルガが顔を上げる。

崩れた内壁から外の様子を伺える。外にはASTの姿がある。しかしオルガはもう一つ空を飛んでいるものを見つける。

それは巨人だった。

上空から巨大な影がこちらへ向けて手に持っているライフルを撃ち込む。

草色の姿をした黄色のモノアイの巨人がこちらを睨む。あの機体の姿をオルガには見覚えがあった。

かつての世界ではギャラルホルンの量産機、そしてこの世界では対精霊部隊^Aの保有するモビルスーツ^S『グレイズ^T』だ。

「…… チツ！野郎のモビルスーツは、グレイズかよ！」

前世に自分たちが戦った同じ敵が目の前に立ちはだかっていることにオルガは舌を打つ。一度弾幕の雨が止み、オルガと三日月は上体を起こす。

燎子は声を上げ、攻撃中止の指示を出す。

「そ、総員、攻撃辞め！」

三人の存在に気付いたASTの女性が声を上げる。

隊長格と思われる女性の言葉を聞いたオルガは三日月にあることを問う。

「…… ミカ、ASTの相手、頼めるか？」

「……」

しばらく三日月は黙り込む。

そして――。

「…… うん、いいよ。オルガの命令なら何だつてやってやる」

「…… フツ、んじゃ頼んだぜ。遊撃隊長さん」

「了解」

細く息を吐き、オルガと三日月は拳を合わせる。

「琴里」

『何かしら？』

インカムを手で押さえ、琴里の名を呼び掛ける。

「頼みたいことがあるんだけど——」

土煙が校舎から立ちこめる。状況的に言えば、唐突に隊長である日下部燎子が攻撃中止の命令を出した。

何かが起こったのだろうか。まだ避難していない一般人がいたのだろうか。

折紙は脳内に指示を出し、土煙の中を視認する。そこにいたのは、精霊の他に三人の人間がいた。しかしそれが誰なのかは、分からない。だが、土煙が僅かに晴れ、その人物が何者かすぐに分かった。

そこに居た人物を見た途端、折紙は驚嘆の表情に染まった。見間違えるはずがない。そこに居たのは——、

「——三日月……」

折紙のクラスメート——三日月・オーガスだった。

『——三日月、準備出来たわよ。転送タイミングはそつちに合わせるわ』

「ありがとう。オルガ」

「どうした？」

「十香のこと任せた」

「……ヘッ、分かつてるよ」

三日月の言葉に小さく笑うと、三日月は小さく頷いた。そして外を見ると押し殺すように声を発する。

「行くぞ——バルバトス……ッ！」

すると三日月の体が淡く発光し、その光は少しずつ巨大なものとなっていく。それと同時に光がバルバトスの形を作っていく。巨体によってまたも土煙が立ち込む。

土煙を払い、現れる筋骨隆々の禍々しいフォルム。金色の角をした白い悪魔

——ガンダムバルバトス。その手には巨大なメイスを携えていた。

『……ッ』

その姿に驚きの表情に変わる十香と土道、しかしオルガは驚く素振りもなく、期待するかのような目で静かに三日月の姿を見つめていた。

『全くいきなり無茶なこと頼んできて、三日月には困るわ』

「……えっ？」

『大分無茶言って……上手いことバルバトスの中に転送できたから良かったけど』

「てことは、あれに三日月が乗っているってことか？」

琴里が小さく愚痴る。士道は視線を移し、こちらに背を向けたバルバトスを見つめる。

バルバトスはその視線に気づくことなく、メイスを構えると、そのまま飛び去っていった。

「……あれはバルバトス……!? 総員目標をバルバトスに変更!」

ASTの魔術師^{ウィザード}たちは、ほとんどの隊員が驚愕している。しかしそれは当然のことだろう。彼らからしてみれば、突然、バルバトスの反応が出現し、その姿を現したのだから。

目の前にいるグレイズは、ライフルでバルバトスを迎え撃つ。だが、バルバトスはその巨体に似合わず、グレイズの銃撃を素早い動きで躲していく。

銃撃を躲すなかでコックピットに「フラクシナス」からの回線が繋がり、琴里の声が聞こえてくる。

『——三日月いい? 殺さないようにね』

「了解」

琴里の言葉に短く応えると、バルバトスは大きく跳ね上がり、グレイズの目の前に現

れ、そしてメイスを叩きつけた。

メイスを振り下ろされたグレイズの頭部はズガアン！と軋む音が鳴り、大きく大破した。

そして、頭を吹っ飛ばされたグレイズは、そのまま地面に倒れ込む。

琴里の命令通りなるべく殺さないようにしておいた。今ので多少は負傷したと思うが、恐らく死んではないだろう。

「殺さないように殺さないように」

自らに言い聞かせながら、モビルスーツを次々に屠っていく。

次の目標へ機体を向けるとバルバトスのスラスターが火を吹いた。

バルバトスの戦いに唾然とみていた士道に琴里からの回線が繋がる。

『ちよつと何してんの、士道。折角三日月が囿になってチャンスを作ってくれたんだから、今の内に十香と会話しちやいなさい』

「おお、忘れてた」

実際、その通りである。

今の状況は琴里の言うとおりの三日月が作ってくれたチャンスだ。無駄にはできない。

士道は少し考えを脳内で考えを巡らせ口を開いた。

「なあ————十香、お前つて……結局どういう存在なんだ？」

「む？————知らん」

「いやお前、知らんつてなお……」

「事実なのだから仕方ないだろう————どれくらい前だったか、私は急にそこに芽生えた。」

「そ、そういうものか……？」

「そういうものだ。突然この世に生まれ、メカメカ団と緑色の奴が空を舞っていた」

『多分ASTとグレイズの事ね』

すると十香は眉をひそめて言う。

「あとはそうだな……。白鬼しろおにもいたな」

「白鬼？」

聞き慣れない単語に思わず士道は聞き返す。

「そうだ、今、向こうで暴れているあいつのことだ」

そう言うのと十香は空を指さす。十香が指していたのはバルバトスだった。恐らく十香はバルバトスのことを言いたかったらしい。

「あいつは緑の奴と戦っていた。丁度あんな風に。そうだ、お前たちに聞きたいことが

ある」

「聞きたいこと?」

「ああ、ミカが先程光つただろう? そしたらそこに白鬼がいたのだ。もしや、ミカは白鬼なのか?」

「あ、ああ……」

どう答えるべきか。十香の考えは間違いではない。間違いではないのだ。現に実際三日月はバルバトスに乗り、戦っている。

何と伝えるべきか迷う土道の隣で立っていたオルガが口を開く。

「……あいつはお前の言うとおり鬼だ」

「……へ?」

「なんとそれは本当か!」

「ああ、俺がふざけたギャグを言うだけで容赦なく俺を撃ってきたりする」

どうやらオルガは先程の出来事を根に持っていたらしい。

「だがよ」

と続けオルガは視線をバルバトスに移し、

「ミカはやるって言ったら絶対にそれを通す。誰が何と言おうとだ」

オルガは三日月のことをよく知っている。前世から二人は付き合いがある。三日月

のことをよく知っているのもずっとオルガが三日月を見ていたということだろう。

「ミカも俺たちと同じようにお前を否定しねえって言ったんだ。あいつがそれを曲げるわけがねえよ」

十香の方を真つ直ぐに見つめ言い放つ。その瞳からはとても強い信頼が感じとれる。オルガは「あ」と声を漏らし、頭をかく。

「わりい、少し話が脱線しちまったか」

「いや、構わないぞ」

一度十香の方を一瞥すると頭に腕を組んで言う。

「—— まっ、要するにあいつは鬼の時もあれば、そうじゃねえ時もあるってことだ。とにかくアイツもお前の味方だ」

「ほう」

十香はオルガの答えに顔を上下に揺らす。

と、が二人のインカムに軽快な電子音が鳴る。

『チャンスよ！土道、オルガ』

「は……… 何がだ？」

『精霊の機嫌メーターが七十を超えたわ。一步踏み込むなら今よ』

「踏み込むって…… どうすんだよ？」

『んー、そうね。とりあえず……デートにでも誘ってみれば?』

「はあ……!?!」「ぶっ……!ゲホツゲホツ!」

琴里の言葉に土道は思わず大声を上げ、オルガは思いつ切りむせていた。

「ん、どうしたシドー、オルガ」

「ゲホツ!いや、気にすんな!」

「……さつきから何をブツブツ言っている……!やはり私を殺す算段を!?!」

「ち、違う違う!誤解だ!」

十香は視線を鋭くすると指先に光球を出現させる。

「なら言え。今何と言っていた」

「ぐぬ……」

土道とオルガが頬に汗を滲ませる。琴里とクルーたちが土道らをはやし立てるよう
に言ってくる。

『ほーら、観念しなさいよ。デートっ!デートっ!』

『デ・エ・ト!』

『デ・エ・ト!』

『デ・エ・ト!』

「あーもうわかったよッ!」

士道は観念して叫びを上げた。

実際琴里の言うとおりであったが……士道とオルガは、なんとなく恥ずかしかった。

「あのだな、十香。そ、その……今度俺と」

「ん」

「で、デート……しないか？」

「デートとは一体なんだ」

「そ、それはだな……」

少し気恥ずかしくなり、視線を逸らした時である。

『オルガ！一人とり逃した！』

「なにッ……!?!」

右耳から三日月の少し大きな声が入ってきた。

オルガは三日月の言葉に構わず声を上げる。

瞬間、教室の外から折紙が現れる。恐らく三日月がASTの相手をしている隙に飛び

込んできたらしい。

折紙はオルガたちの方を一瞥したが、すぐさま十香に視線を戻す。

手にした機械から光の刃を現出させ、十香に向けて襲いかかる。

溶接現場もかくやというほどの火花が、辺り一面に飛び散る。

十香は振り落とされた刃を片手で止めてみせる。

「く」

「無粋！」

「……………」

十香は折紙を振り払う。一方の折紙は後方へ吹き飛ばされ、華麗に着地する。

「ち」

「また、貴様か」

唾棄するように十香が言う。ちらとこちらを一瞥すると自分の足元の床に踵を突き立てた。

「サンダルフオン
〈塵殺公〉！」

教室の床から突如として玉座が顕現される。それは四月十日に土道たちが見たものと同じのものだった。

「な……………」

『土道、オルガ、離脱よ！一旦へフラクシナスで拾うわ。』

「おい！ミカはどうすんだ!？」

オルガが琴里に対し叫ぶ。

『三日月は適当なタイミング回収するわ。あんたたちはそこから離れなさい!』

「んなこと言っちゃって……………」

「っ」

十香は玉座の背もたれから剣を抜き、折紙に向かって振るう。その衝撃波で土道とオ
ルガは吹き飛ばされてしまう。

「のわあああッ!?!」

「ヴウアアアッ!?!」

『ナイスっ!』

琴里の声とともに土道たちの身体が無重力に包まれ、二人はへフラクシナスに回収された。

第九話 暴虐なる姫君（プリンセス）

「なあ土道、だからさつき俺も言っただろ」

「…… そりやそうだよな、普通に考えりや休校だよな……」

土道は後頭部をかき、オルガとともに高校前の坂道を下っていた。

土道が精霊・十香と会い、名をつけた次の日。

普通に考えれば、昨日目の前で破壊現場を目撃したわけだし、休校だということが分かるはずだが、土道たちはいつも通り登校してしまったのである。

あの後（フラクシナス）に回収された土道たちだったが、オルガは希望の華を咲かせた状態で（フラクシナス）に転送されたのである。恐らく十香と折紙の攻撃に巻き込まれたのだろう。

その後昨日の夜はずっと十香との会話の録画ビデオを見ながらぶっ通しで反省会をさせられていた。

「やっぱミカの言う通りだっただろ？」

「…… ほんとにな」

今朝三日月を呼びに言った際に「…… 今日学校ないでしょ」と、短く返され戻されて

しまったのである。学校までの道のりでオルガも「ミカが言うんだから今日ねえだろ」と言われたのである。

「はあ…… ちよつと買い物でもしていくか」

「何か切れてんのあつたけか？」

「確か卵と牛乳が切れてた気がするけど……」

そのまま帰つてもすることが特にならないので、買い物でもしていくことにした。だが士道たちはすぐに再び足を止めることになる。

「つと、通行止めか」

だがそんなものがなくとも、アスファルトの地面が滅茶苦茶に掘り起こされ、ブロック塀は崩れ、雑居ビルは瓦礫の山へと成り果てていた。

まるで戦争でもあつたかのような。

「いや、ここであつたな」

この場所には見覚えがあつた。初めて十香に会つた空間震現場の一角である。まだ復興部隊が処理をしていないのだろう。

「……………」

頭の中で少女の姿を思い浮かべる。

十香。昨日まで名を持たなかつた、精霊と、災厄と呼ばれる少女。

昨日、前よりずっと長い間話をしてみて——士道の予感確信に変わった。

あの少女は確かに、普通では考えられないくらいに、常人離れしている力を持っている。国の機関が危険な怪物だと敵視するのも理解できる。今士道たちの目の前に広がる光景がその証拠だ。

「……ドー」

だけれどそれと同時に、彼女がその力をいたずらに振るうとは、折紙があの時言った慈悲なき怪物とは到底思えなかった。

「……い、……ドー」

あの時三日月が言い放った言葉が脳裏をよぎる。

—— だったら俺は力を持つからには、精霊を救うため、あんたたちと戦う

三日月が精霊を救うために戦うと決めたのである。

士道たちも十香の笑顔を守り抜いてみせる。士道が嫌いなあの憂鬱そうな表現にさせないために。それだけはなんとしても士道にとって許容できなかったのである。

「おい、シドー——」「士道おい！」

…… まあ、そんなことをずっと考えていたから、気づいたら校門まで歩くハメになったわけだが。

「……………無視するなっ！」

「え？」

視界の奥——通行止めになっているエリアの向こう側からそんな声が響いてきて、士道は傾げた。

凜とした、とても美しい声。

……………今、聞こえるはずがない声。

「ええと」

士道は自分の記憶と今しがた響いた声を照合しながら、その方向に視線を変えた。それと同時に身体を硬直させる。

視線の先にある、瓦礫の山の上に。

明らかに街並みに似つかわしくないドレスを纏った少女が、ちょこんと屈み込んでいた。

「と——十香?！」

そう、士道の日か視覚に異常が無ければ、その少女は間違いなく、昨日士道が出会った精霊——十香だった。

「ようやく気づいたか、ばーかばーか」

「俺も何回かお前のこと呼んだぞ」

「悪い、普通に気付かなかった。そ、それよりも何してんだ……、十香……」

「ぬ？何とは何だ、お前から誘ったのだろう、デエトとやらに」

「なっ……」

◆ こともなげに言い放った十香の言葉に、土道は肩を震わせた。

「……」

三日月は自室にて、この世界での自分の過去を思い起こす。

先日自分のアルバムを見たときは、幼少期の三日月の姿が写されていた。因みに三日月の両親は五河家と同じようにたびたび家を開けている。そのため食事は五河家でとっている。

この世界で生まれたとき、三日月は前の世界の記憶を保持していた。最初はなぜギヤラルホルンに討たれたはずの自分がこうして生きていいのか疑問だった。

しかし、三日月にはそのことよりも気になることがあった。

それは——オルガがこの世界で生きているのかということだった。

自分が生きているのだから、先に死んでしまったオルガはもしかしたら生きている、そう思いたかった。

三日月がオルガと再び出会ったのは小学校に入学してからである。再びオルガに会

い、三日月は自分のことを話したが、オルガは全く自分のことを覚えていなかったようだった。

最初は家族のことを忘れていると知って少し悲しかったが、それからはあまり気にしないようにしながら、オルガと接していた。

その間に士道や琴里とも仲良くなり、本当の家族のようになっていた。

あの日までは――、と。

「――ッ！」

唐突に聞こえた軽快な着信メロディに体を震わせる。誰かからのメールが来たのだろうか。結局今日は学校が休校士道とオルガからだろうか。

「誰だろう」

小さく呟きながら、携帯を手取る。三日月は携帯の画面に映されている名前に目を開く。なぜなら映されていた名前は――。

「鳶一？」



数分後。

「…… なあ士道」

「なんだ？」

「デートって男女が二人一組にするもんじゃねえのか？」

「…… そうだな」

士道はオルガの問いに力無く答える。

「おーい、二人ともこっちだ！」

前方にいる十香がこちらに向けて手を振る。士道とオルガはぎこちない足取りで向かう。

今、士道たち三人は天宮大通りにいた。あのあと士道と十香はデートを始め、オルガは家に戻るつもりだったのだが、戻ろうとした時に十香に悲しい目つきで見られてしまい、結局オルガもデートに同行することになったのだ。（こらそこ、作者デートを何か本当に分かってるのとか言わない）

「…… シドー、オルガ。全く遅いぞ」

「いや、お前が止まんねえからよ……」

「よいではないか、それよりも次はこの店はどうだ？」

十香が指差した店はあるカフェだった。

「まあいいけど……」

「そうか!」

士道たちはそのまま店内に入っていく。店員に誘導されるまま席に着く。

「ほう、この本の中から食べたい物を選べばいいのだ」

「ああ、そうだな」

「きなこパン。きなこパンは無いのか?」

「……………や、さすがにねえだろ。てかお前、最初のパン屋で食いまくったじゃねえか」

「また食べたくなつたのだ。一体なんだあの粉は……………あの強烈な習慣性……………」

きつと人々は禁断症状に震え、きなこを求めて戦が起るに違いない」

「ねえよ」

「ねえだろ。だけど、俺たちそこまで金はねえから全部合わせて三千円までな」

そんな会話を聞いて、琴里ははあと息を吐いた。その隣にいる令音は三人の様子を監視していた。琴里と令音は小洒落たエプロン姿をしている。

なぜこの二人がこのような姿をしているかという点、二人は元々この店で過ごしていたが、タイミング悪く、この店に入店してしまつたのだ。そのため緊急事態に対応するために店側と交渉し、琴里たちが店員として振る舞うことになつたのである。

「……………ふむ、順調そうだね」

令音があごに手をあてて、口を開く。

「そうね、あの二人がハマをしなないといけけど」

琴里は口にチュッパチャプスをくわえたまま声を発した。



士道たちが琴里たちのいる店に入店する数十分前。

「それで話って何？」

三日月は向き合いながら折紙に問う。そう、折紙が三日月の家にいるのは先程送られてきたメールの内容によるものだった。

「どうやら折紙は訊きたいことがあると言うことらしい。三日月の家で話したいということだった。」

「私は昨日、空間震警報中に五河士道とオルガ・イツカを見た。その他にもあなたの姿も」

折紙は三日月の目をじつと見つめながら言うてくる。

「昨日、なぜあんなところにいたの」

「少し教室に忘れ物して、オルガたちに探すの手伝ってもらってた」

「非常に危険。ケガはしていない？」

「うん。俺もオルガたちも無事だよ」

「そう。良かった」

折紙はぴくりとも表情を変えずに続けて口を開く。

「——昨日、あなたは私を見た」

「……………つ。ああ」

「誰にも口外しないで」

別にここで彼女の言葉に逆らう理由も無いわけだし、三日月は首を縦に倒した。

「それに、私のこと以外にも、昨日見たこと、聞いたこと。全てを忘れた方がいい」

恐らく、精霊のことを指しているのだろう。

「……………あいつのこと?」

「……………」

折紙は、三日月のことを無言で見つめてくるだけだった。

「……………鴛一。あいつってなんなの?」

精霊のことは一通りへラタトスクからは、聞かされていたが、それはあくまでへラタトスク側の見解であって、三日月は折紙たちの考えを知りたかった。

「あれは、精霊。私が倒さなければならぬもの」

「……………そいつって悪い奴なの?」

三日月は質問を投げかけてみた。

すると微かにだが、折紙が唇を噛み締めた気がする。

「私の両親は、五年前精霊のせいで死んだ」

三日月は折紙の言葉に表情一つ変えない。そんな様子を気に掛ける様子もなく、折紙は言葉を続けた。

「私のような人間は、もう増やしたくない」

「……………そう」

三日月は、小さく呟く。

しかし、三日月には少し気になることがあった。未だこちらに視線を送ってきている折紙に訊ねる。

「そういうえば、さっき言ってた精霊のこととか、俺に言っていないことだったの?」

「……………」

折紙は、一瞬黙った。

「問題ない」

「そうなの?」

「あなたが口外しなければ」

「もし話したら?」

「……………」

また、一瞬だけ言葉を止める。

「困る」

「そう、分かった。気を付けるね」

こくり、と折紙が首肯する。それを最後に互いにしばしの沈黙が流れる。二人とも向かい合ったまま黙り込み続ける。それから二十秒後ぐらいだろうか。

「……………」 お茶入れようか？

「ありがとう」

その場から立ち上がる。と、そこで、

雰囲気の良いメロディによって三日月の声が遮られた。メロディの正体は三日月の携帯からであった。

「ごめん、ちよつと待ってて」

三日月は自分のスマートフォンを取り出し、部屋を出て行った。

「もしもし？」

『三日月かしら？』

「琴里。どうしたの？」

『少し頼みたいことがあるのだけど』

「……………」



現在

「……………」

「……………ま、待ってくれ」

士道は手にした伝票に書かれた数字と、自分の財布の中身を交互に見ながら、ふうと息を吐いた。ほとんど残らないが、辛うじて二人で払いきれぬ額だった。

「会計お願いします」

オルガはレジに立っていた店員に声をかけ

「……………ッ!？」

思わず言葉を詰まらせた。

なぜなら、声をかけた店が見覚えのある顔をしていたからだ。

「はい、お預かりいたします」

そこに居たのは、制服を着た三日月だったからだ。

「お、おい！ミik……………（殴）」

オルガは三日月の名を呼ぼうとした途端、見事なくらいの右フックでオルガの顔を殴

る。そのままオルガは床に倒れ込む。

「だからよ……止まるんじやねえぞ……」

いつものように最後の团长命令を口にしながら、散った。

店員が三日月だと気づいた土道は三日月の方へ視線を移す。すると三日月は「次、自分の名前を呼んでみろ、オルガみたいに殴るぞ」みたいな視線をよこしてきた。

一方の十香は不思議そうに倒れ込むオルガを見つめる。

「どうしたのだ？オルガなぜ寝ているのだ？」

「こちら、お釣りとレシートでございませう」

土道が十香たちのやりとりに苦笑を浮かべているうちに三日月は会計を済ませ、お釣りとレシートそしてカラフルな紙を一枚、手渡してくる。

土道がレシートの下に目をやると、『ラタトスクがサポートするから、土道は十香と二人でデートを続けて。オルガはこつちで回収する』という文字がしたためられていたのである。

「こちら、商店街の福引き券となっております。この店から出て、右手沿いに行つた場所に福引き所がありますので、よろしければご利用下さい」

「どうした？」

「そうだ、オルガ」

士道はたった今起き上がったオルガに声をかけると、レシートを手渡した。オルガは渡されたレシートを見ると小さく頷く。

「シドー、なんだそれは？」

十香が、福引き所に物凄く興味深そうに見つめてきた。

「行つてみるか？」

「シドーは行きたいのか？」

「…… おう、行きたくてたまんねえ」

「オルガはどうなのだ？」

十香はオルガに質問をふつてきた。オルガは腕を組み、一瞬思考する。

「え？あー、いやその、俺は用事があつて行けねえんだー」

「そうなのか？」

「ああ」

目を泳がせながら、適当な言い訳を口に出す。

「そうか、ならば仕方ないな」

オルガの言い訳を十香は納得してくれた。

「ならば、またな！オルガ」

「おう」

十香の元気な声にオルガは返答すると、士道たちと別の方向に踵を返し歩いていった。



「なあ琴里」

「何かしら？」

「この落とし前……どうつけるつもりだ？」

「落とし前って……あそこまで行って引き返すものかしら？」

オルガが士道たちと別れて数分後。

〈フラクシナス〉に戻ったオルガは士道たちのデートの様子を見ていた。

士道と十香は先程三日月から渡された福引き券で『ドリームランド』とかいう未成年お断りな大人なホテルのペアチケットを当てた、当てされたのである。

「二人の初デートになんつーとこ行かせてんだよ。初デートで行くようなとこじゃねえだろー！」

「でも、士道もちゃんと順を理解してるみたいだし、よかつたじゃない」

「なんも良くねえだろー！」

琴里の満更でもない様子にオルガは叫び声を上げる。『我が妹ながら、たちが悪い』と小さく思った。

「つたく、だけど初デートつてのにいくらなんでも無茶だろ。次はもう少しまともなものにしてくんねえか」

「善処するわ」

会話を終えると、二人のデートの様子が映されているモニタに視線を戻す。

「ん？」

先程から黙り込んでいた三日月が不思議そうに声を上げた。

「どうした？ミカ」

「いや何あれ？」

「ん？なんだありゃ？」

「どうかしたの二人とも」

「いやミカがありや何だだつてよ。映像をアップできるか？」

「ええできるけど」

琴里が手元のコンソールを操作し、三日月が指した地点の映像をアップさせる。

微かにだが小さい光が確認できる。だが何の光なのかここからでは分からない。

妙な胸騒ぎがする。神秘的な面持ちになる。

「も、もう少しアップできるか」

さらに映像をアップさせると、何の光か分かった。それはスナイパーライフルのスコープが夕日を反射させた光だった。

「…………… ツ！土道ツ！」

オルガが叫ぶが、もう遅い。弾丸は土道の腹部を掠め取り、風穴を開けた。

◆
〈^ア神^ド威^ナ霊^イ装^メ・^レ十^ク番〉

土道が撃たれる少し前。

「おお、絶景だなー！」

土道と十香は夕日に染まった高台の公園にて、オレンジ色の街並みを眺めていた。

その後〈フラクシナス〉のクルーたちの巧妙(?)な誘導するルートを進んできたところ、この見晴らしのいい公園に辿り着いたのである。

土道も、ここに来るのは初めてではない。というか、密かなお気に入りの場所であった。

「…………… それにしても」

十香が話を変えるように背伸びをすると、屈託のない笑みを浮かべる。

「いいものだな、デエトというのは。実にその、なんだ、楽しい」

「……………っ」

不意を突かれ頬を赤く染める。自分からは見えないが、真っ赤に染まっているだろう。

「どうした、顔が赤いぞシドー」

「い、いや、なんでもない」

「む？そうか」

士道は額に滲んだ汗を袖で拭いながら、チラッと十香の顔を一瞥した。

十日前、そして昨日、十香の顔に浮かんでいた鬱々とした表情は、随分と薄れていた。

「……………どうだ？お前を殺そうとする奴なんていなかったら？」

「……………うむ、皆優しかった。正直に言えば、まだ信じられないくらいに」

「あ……………？」

士道が首をひねると、十香は自嘲気味に苦笑した。

「あんなにも多くの人間が、私を拒絶しないなんて。私を否定しないなんて。世界がこんなに優しいだなんて、こんなに楽しいだなんて、こんなに綺麗だなんて……………思いもなかった。メカメカ団……………ええとなんといったか。エイ……………？」

「ASTのことか？」

「そう、それだ。ASTとやらの考えも分かったしな。だから奴らが私を狙う理由も分かった。私はこの世界に現れる度にこんな美しいものを壊していた」

士道はすぐには言葉を発せなかった。

十香の悲痛な顔に胸が引き絞られ、上手く呼吸ができなくなる。

「シドー。やはり私は——いない方がいいな」

言つて——十香が笑う。

その顔は昼間のデートに見せていた、無邪気な笑みではなかった。

まるで自分の死期を悟った病人のような——弱々しく、痛々しい、悲壮な笑顔

だった。

「そんなこと……ないッ……！」

士道は力を込め、喉を震わせる。

「だって…… 今日空間震が起きてねえじゃねえか！きつといつもと何か違いがあるんだ……ッ！」

しかし十香は、ゆっくりと首を振った。

「例えその方法が確立しても、不定期に存在がこちらに固着するのは止められない。限界の数は減らないだろう」

「じゃあ……！もう向こうに帰らなければ良いだろうが！」

士道が叫ぶと、十香は顔を上げて目を見開いた。そんな考えなど全く持つてなかったかのように。

「そんなことが——可能なはずは……」

「試したのか!? 一度でも!」

十香が、唇を結んで黙り込む。咄嗟に出た言葉だったが——それが可能なら、空間震は起こらないはずである。

確か琴里の言葉では、精霊が異空間からこちらの世界に移動する際の余波だという話だった。

「で、でも、あれだぞ。私は知らないことが多すぎるぞ?」

「そんなもん、俺が教えてやる! それに俺だけじゃなくオルガと三日月だってそうだ!」

「寝床や、食べる物だつて必要になる」

「それも……どうにかする!」

「予想外の事態が起こるかもしれない」

「そんなもん起きてから考えろツ!」

十香はしばらく黙り込むと、小さく唇を開いた。

「…… 本当に、私は生きていいのか?」

「ああ!」

「この世界にいてもいいのか？」

「そうだ！」

「…… そんなこと言ってくれるのは、シドーたちだけで。ASTはもちろん、他の人間たちだって、こんな危険な存在が、自分の近くにいたら嫌がるに決まっている」

「知るか！ASTだあ!!?他の人間だあ!!?そいつらがお前を否定するってんなら――

それを超えるくらい俺たちが！いや俺がッ！お前を肯定するッ！」

叫んで、十香に向かってバツと手を伸ばす。十香の肩が、小さく震える。

「握れ！今は――それだけでいい……ッ！」

十香は顔を俯かせ、数瞬間の間思案するように沈黙したあと、ゆっくりと顔を上げ、そろそろと手を伸ばしてきた。

「シドー――」

と。

士道と十香の手と手が触れ合おうとした瞬間。

――

士道は、ピクリと指先を動かした。突然とてつもない寒気を感じた。ざらざらの舌で全身を舐められるような、嫌な感触。

「十香！」

無意識のうちに十香の名を呼ぶ。

「……………っ」

士道は、両手で十香を突き飛ばす。十香は突然の衝撃で尻もちをつく。

「あ」

士道は、胸と腹の間くらいに、凄まじい衝撃を感じた。

「な——何をする！」

十香が非難の声を上げるが、士道の耳にはよく聞こえなかった。途方もなく、気持ちが悪かった。

「シドロー？」

十香の呆然とした声が聞こえ、ない。

震える右手を脇腹にやってみる。

おかしい。

だって、なにも、な

「シドー……？」

名を呼ぶが、返事はない。そうはそうだ。

士道の胸には、抉られたように大きな穴が開いている。

意味が、分からない。

「シドー」

十香は士道の頭の隣に膝を折ると、その頬を突つつく。

反応は、ない。数瞬前まで十香に差し伸べれていた手は、一部の隙間無く血に濡れていた。

「う、あ、あ、あ」

ようやく理解する。

辺りから漂う焦げ臭い匂いで今し方士道を殺した者が誰なのかも。

いつも十香を殺そうとする一団——ASTのものだ。

「やはり、駄目だった」

十香は、この世界で生きられるかもしれないと思った。

もしかしたら、士道がいてくれたら、なんとかなるかもしれないと思った。

きつととても難しいだろうけど、できるかもしれないと思った。

だが——やはり、駄目だった。

世界は――やはり十香を否定した。

「――〈神威霊装・十番《アドナイ・メレク》……… ツ！」

喉の奥から声を絞り出し、その名を呼ぶ。

瞬間。世界が、啼いた。

世界が、歪み、十香の身体に絡みついて、荘厳なる霊装の形となる。

「ああ」

喉を、震わせる。

「ああああああああああ」

天に響くように。

「ああああああああああああああああああああああああああああ―― ツ!!」

地を轟かせるように。

「よくも」

自分の頭を麻痺させ、自我を摩滅させるような感覚。

「司令……ッ！」

「分かってるわよ。三日月、一応バルバトスを出すわ。被害を抑えるわよ」
「分かった」

琴里の言葉に返答すると、さっそうと艦橋を出て行く。

「な、なあ、琴里」

「何かしら？」

呆然とした様子でモニタを見るオルガに視線を移す。

モニタには身体をごっそりと削り取られた土道と、精霊・十香の戦闘映像が表示されていた。

「お、おい、琴里。今……し、土道が撃たれた……よな？」

「そうね。ま、ちよつと優雅さが足りないけど、騎士《ナイト》としては及第点かしらね。今のでお姫様がやられてたら目も当てられなかったわ」

琴里のさほど深刻でない調子の言葉で打ち震えるオルガの何かを壊した。

「……なん、だと、てめえ今なんつった!？」

オルガは艦橋の壁をドンと勢い良く叩く。

「何が優雅さが足りねえだよ!?!何が騎士《ナイト》としては及第点だよ!?!ふざけんじゃねえ!」

激怒したオルガは叫ぶ。

「士道はモノじゃねえんだぞ！今のは十香を守るためにアイツが、自分の意思でしたもんだ！それなのに優雅さが足りないだあ！？こんなときになってんのに優雅さもクソもあつかッ!!」

「オルガくんッ！」

神無月は食いつくオルガを抑える。オルガが琴里に必死で食いついている様子を戦慄したような視線を向けてくる。

しかしそれでもオルガは声を続ける。

「お前は悲しくねえのかよッ!?!目の前で殺されたんだぞ、家族が!!それなのになんで、平然としてられんだよ……!!」

黙り込んでいた琴里はオルガを制するように言う。

「落ち着きなさい。あんたの言い分も分かるけど士道がこれで終わりの訳ないでしょう?」

「はあ?」

琴里は半眼を作って告げる。琴里の言葉の意味が分からず、呆けた声を漏らす。そう。ここからが士道の本当の役目なのだ。

「し——ッ、司令!あれは……!!」

と、艦橋下段の部下が、画面左側にある——公園が映っているものを見ながら、驚愕に満ちた声を発してきた。

「なっ……!?!」

「——来たわね」

画面に映っているものを見ながら、オルガは驚嘆の声を上げる。

画面の中には、公園に横たわっている、かけられた制服が、突然燃え始めたのである。制服が燃え落ち——

「き、傷が——」

傷口が。ぽつかりと消失した欠損の断面が、燃えている。その炎は土道の傷を見えなくするくらいに燃え上がってから——徐々にその勢いを無くしていった。

そしてその炎が舐めとったあとには、完全に再生された土道の身体があった。

「——ん、——」

画面中に横たわった土道が、

「ん……お熱っちやああ!?!熱っつ!?!」

と、未だに燻っていた火を見て、跳ね起きた。

慌てた様子でバンバンと腹を叩き、火を消し止める。

「……………どうなって、やがんだ……………?」

「言ったでしょ。士道は一回くらい死んだって、すぐニューゲームできるって」
クルーたちは訝しげな視線を向けてきて、オルガはその場に崩れ落ちて安堵していた。

「すぐ回収して。」

——彼女を止められるのは士道だけよ」



「……………ちッ！」

三日月はバルバトスのコックピット内で舌を打つ。

かろうじて身を翻し十香の斬撃を避ける。衝撃は凄まじく余波だけでも十分威力がある。余波の威力も防ぐだけでモビルスーツの巨大で、後方に飛ばされそうになるくらいだ。

「ミカ……………なぜ、私の邪魔をする」

「多分、士道は自分の敵討ちをしてほしいなんて、思っていないと思うよ……………」

真正面から放たれる十香の一撃を防ぎ続けていたのもあって、少し疲弊していた。

「……………そうかもしれない。だがその女はシドーを……………私の前に立つのなら、お前もその女ごと殺すのみ」

十香の言い分も三日月には分からなくもなかった。後ろで茫然としているコイツは折紙家族を撃った。三日月も心の中では殺そうかと思っていた。

だが、これ以上十香を暴れさせるわけにもいかなかった。恐らく、ここで止めなければ十香は絶対の一撃で折紙を討ち滅ぼそうとするだろう。

そうしたら、街がどうなってしまうか。それは三日月にとってもあまり好ましくない。

それに——土道が戻って来るまでの時間を稼がなければいけないのだから。

十香は、巨大な剣で連撃を繰り返して来る。同じようにメイスで防ごうとするが、連続ともなれば話は別。メイスが剣の威力に耐えきれず、とうとう砕けちってしまう。

「ぐっ……」

一撃をモロにくらってしまい、大きな振動が機体を揺らす。今の一撃でバルバトスの右肩の一部が吹き飛んだ。

防ぐ手立てを失ってしまった以上、次の一撃はもう防ぎきれない。絶望的な状況に立たされてしまった。

すると、インカムから琴里の声が聞こえてくる。

『三日月、準備ができたわ』

「……分かった。十香……ッ！」

三日月が叫ぶと、十香は訝しげな表情を作る。

「あいつは——土道は、まだ止まってない」

「何？」

瞬間。

「十おおおおおおおお香ああああああああああああ——」

「ツ!!」

空から、そんな叫び声が聞こえてきた。

空を見上げると、一人の少年が落下してきた。

「シ————ド————？」

状況が理解できないような声で呟く。

落下してきた少年は先ほど撃たれたはずの五河士道その人だったからだ。ヘラタトスククからのサポートだろう。そのおかげでだんだんと落下速度が緩やかとなつていき、士道は十香の肩に手を置いた。

「よ、よう……… 十香」

「シド——……… ほ、本物、か……… ?」

「ああ……… 一応本物だと思う」

士道が言うとお香は唇をふるふると震わせた。

「シド——、シド——、シド——……… つ！」

「ぐうううううあああああああああ—— ツ!!」

「またもや上空から誰かの叫び声が聞こえた。土道と十香が見上げるとオルガ・イツカが降ってきた。」

「そのまますオルガは十香のもつ長大な剣に落下し、もたれかかる形で倒れ込んだ。」

「…………… 止まるんじやねえぞ……………」

「お前も、来たのか——」

「と、言いかけたところで土道と目覚めたオルガの視界に、凄まじい光が満ちた。十香の剣が、あたりを夜闇に変えんばかりに真つ黒な輝きを放っている。」

「うおっ!? な、なんだこりや……………」

「ツ…………… !しまった…………… !力を——」

「と、十香、これは——」

「【最後の剣】^{ハルツァンヘレツ}の制御を誤った…………… !どこかに放出するしかない…………… !——」

「どこかってどこだ!?!」

「…………… 「ん?」」

「十香は無言でオルガと、視線が合う。」

「まます、待ってくれ! 頼む! 俺に撃つのはいい! てかここで俺に撃つたら土道も巻き込まれっぞ?!」

「十香、お前……！だ、駄目だぞ、ここで撃っちゃ！」

「で、ではどうしろというのだ！もう臨界状態なのだぞ！」

言ってる間にも、十香の握った剣は黒光りの雷を撒き散らしていた。

オルガは大剣になんとかしがみついている状態で士道に話し掛ける。

「し、士道！あの方法をやるしかねえ！」

「え!?ま、まさか俺にやれって事か!？」

「剣にしがみついている俺ができると思うか?」

「で、できねえな……」

「頼んだぞ」

オルガに言われ、思い出した。

琴里から教えられた——十香を封印できる唯一の方法。

士道は腹を括り、口を開いた。

「そ、そのあれだ！十香！俺とキッ、キスしよう……ッ！」

「何!?!」

「す、すまん忘れてくれ。やっぱり他に方法を——」

「キスとはなんだ!?!」

「は……!?!」

「早く教えろー！」

「…………… つ、唇と唇を合わせ」

と、土道の言葉の途中で。

十香が何の躊躇いもなく、桜色の唇を、土道の唇に押し付けてきた。

「…………… ツー！」

力一杯に目を見開き、声にならない声を上げる。だって十香の唇が、柔らかくてしつとりとしてて十香が昼間に食べていたパフェの味がした。

すると、十香が纏っていたドレスのインナーやスカートを構成する光の膜が、弾けるように消失した。

「な……………」

「…………… ツ!?」

十香が狼狽に満ちた声を発し、土道とオルガの声が重なる。土道と十香そしてオルガの身体が、ゆっくりと落ちていく。逡巡しながら、土道は十香を抱いた。かなり弱々しく。おっかなびっくり。

「…………… ツー！」

息継ぎをするように、十香との唇を離した。慌てて胸元を起こす。

「ち、ちちちち違うんだ十香、俺は」
「み、見るな、馬鹿者……ッ！」

キスの意味を知らないわりに、人並みの羞恥心はあるようだった。十香が頬を染めながら睨んでくる。

「す、すまん……っ！」

裸になった十香がぴたりと、身体を触れあわせている。

「……… これで見えない」

「っ、あ、ああ………」

本当にこれでいいのだろうか、と思っただが、身動きを取れず、そのまま固まる。

二人のいい雰囲気をぶち壊すわけにはいかないと、オルガは、少し離れた場所から見ていた。

すると、オルガの横に三日月が来た。

「ミカ、バルバトスはどうした？」

「琴里に預けた」

「そうか———なあ、ミカ」

オルガが声を掛けると、三日月は首を傾げる。

「ここが俺たちの新しい居場所だよな」

「そうだね」

「こいつらのこと、守ってやんねえとな」

「うん」

抱き合う二人を見つめ、オルガと三日月は満足そうに拳をコンと合わせた。

十 香 徳 ツ ト エ ン ド
1

四糸乃アグニカ

第十話 兎の少女

「……………ふはあ」

「……………」

あの一件から数日が経過した。復興部隊の手によって完璧に復元がされた校舎には、もう相当数の生徒が集まっていた。

そんな中士道は、気の抜けた息を吐き、ぼうつと教室の天井を眺めていた。斜め前にいるオルガは三日月と何気ない会話をしていた。

あのあと士道は気を失ってしまった。その後、目が覚めた士道はオルガとともにへフラクシナスの医務室で入念にメデイカルチェックを受けさせられたのだが――

――気を失って以降、十香の姿を見ていないのだ。十香と話がしたいといつても叶わずじまいで終わってしまった。

あの日から士道の思考にはずっと引つかかるものがあつた。

あの時、十香とキスを交わした瞬間、何か自分の身体の中に温かいものが流れ込んでくるような感覚を覚えた。

あれは一体、何だったのだろうか。

「士道！」

「……………つ。いきなり大声出してどうした？オルガ」

「どうしたって、こつちのセリフだ。お前だってどうしたんだよ。さつきからずっと声掛けてんのに、ぼーっとしてよ。」

「い、いやなんでもない。てかもうすぐホームルームだぞ」

「いいんじゃないの？どーせタマちゃん遅れんだしよ」

「お前なあ」

と、そこで教室のドアがガラガラと開いた。

一瞬、教室がざわめく。

無理もない。何しろあの鳶一折紙が、額やら手足やらを包帯だらけにして登校してきたのである。

三日前の戦闘は三日月が十香と戦っていたが、三日月がくる前に十香が折紙を攻撃していたのである。

顕現装置リアライザを用いれば、大体の怪我はすぐに治るといふ話だ。三日経つたにも関わらず、あのように残っているということは、相当に酷い怪我だったのだろう。

「おはよう、折紙」

「おはよう」

三日月はいつものように挨拶すると、折紙は返した。

「お、おう、鳶一。無事で何より」

気まずげに土道が言いかけたところで、折紙は土道の目の前で深々と頭を下げる。

「と、鳶一……………?!？」

「……………ごめんなさい。謝って済む問題ではないけれど」

後に聞いた話によれば、十香を狙った一撃は、折紙が放ったものだったらしい。恐らくそのことを詫びているのだろう。

「……………なあ、五河、お前鳶一になんかしたのか……………?？」

「しとらんわ!してたら俺が謝る方だろうが!」

「じゃあオルガ、五河なんかやったか?」

「へ?いやなんもやってねえんじゃねえの?」

訝しげな視線を送ってくる殿町に突っ込みを入れると、折紙に視線を向き直した。「い、いいから、取りあえず頭を上げてくれ……………」

土道が言うのと、折紙は案外素直に姿勢を戻す。

「……………分かった」

そう言うのと折紙はそのまま土道の横を通り過ぎ、隣に立っていた三日月の腕にびたり

とくつつく。

「……………は?」……………え?」

予想外の折紙の行動にクラスの面々の目が点になる。三日月は頭の上にはてなを浮かべたが、気にする素振りも見せず、そのまま折紙に声をかける。

「怪我、大丈夫なの?」

「問題ない」

「そう、ならよかった」

短い会話だったが、この間に土道含め、クラスの面々は皆黙り込んで二人を眺めていた。その後二人は何事もなかったかのように席に着く。

「えっ三日月くん、鳶一さんと付き合ってるの!?!」

「いやでも、さ、流石にただの友達なんじゃ」

「友達であれはないでしょ!」

「ご覧の通り女子は盛り上がり、一方男子は

「……す、すげえよ、三日月ミカは……………」

口を揃えて感嘆の声を上げた。

女子が恋バナに花を咲かせ、男子は呆然と三日月と折紙を見ている間に扉が開かれる。

「はい、皆さん席についでござい」

タマちゃん先生が教室に入ってくる。タマちゃん先生の言葉で続々と席に着いていく。すると、タマちゃん先生がやたら元氣そうに声を出す。

「そうそう、今日は出席を取る前にサプライズがあるの！」

言つて自分の入つてきた扉に向けて声をかける。

「ん」

とそれに応えるように、そんな声がして。

「な……」

「は……!？」

「……………」

「……………」

「今日から厄介になる、夜刀神十香だ。皆よろしく頼む！」



「シドー！オルガ！クツキーというを作ったぞ！」

腰までであろうかという夜色の髪をなびかせながら、容器を手にし、土道とオルガの目

の前にズイツと出してくる。

「と、十香」

「…………… や、その」

言いたいことは色々あったが、その眩しすぎる笑顔に、何も言えなくなってしまう。
「そんなことよりも、二人とも、これを見てくれ！」

容器の中には歪な形だったり、所々焦げていたりはするものの、まあ辛うじてクッキーと呼べるものが出来なくもない物体が入っていた。

「おお、こいつは……………」

「うむ、皆に教えてもらいながら、私がこねたのだ！食べてみてくれ！」

士道とオルガは、言いしれぬ殺意が向けられるのを感じた。

単純に——教室中から、男子たちの怨嗟に満ちた視線が注がれたのである。

そうなるのも無理はない。何故なら女子から手作りクッキーをいただくなどというのは、他の男子からは嫉妬の的である。

一方、三日月は——

「私を作った。食べて欲しい」

「いいよー」

折紙からクッキーを貰って食べていた。三日月も同じような視線を向けられていた

が、特に気にする様子もなく、手作りクッキーを口に放り込んでいた。



十香が転校して以降、折紙と険悪な仲だったのだが、三日月の仲裁もあつて十香も学園生活を楽しんでいるようだった。その間にも土道とオルガは何度か巻き込まれたが。

最も二人は、

片や、世界を殺す災厄と呼ばれた『精霊』

片や、陸上自衛隊・対精霊部隊アンチ・スピリット・チームの魔術師ウイザード。

という人間の領域を遥かに超えた、規格外の異能を有する少女だった。そのため二人の喧嘩は口喧嘩という可愛いものではなかった。

実際一ヶ月前まで、何の比喩でもなく命のやり取りをしていた二人だ。すぐに仲良くなるというのは無理と言えば、当然のことであつた。

まあそれを止めに入る、三日月のバルバトスも似たようなものだが……。

「ん……………」

自分の阿呆さに溜息を吐こうとした瞬間。顔を上にやった。

突然、ぽつんと雨が降ってきた。いつの間にか空がどんより曇っていた。

「雨かよ。天気予報だと晴れって言ってたじゃねえか」

最近的中率の低い気象予報士に恨み言を呟く。慌てて、小走りで家へと急ぐ。

しかし、雨はみるみるうちに激しさを増していった。

「おいおい、マジかよ……」

士道にとっては、服が貼りついて気持ち悪いとか、風を引いたら嫌だなという思考より先に制服が明日まで乾くかという思考のほうが先に来た。

できるだけ濡れぬように、無駄な努力をしながら、自宅への道を走る。

だが、丁字路を右に曲がったところで。

「あ………？」

ふと、前方より気になるものが現れた。

「女の子………？」

目の前に現れたのは可愛らしい意匠の施された外套に身を包んだ、小柄な少女だった。

顔は窺えないが、ウサギの耳のような飾りのついた大きなフードが、顔をすっぽりと覆い隠していたからだ。

さらに左手にはコミカルなウサギ形のパペットが装着されていた。

そんな少女が、楽しげにぴよんぴよんと飛び跳ねていた。

「なんだ……………」

士道は、眉をひそめてその少女を凝視した。

なぜ少女は、こんな所で飛び跳ねているのかということは気になる。

しかしそこは問題ではなかった。

それよりも自分はなぜ——あの女の子に、目を引かれたのだろうか。そんな、疑問が脳裏をよぎる。

雨の冷たさも、濡れた衣服のことも気にならなくなっていた。

ただ、冷たい雨垂れのカーテンの中、軽やかに踊る少女に目を釘付けにされ

ずるべったああああああんツ！

「……………は？」

……………盛大に女の子が、コケた。

顔面と腹を思いつ切り地面に打ち当て、辺りに水しぶきが飛び散る。ついでに彼女の左手からパペットがすつぽり抜け、前方に飛んでいく。

うつ伏せになり、そのまま動かなくなる。

「……………お、おいッ！」

士道は慌てて駆け寄ると、その小さな身体を抱き抱えるように仰向けにしてやった。

「だ、大丈夫か、おい」

そこで初めて少女の貌かおを見取ることができた。年の頃は土道たちの妹・琴里と同じくらいだろうか。ふわふわの髪は海のような青。柔らかそうな唇は桜色。まるでフランズ人形のように綺麗な少女だった。

と、そこで少女が蒼玉サファイヤのような瞳を見開く。

「ああ…… よかった。——怪我はないか？」

土道が少女に問うと、彼女は顔を真っ青に染めて目の焦点をぐらぐら揺らし、土道の手から逃れるようにびよんと跳び上がった。そして距離を取ると、全身を小刻みに震わせ、土道を怖がるような視線を送ってくる。

「…… ええと、そ、そのだな。俺は——」

「…… ーん、ない、で、…… ください…… つ」

「え？」

「いたく、しないで…… ください……」

少女は怯えた様子で言ってくる。土道が自分に危害を加えるように見えるのだろうか、その様は、まるで震える小動物のようだった。

「ええと……」

対応に困る土道は、そこで地面に落ちていたパペットに気が付いた。

先程少女の手から抜け落ちてしまったのだろう。

「これ………君のか？」

「………！」

すると少女は目を大きく見開き、少し近づくの躊躇うが、土道に近づき、パペットを奪い取り、それを左手に装着する。

と、そのとき

「土道？」

後方からいきなり声をかけられる。

声のする方を振り向くと、そこには黒い傘をさした三日月の姿があった。

「何してるの？」

「あ………いや、これは」

と、思わず言葉を詰まらせる。三日月になんと話せばいいのだろうか。土砂降りにも関わらず、この場にいるのは不自然なことだと、思われるだろう。

「………あ」

すると土道は三日月にあることを思い出した。

「そういえば、三日月。クラス委員長の仕事は終わったのか？」

「うん」

短く頷く。三日月は士道たちのクラス・二年四組でクラス委員長をしている。今日は委員長としての仕事があったため三日月は学校に残っていたのだ。

「帰らないの？ 予備の折りたたみ傘あるから貸すよ」

「あ、ああ、悪いな」

士道が立ちあがると、少女を一瞥し、

「転ばないように気を付けろよ」

踵を返し、走り去っていった。

少女は走り去っていく士道の姿を見つめていた。



天宮市のとあるカフェにて

「……………ん」

男はコーヒークップを手にしながら、窓の外を眺める。外を見やると、雨がぽつりと降り始めた。

「……………雨……………か」

呟くように言い放つ。先程まで晴天だったというのに、急に降り始めるとは運がな

い。

すると男の目の前に座っている長髪の男が口を開いた。

「―― 准将、よかつたのですか？」

「―― よかつたとは何がだ？」

コーヒーを一口啜ると、長髪の男を見やる。

「いえ、アレが輸送されるのは明日のはず、我々のみが先にこの町に来てよろしかつたのかと」

「問題はない。アレの輸送には時間がかかる。先に我々がこの町に来て問題ない」

そのようなこと彼にとつては些末ごとに過ぎない。実際輸送に時間がかかるのは上からも伝えられていたことである。

「それに――」

男は切り出すと、もう一度コーヒーを啜り、コーヒーカップを置き、

「それに、我々には使命があるからな。精霊を保護するという重大な使命が」

と、金髪の男―― マクギリス・ファリドは言った。

第十一話 屋根の下にて

「ただいま」

三日月の傘を借りて家に帰った土道は彼と別れたあと家のドアを開ける。

ぐっしよりと濡れた靴と靴下を脱ぐ。並べられている靴を一瞥すると、琴里とオルガの靴がある。どうやら先に帰ってきていたらしい。

琴里には訊きたいことが沢山あったが、今の土道はずぶ濡れと泥まみれになってしまっている。流石にこのままの状態で、話し合う訳にはいかない。一度体を拭いてからゆっくり話すでしょう。

ズボンの裾を捲ると、急いで風呂場に爪先立ちで駆け込み、慣れた手つきで脱衣所の扉を開いた。すると。

「ッ!?!」

瞬間、土道は身を凍らせた。

本来脱衣所にいるはずのない少女がそこにいたからである。

なんとそこに居たのは、夜刀神十香の姿があった。しかも——一糸纏わぬ姿で。

「と、十香……………」

「……………ッ!?!」

士道を認識した十香が肩を震わせ、顔をこちらに向ける。

「な……………ッ、し、シドー!?!」

「あ、や、ち、違うんだ……………!これは

「いッ、いいから出ていけ……………っ!」

「ぐえふッ……………!?!」

弁明の隙も与えられず、見事過ぎる右ストレートを鳩尾に食らい、そのまま後方によろめいて、壁に背を、床に尻を預けてへたり込む。

間髪入れず、びしゃん!と、脱衣所の扉が閉められた。



「琴里い!どういことだッ!」

「おー?おにーちゃん。おかえりー」

「おう、ただいま……………じゃなくて!」

思わず普通に返事をしてしまっってから、首をブンブンと振る。

「お前が十香を連れてきたのか……!?」

「まーまー、落ち着いて落ち着いてー」

「落ち着いていられるかつ!」

「まあ、そうカツカすんなって土道」

パジャマに着替えているオルガが制するように言ってくる（洗濯物をたたみながら）。
「オルガ、いやでも何で十香がうちにいんだよ? 今日、令音さんと一緒に帰ったじゃねえか」

「理由があつてね、シン」

声のする方に目をやると、目に分厚いクマを作った令音がダイニングテーブルに着いていた。

因みに彼女の恰好は土道の母親のパジャマを着用していた。

「れ、令音さん? 何やつてるんですか……?」

「…… ああ、すまない。砂糖を使いすぎたかな」

「ああ、大丈夫つスよ。後で俺が詰め替えとくんぞ」

「いや、オルガもそうじゃなくて!」

土道は、たまらず叫んだ。



「……………で？ 一体どういうこった？」

「今日からしばらくの間、十香がうちに住むことになったのだ！」

士道の質問に琴里がえっへんと胸を反らす。

「だから、どうしてそうなったんだって訊いとるんじやあああああッ！」

「…………… 士道、落ち着いて」

士道が叫んだ所で、三日月が声を上げた。三日月は琴里に呼ばれたため、今五河家にいたが、オルガと同じく、パジャマを纏っていた。

「…………… 理由は大きく分けて二つある」

令音が静かな声で、話始める。

「…………… 一つは…………… 十香のアフターケアのためさ」

「アフターケア…………… つていうと？」

「…………… うん。彼女は君との口づけによって精霊としての力は封印された……………

今、シンと十香の間には、目に見えない経路つまりパスのようなものが通っている状態なんだ」

「パス？」

「正直ピンと来ませんねえ……」

「…… 簡単に言うとは、十香の精神状態が不安定になると、君の身体に封印してある力が、逆流してしまう恐れがあるということさ」

「な…… ツ」

封印された十香の力が逆流した場合それはつまりあの強大なる力をまた彼女が有してしまうということだろう。

「…… 十香は君たちといるときが最も数値が安定する。」

「は、はあ……」

「…… と、いうわけで、精霊用の特殊住宅ができるまでの間、十香をこの家に住まわせることになったんだ。」

「なるほどな」

腕を組んだオルガが頷く。

確かにわからなくもない。

それに自分が十香に信頼されるというのは、悪い気はしなかった。

しかし、簡単に許可を出せる問題でもない。

「二つ目の理由だけど、これはあんたたち二人の訓練でもあるわ」

リボンを白から黒に変えた琴里が発する。

「待つてくれ、訓練つてまだやんのかあ？十香の力は士道が封印して……………」

「……………精霊が十香一人だなんて誰が言ったの？」

「え……………？」

「……………琴里の言う通りさ。空間震を起こす特殊災害指定生物——通称・

精霊は、十香だけではない。十香の他に数種が確認されている。」

「なんだとツ……………!?」

オルガが思わず驚愕の声を漏らす。それは士道も同じであった。

「……………シン、オルガ。君には引き続き、精霊との会話役を任じてもらいたい。」

「……………つ、じよ、冗談じゃ——」

士道が叫びを発しようとした瞬間。

「——俺は一向に構わねえよ」

隣に座していたオルガが口を開く。

「な……………ツ!？」

琴里が小さな声を上げる。

「本当に良いのかしら?」

「……………別に気が進まないわけじゃねえさ。だが精霊を救うつて決めたのは俺自身だ。十香と同じような奴がいるつてんなら、途中でどんな地獄が待つてようとやってやる。そ

れだけだ」

そう言うのと、琴里に向けて不敵な笑みを向ける。

「ふうん、土道はどうかしら？」

「っ、嫌に決まってるだろっ！」

土道が言い放つ。その様子をオルガと三日月はじっと見つめていた。すると琴里は軽く身体を反らしてあごを上げながら口を開く。

「そう。——じゃあ、もうどうしようもないわね」

「………？」

「空間震によつて世界がボロボロになっていくのを黙って眺めるか——それ

とも、精霊がA S Tに殺されるのを待つか。はたまたオルガにずっと頼り切るか。どっちになるんでしょうね」

「…… ツー！」

別に失念していた訳ではない。だが——改めてその事実を口に出される

と、心臓が痛む。

臨界と呼ばれる世界に存在する精霊は、希にこちらに現れる。

破壊の大小はあれど、空間震による被害によつて滅茶苦茶に破壊されてしまう。

「土道」

先程まで、黙っていた三日月が声を上げる。

「み、三日月」

「土道はどうしたい?」

「そ、それは……」

思わず言葉を詰まらせる。何をしたいのかいきなり訊かれても、うまく浮かんでこなかった。

「精霊の力を封印できるなんて普通じゃあり得ないって琴里と令音が言ってた。だけど、土道が逃げるって言うんだったら俺たちは止めるつもりもないよ」

そのまま三日月は続ける。

「だから、だからこそ、これは土道のこれからを決める決断だ。これは——土道が、自分で決めなくちゃならないんだ」

「……ッ」

三日月の言葉は土道の心に深くささる。三日月の言葉はとても真つ直ぐで重かった。言い放った彼の表情も言葉に込められた彼の想いも。

だからこそ自分がこれから背負わなければいけないものの重責を感じ取る。

だが——そもそも前提として。

土道には確かめなければならないことが幾つかあった。

「琴里」

「何かしら?」

「まず聞かせてくれないか。へラタトスクってのは、一体なんだ? お前は、いつ、そんな組織に入って、三日月はどうしてバルバトスに乗ることになったんだよ? それに――」

「俺とオルガのこの力のは、一体なんだ?」

「士道がずっと訊こうとしていたのは、それだった。」

「琴里は、三日月の方を一瞥する。三日月は小さく頷く。」

「そうね。丁度いい機会だし、あんたたちにも簡単に話しておきましょうか」

「琴里は、ポケットからチュツパチャプスを取り出すと、包装を外し口にくわえながら、話を始めた。」



「簡単にまとめると、『士道とオルガには接吻^{キス}精霊の力を封印できる』、『士道とオルガには他に傷を治癒する能力がある。』というのが、へラタトスクの観測によって分かったの」

「それは分かった。だが琴里、お前が司令官に着任したのいつだっけ？」

「五年前よ」

「お前今の年齢だったら、五年前ってまだ八歳じゃねえか!？」

「ええそうね。ま、数年の間は、研修みたいなものよ。実際に指揮を執りだしたのはここ最近」

「そこは問題じゃねえだろ……………」

「こ、琴里のこともあるけど、それは三日月だって同じだろ！いくら同じ年とはいっても、まだ十二じゃねえか！」

「まあそれぐらいね。でも彼も私と同じでバルバトスに乗り始めたのはここ最近。まあオルガの話聞く限り、前世でもMS操縦の才能があるのは聞いてたしね。それもあつてすぐにパイロットとして選ばれたのかも」

「改めてみると凄いなだな、三日月って……………」

簡単に今の話をまとめると、

まず一つ目がへラタトスクの結成理由は精霊を保護し、幸福な生活を送らせること。空間震を防ぐことでもあるが、それは副次的なものらしい。

もつともへラタトスクの上層部である円卓會議ラウンズには精霊の力を利用しようとする輩もいるらしいが。

そして二つ目が精霊の力をキスによつて封印できる少年が発見されたそれが士道とオルガなのである。なぜ備わっているかを聞いたら、琴里らしくなくはぐらかされたが。

「とにかく、よ。今必要な情報は『士道とオルガには、精霊をなんとかする力がある』。それだけよ！その上で選んでちょうだい。——これからも、精霊を口説き落としてくれるかどうかを、ね」

「……………っ」

士道は、苦々しく唇を引き結んだ。

士道たち二人にしか、精霊の力を封印することはできない。

士道とオルガが救うと決めた十香と同じ境遇の精霊たちは、一方的に災厄と呼称され、ASTに襲われる。

彼女たちは——自分たちの意思で世界を壊そうとしているのではないのに。

それに空間震の問題だつてある。二人が精霊の力を封印しなければ、もしかしたらユーラシア大空災にも匹敵するレベルの災害が起きたつておかしくない。

例え精霊の問題を全てオルガに押し付けてしまったとしても、オルガに全部の負担がかかってしまう。

「……………も、もう少し、考えさせてくれ」

「ま、今はそれでいいわ。それじゃ令音準備を」

「………… ああ、任せてくれ………… というか、おおむね終わっているよ」

令音が頭をゆらゆらさせながら、言う。

「さつすが仕事が早いわね」

「………… 準備？まさか十香のことか？」

士道は、嫌な予感を察し、汗を滲ませながら訊く。

「あら？勘がいいわね。そう、十香の部屋には二階奥の客間を使うわよ」

「ちよ、ちよつと待てっ！少し考えさせろってさつき言っただろうが！」

「別に構わねえよ」

「オルガあああああつ!？」

士道がオルガの名を叫ぶと、琴里はやれやれと言った様子で耳を塞ぐ。

「うるさいわね。どつちにしろ、十香には特設住宅ができるまでの間、ここにいてもらう

しかないの。それに、士道が決断してから訓練してんじや遅すぎるしね。」

「………… 落ち着け、士道。例え特設住宅ができたとしても、どつちみち十香と生活すること

に変わりはないんだ。今のうちに慣れておいても損はねえだろ？」

「だ、だからって…………」

論すようにオルガに言われ、士道が食い下がっていると、士道の後方

里の部屋の出入り口に当たる扉が開いた。

「…… シドー。やはり、駄目か？ 私は…… ここにいては」

「…… ツ」

眉を八の字にし、悲しそうな瞳でこちらを見つめてくる十香に、声を詰まらせる。

…… あんな顔をされては、否と言えるはずがない。もし言える人間がいたら、みてみたいものである。

「…… わ、わかったよ…… つ……」

こうして澁々ながらも十香との同居生活が始まったのであった。

第十二話 二つ目の訓練

「……それで、訓練つてのは一体なんだ？俺だけでなく、オルガと三日月に何やらさせるつもりだよ」

あのあと夕食を終え、リビングのソファに腰掛けた琴里に問うてみた。

今五河家のリビングに居るのは、土道とオルガ、三日月そして琴里だった。

令音はその後〈フラクシナス〉に帰り、十香は

〈フラクシナス〉 隔離エリアの部屋で使っていたものの荷解きを客間でしている。

「ああ、それなんだけど、三日月は訓練しないわよ」

「*thc.*」

困惑した声を上げる二人。琴里は食後のチュッパチャプスをくわえながら言う。

「最初は三日月も訓練させようと思ってた。だけどね、三日月の行動をモニタリングさせてみたの。そしたら……ねえ……」

「そしたらなんだよ？」

琴里がなんとも言えない表情を浮かべる。

「ま、まあ、これを見てちょうだい」

すると琴里がパソコンを取り出し、画面を土道たちに見せる。

「……………」

土道とオルガは画面に映された情報を見た途端硬直した。画面には三日月と同じくラスの鳶一折紙と三日月が映っていた。これだけだったら、女友達と仲良くしているだけで特に異常はない（はず）。しかしそれだけではなかった。

なんとそこには三日月の上に覆い被さる折紙の姿があった。

「お、おい!?なんだよ、こいつはあ!?!」

「安心しなさい、三日月の体はまだ清いままよ」

「そこじゃねえ!?!そう言うことじゃなくて、何で三日月が鳶一と一緒にいて、こんなことになってんだよ!?!」

「で、どうなのかしら?三日月」

「……………」

三日月はチョコレートを口に放ると、顔を上げる。

「……………」

ああ、これ?」

パソコンに映された画像を見て一拍置くと、話し始めた。

「……………」
急に折紙に倒されてさ。確かここから退いてほしいのなら、自分のことを名前
で呼んでほしいって言ってた」

「「……………」」

無表情のまま何事もなかったかのように話す三日月に思わず土道たちは眉をひそめる。

このようなことがあったというのに、恥じらう素振りも見せず、冷静に話せる三日月にもはや尊敬すら感じてしまうほどだった。

「三日月はこの映像のほかにも三日月は鳶一折紙からの猛烈なアプローチを受けているの」

と、仕切り直すように琴里が口を開く。

「………… そのおかげでどんな訓練を行ったとしても、今の彼なら冷静に対応してしまうと私たちは判断してね。そうした上で三日月には今回の訓練に参加させないことにしたんだ」

「………… な、なるほどな」

「俺は別にやってもやらなくてもいいけど」

令音の言葉に土道は首肯する。三日月はあまり気にしていないようだったが。

「とまあ、話を戻すけど今回の訓練をするのは土道とオルガの二人だけというわけ」

「んじゃあ、もう一度聞くけどよ、訓練って俺たち何をすればいいんだ？」

オルガは再度琴里に問う。

「別に、何もしなくていいわよ」

「は？どういふことだ？」

「んー、正確に言うると、普段通りの生活を送ることが今回の課題……かしらね」

「あ？」

「基本的に士道の訓練は、これから何人もの精霊とデートすることになったことを想定して、女の子と緊張せずに話せるようになることを目的としてるわけよ」

「…… ああ、そういうえばそんなこと言ってたな」

「今回は、女の子と同居というイベントを生かした実戦訓練なの。要は、突然女の子と胸キュン展開になっても、落ち着いて紳士的に振る舞えるようになってほしいわけよ」

「…… はあ」

「だから士道は十香との同居期間中、どんなムフフなスケベイベントが起こっても、焦らずに対応してくればそれでいいわ」

「…… なんだそりや……」

日常生活ではまず聞かないだろう単語に思わず、オルガは眉にしわを寄せる。

「あ、そうだとオルガ」

「どうした？」

「トイレの電球を変えてきてくれるかしら？さつきみたところ、切れてて」

「?..... おう、分かった」

オルガは少し不審に思ったが、予備の電球と椅子を手にするとトイレに向かった。そして扉を開け

「は？」

呆けた声を漏らし、フリーズする。

「なっ.....、オルガ!?」

パンツを膝元まで下げた十香がいたのである。

「とっ、とととととと十香なんでお前こんなところにいんだよ!?」

「それはこっちの台詞だ！早く閉めんか!!」

どうなっついていやがる!?! トイレの鍵は閉まってなかったし、電球切れ

てすらいねえじゃねえか!?! うああああ

「ああああう!!」

顔を真っ赤にした十香が力いっぱい投げたトイレットペーパーがオルガの顔面に当たる。柔らかいトイレットペーパーとは言え、それなりの衝撃となっていた。

それを顔面にヒットしたオルガはそのまま床に倒れ込む。

「..... だからよ、止まるんじゃねえぞ.....」

「情けないわね。焦らずとちらずと言ったばかりなのに」

いつものように団長命令を口走るオルガの前に琴里が現れた。

「琴里…… お前……」

恨めしそうに睨むオルガを気にせず、琴里がチュッパチャプスの棒をピンと立てる。

「だ、大丈夫か!? オルガ! おい、琴里これってどういうことだよ!」

「こういうこと。さつきも言っただけど、同居期間中は平常心を乱さずに生活するのが目的。あんた二人の様子はヘフラクシナスのモニタでチェックしているわ。」

「今のは、もちろん、駄目。失敗したのでペナルティとして、オルガの黒歴史である……」

と、琴里は手にしたノートをバツと広げて見せた。

「うああああああ!」

このノートの内容としては、中学校時代に自分の考えたオリジナルの漫画のキャラの設定が書き記されていた。

叫びながら、琴里の手にしたノートを奪い返そうとするが、琴里はそれをひらりと躲かわす。

「と、まあ、こんな感じに平常心を乱したら、あんたたち二人の黒歴史を流すわよ! ちなみに士道は中学校時代に書いた詩を流すから」

「ちよつと待て!?! 前よりグレードアップしてるじゃねえか!?!」

「訓練だからって気軽にやられちゃ困るからね。でも、安心なさい。全部失敗しない限り、作者名を流すことにはならないから」

「それ全部失敗したら流すって言うてるようなもんじゃねえか！」
五河家内で二人の悲痛な叫びがこだました。

結局その後の訓練は地獄のようであり、オルガと士道のされた行いはまさに悪魔の所業だった。



「おう五河、オルガ、三日月……………て、二人どうした」

「…………… ああ、ちよつとな」

朝、士道とオルガは重たい足を引きずって教室に入るなりかけられたのは、殿町の怪訝そうな声だった。

今の士道とオルガは、身体のおちこちに湿布が貼られ、足取りは今にも倒れそうになつてた。

「…………… なんでもねえからよ」

「そうか……………？なあ三日月、この二人なんかあったのか」

「なんもないよ」

「そ、そうか。ところでお前らにも訊きたいんだが、ナースと巫女とメイド。どれがいいと思う？」

「……………は？」

予想外の言葉に、三人は間の抜けた声を発する。

「読者投票で次号のグラビアのコスチュームが決まるらしいんだが……………悩むんだよなあ」

「……………ああ、そう」

「なんだよ、つれないなあ。三人とも。で、お前たちはどれがいいと思う？」

「そうだな……………んじやあメイド？」

「ふむふむ、それじゃ二人はどうだ？」

土道の返答を聞くと、今度はオルガたちに質問をふつてくる。

「よく分かんないけど……………俺もメイドかな」

「俺は、ナースだな……………」

「ほう、なるほど……………。それじゃオルガ、後でナース好きどうし語り合おうぜ！」

そう言うのと、殿町は自分の席へと歩いていった。

土道たちも、あまり気にせず、自分の席に鞆を置いた。

その際、既に三日月の隣の席に着き、分厚い技術書を読んでいた折紙が、ちらと三日月に視線を向ける。

「おはよう、折紙」

「おはよう」

そう返すと、折紙が小さく首を傾げてきた。

「メイド?」

「どうやらさっきのやり取りを聞かれていたらしく、手を横に振る。」

「あーなんでもないから、あんま気にしないで」

「そう」

それだけ言うと、再び書面に視線を戻した。

ふと、土道は先程とある女子生徒の会話を思い出す。

———
「そういえば、隣のクラスに新しい副担任が来るかもって言ったな。」



来禅高校の職員室にて。

「隣のクラスに新しい副担任の先生ですか？」

「……はい」

今にも眠ってしまいそうな大きな隈をした令音が珠恵に話し掛ける。

「私聞いてませんけど……」

「……私知り合いである教師がとある事情で急遽この学校に赴任することになっ

たんです。……それで隣のクラスの副担任を担当するらしいです」

「そうだったんですか、それでその先生が赴任なされるのはいつですか？」

「……三週間後でしょうか。担当教科は英語と彼からは聞きました」

眠そうに口を開く令音に珠恵が問う。

「それで名前はなんとおっしゃるんですか？」

「……『マクギリス・ファリド』です」



「シドー！オルガ！昼餉だ！」

士道とオルガの机にがっしやーん！と十香の机がドッキングされる。

「ミカも……」

「三日月」

三日月にも声を掛けようとしたが、どうなら先客がいたらしい。

「あ、折紙」

「……………ぬ、なんだ、貴様。邪魔だぞ」

「それはこちらの台詞」

「みんなで食べばいいじゃん」

三日月が言うと、渋々と言った様子で十香と折紙は大人しく席についた。そして二人とも、自分の鞆から弁当を取り出し、蓋を開ける。

すると、士道が三日月の弁当を見つめる。

「どうしたの？」

「いや、オルガと同じ弁当なんだなって」

そう。三日月の弁当に入っていたのはオルガのと同じメニューだった。

「ああ、いつも違うメニューにしてんだけど、今日は時間がなかったからな。仕方なく、同じメニューにしといた」

「三日月、一つもらってもいい？」

「み、ミカ！私も頂いてもいいか？」

「うん、いいよ」

三日月が頷いたそのとき。

ウウウウウウウウウウウウウウ

街中に、けたましい警報が鳴り響いた。

瞬間、ざわついていた昼休みの教室が、シーンと静まり返る。

——空間震警報。

「……………」

折紙は一瞬逡巡のようなものを見せながらも、すぐさま立ち上がり、教室から出て行ってしまった。

「土道」

「…………… ツ、ああ」

土道は、複雑な心境で、その背を目で追うことしかできなかつた。今彼女は戦場にASTとして赴いた。

——精霊を殺すために。

と、そこで教室の入り口から、ぼうつとした様子の声が響いてきた。

「……………皆、警報だ。すぐ地下シエルターに避難してくれ」

白衣を纏った眼鏡の教師

令音が、廊下の方に指を向ける。令音の指示に

従い、生徒たちは次々と廊下に出ていく。

「ぬ？シドー、一体皆どこへ行くのだ？」

「あ、ああ……………シエルターだよ。学校の地下にあるんだ」

「シエルター？」

「ああ。とりあえず説明はあとだ。俺たちも行くぞ、十香」

「ぬ、ぬう」

十香は手を付けていない弁当に名残惜しそうな視線を残しながらも、土道の指示に従って立ち上がった。

そして、オルガと三日月とともにクラスメートたちのあとについて廊下に出ようとしたところで。

「……………シン、オルガ、三日月。君たちはこっちだ」

「つ、れ、令音さん？こっちって……………」

土道とオルガ（三日月はひらりとかわした）の首根っこを掴まれた。

「決まっているだろう、へフラクシナス」だ」

他の生徒に聞こえないように声をひそめながら、令音が言ってきた。

「…………… 昨日の今日だ。今後のことについて、まだ結論は出ていないかもしれない。

だが…………… いや、だからこそ、君には見てほしい。精霊と、それを取り巻く現状を」

「…………… 分かりました。行きます」

「…………… さあ、急ごう。空間震まで、もう間もない」

「は、はい。つて十香は連れてかなくていいんですか?」

十香は次々と避難するクラスメートたちに、戸惑っていた。

「…………… ああ、そのことか。

うむ、十香は皆と一緒にシエルターに避難さ

せてしまおう」

「え? それでいいんですか?」

「…………… ああ。力を封印された状態の十香は人間とそう変わらない。それに、精霊と

A S T の戦いを見て、自分のことを思い出されても困ってしまう。言っただろう? ヘラ

タトスクンとしては、できるだけ十香のストレスを蓄積させたくないんだ」

「いや、でも……………」

と、土道が言いかけたところで、廊下の奥の方から、甲高い声が響く。

「ほ、ほらっ、五河さんと三日月さんに夜刀神さん、村雨先生までっ! 早く避難しないと

危ないですよ!」

「先生、十香をよろしくお願ひします!」

「ふえ？え？あ、は、はい、それはもちろん」

「シドー、オルガ、ミカ……………？」

十香が不安そうに眉を歪めてくるような

「十香。いいか？先生と一緒に避難しててくれ」

「シドーたちは、シドーたちはどうするのだ？」

「あ……………俺たちは、ちよつと大事な用があるんだ。先に行つててくれ。な？」

「！あ、し、シドー！」

「ちよつと皆さん!?一体どこへ!？」

心配そうな二人の声を背に聞きながら、士道たちは、校舎の外へと走っていった。

第十三話 ハーミット

士道たちがへフラクシナスへと移動する数分前

「……………ッ!？」

施設内にけたたましい警報音が鳴り響く。

ここは天宮市内に存在するへラタトスクの保有する施設。

ここには非常時に備えて、CRユニットやモバイルスーツが格納されている。

そこのとある一室にてラタトスクのデータに目を通していた男が小さく呟く。

「……………来るか」

すらすらとした長身に軍服を身に纏い、顔立ちの整った金髪の青年である。マクギリス・ファリド。それが彼の名だ。

鉄華団と手を組み、ギャラルホルンの象徴であった『ガンダムバエル』を手にして世界に革命を起こそうとし、自ら裏切った友に撃たれた男。すると

「失礼します。准将」

という声が聞こえ、彼の部屋に一人の男が入ってくる。マクギリスと同じく軍服を纏っている、堅実そうな男だ。

「石動」

そう。マクギリスの副官である石動・カミーチエである。

「どうした？」

「我々のモビルスーツがこちらに届きました」

「そうか。どうやら我々の仕事の時間のようだな。行くぞ、石動」

「はっ」

石動が首肯するとマクギリスが立ち上がり、石動の横を通り過ぎてゆく。

それからしばらくすると、前方を歩くマクギリスが口を開いた。

「機体の整備は完了しているのか」

「はい、整備長からは特に異常は無かったと」

「そうか、しかし驚いたな」

「何がでしょうか」

「いや、彼らとまた出会えるということに驚きを隠せないな」

「その割にはあまり驚かれていないようですが」

「村雨解析官や五河指令から話は聞いていたからな。彼らのことは一度聞いていたさ」

短く答えて、歩を進める。重苦しそうな扉が目の前に現れる。扉の横に設置された

電子パネルを操作すると、パネルからピツと小さな音が鳴り、巨大な見た目とは裏腹に

滑らかに開く。

マクギリスと石動は部屋の中に入っていく。

部屋の中は巨大なドーム型の建物となっていた。辺りを見回すと壁にはラタトスクのマークが描かれており、周囲には水が張られていた。

そして中央には何かが立っている。

そこにいたのは、白銀に輝く巨人だった。

その姿を目にした瞬間、不思議と何ともいえない高揚感がマクギリスを支配する。思わず唇の端を上げてしまう。

「久しぶりだな。アグニカ・カイエル、今一度目覚めの時だ………！」

笑みを浮かべながら、マクギリスは颯爽と上着を脱ぎ捨てた。



「ああ、全員来たわね。もうすぐ精霊が出現するわ。令音は用意をお願い」
士道たちはフラクシナスの艦橋に着くなり、艦長席に着いている琴里から、そんな言葉が飛んできた。

令音は小さく頷くと、艦橋下段にあるコンソールの前に座り込む。

「さて」

と、土道が無言でいると、琴里が首を傾げるようにしながら問うてきた。

「あまり時間をあげられなくて悪いのだけれど。腹は決まったのかしら、土道」

「……っ」

息を詰まらせる。が、そこで突然、艦橋内にけたたましいサイレンが鳴り響いた。

「ど……どうした？」

「非常に強い靈波反応を確認！来ます！」

土道とオルガが狼狽に目を丸くすると同時、艦橋下段から男性クルーの叫び声が発せられる。

「オーケイ。メインモニタを、出現予測地点の映像に切り替えてちょうだい」

琴里が指示を発すると、メインモニタに、街の映像が俯瞰で映し出された。

いくつもの店が建ち並ぶ大通りである。しかし当然の如く人の姿はなく、ゴーストタウンのようになっている。

そんな映像の中央が、ぐわんつ、と撓む。

「え……？」

一瞬、画面に異常があるのではないかと思つたが————
——— 違う。

空間に。何も無いはずの空間に、水面に石を投げ入れたときのような波紋ができてい

た。

「な、なんだこりや……」

「どうなつてんだ……」

「あら？土道とオルガは見るの初めてだっけ？」

琴里がそう言うのと、ほぼ同時に、空間の歪みが大きくなり

画面に小さな光が生まれたかと思つた瞬間、爆音とともに画面が真っ白な光に包まれる。

画面内の出来事だと分かっているが、思わず二人は腕で顔を覆つてしまう。

そして数秒後、恐る恐る目を開けると、画面には、今までとは全く違う風景が映し出されてた。

街に、穴が開いている。

そのようにしか、表現しようがない。

先程まで建ち並んでいた幾つもの建物が、ごつそりと削り取られていた。

そこにあつたはずの店や街灯や電柱、舗装された道路まで、無くなつていた。

そのせいか、周囲も余波によつて悲惨な有様となつてしまつていた。

その様は、およそ一ヶ月前、十香に初めて会つた場所に酷似していた。

つまり、今のが

「空間震……………っ」

「今のが、かよ……………」

士道とオルガは震える声で言う。

廃墟や破壊跡を見たことは、何度もあつたが、爆発が起こる瞬間を目撃したのは初めてだった。

頭では、分かつていたはずの事象が、ようやく、理解できた気がした。

街が、人々が生活している空間が、一瞬で全て壊れてしまう。その、恐ろしさが。

「ま、でも今回の爆発は小規模ね」

「そのようですね。僥倖……………と言いたいところですが、へハーミットならぼこ

んなものでしょう」

「まあ、そうね。精霊の中でも気性の大人しいタイプだし」

オルガは困惑しながら、喉を震わせる。

「……………これで小規模かよ……………」

一瞬、何を言ってるのか分からなかった、すぐに思い直す。今の規模が数十メートルはあるだろう。しかし琴里たちにとっては比較的軽微なものなのだろう。

「……………ってかへハーミットって何だよ?」

「ああ、今現れた精霊のコードネームよ。ちよつと待つてて。

画面拡大で

きる?」

琴里が指示すると、すぐに、映像がズームして、街中にできたクレーターに寄つていく。

と、それに合わせて、画面内に変化が訪れる。

「……………雨?」

「……………さつきまで降つてたか?」

ふつと画面が暗くなつたと思うと、ぽつ、ぽつと雨が降り始めたのである。

だが、そんな変化は、すぐに気にしていられなくなった。

クレーターとなつた地面の中心に、小さな少女が確認できたからだ。

「……………っ!」

拡大された画面の中心に佇む、その少女の姿に士道は見覚えが会つたのである。

「あれは……………」

ウサギ耳の飾りが付いた、青い髪の少女。

歳は十三、四程、大きめのコートに、不思議な材質のインナーを着ている。そして左手には特徴的なウサギの^{パペット}人形を装着していた。

士道に何かしらの異常が無ければ、間違いない。

あれは……………士道が昨日学校から帰る途中に遭遇した女の子だった。

「……………？どうしたの、士道」

士道の様子を見て、三日月が怪訝そうに聞いてくる。

「俺……………あの子に、会ったことが、ある……………」

「なんですつて？一体いつの話よ」

「つい昨日だ……………、学校から帰る途中、急に雨が降ってきて……………」

記憶を探りながら、昨日の出来事を簡潔に話した。

すると士道の話を聞いた神無月が手にした端末に視線を落とす。

「当該時刻に主だった霊波数値の乱れは認められません」

「……………十香のケースと同じか……………士道、なんで昨日の言わなかったの？」

「む、無茶言うなよ。会ったときは精霊だなんて思わなかったんだ……………」

と、士道が叫ぶのとほぼ同時に、フラクシナス艦橋に設えられていたスピーカーから、

けたたましい音が轟いてきた。

「……………!?どうした!?!」

「……………オルガ、精霊が現れたつてことは、動くのは俺たちだけじゃない」

三日月の言葉に、オルガは眉を潜める。

「ASTか……………」

「ええ」

画面に目をやると、今し方少女——
 〈ハーミット〉と呼ばれる精霊がいた

場所に煙が渦巻いていた。恐らく、ミサイルか何かを撃ち込まれたのだろう。

その周囲には、物々しい機械の鎧を着込んだ人間とモノアイの巨人・グレイズ

アンチ・スピリット・チーム
 対精霊部隊のASTだった。

その時、煙の中から〈ハーミット〉が飛び出す。

ASTがそれに反応すると一斉に〈ハーミット〉を追跡する。そして身体中に装着していた部装から、夥しい量の弾薬を発射する。

「待ってくれッ！あいつらあんな小つさい奴に……！」

「……今頃何言ってるの、オルガ」

三日月がそう言うのと、琴里が半眼を作る。

「十香の時に学習しなかったの？ASTにとって精霊がどんな姿形をしているかなんて関係ない。彼らにあるのは世界を守る使命感と、人類にとって危険である存在を排斥しようという、生物としての至極まっとうな生存本能だけ」

「だ、だけだよ……っ」

オルガが口を開いた途端、煙の中から再び少女が空に躍る。

だが、〈ハーミット〉は反撃しようとせず、ただ逃げ回るだけだった。

「あの子……反撃しないのか？」

「ええ。いつものことよ、〈ハーミット〉は精霊の中でも極めて大人しいタイプだし」
「……っ、なら」

「ASTに情けを求めらるなら、無駄よ。——彼女が、精霊である限り」
にべもない答えに、土道は唇を噛んだ。

言葉を重ねるまでもなく、自分でも分かっていたはずだった。

彼女の気性や、性格だなんて、ASTには関係無い。

彼らにとっては、この世に害なす敵を討っているだけなのだから。

だが——それを覆す方法だなんて、一つしかない。

「……琴里」

「何よ」

「……精霊の力さえなくなれば、あの子がASTに狙われることはなくなるんだな……？」

土道が言うとう、琴里は眉をぴくりと動かして、土道の方に目を向けてきた。

「ええ。——その通りよ。」

「空間震は……起きなくなるんだな？」

「ええ」

土道は、一拍置くと、次の言葉を発した。

「俺とオルガには、それができるんだな……?」

「十香の現状を見て信じられないのであれば、疑ってくれて構わないわ」

「……………」

一度押し黙り、オルガへと目を向ける。

「オルガ」

「わーってるよ、俺だってあいつを助けてやりてえんだ。こんくれえなんてことはねえ
「さ」

士道は、伏せた目をゆつくりと上げ、決意する。

「手伝ってくれ、琴里、二人とも……………俺はあの子を、助けたい」

「いいよ」

「ふふ」

三日月は、首を縦に振り、琴里は、どこか嬉しそうに、キャンディの棒をピンと立てた。

「それでこそ私のおにーちゃんたちよ。総員、第一級攻略準備！」

『はッ!』

琴里の言葉と共にクルーたちがコンソールを操作する。

すると琴里が小さく「あ」と、小さく呟く。

「どうした？」

「そうそう。今回、三日月を護衛につけないわ」

「え？大丈夫なのか？」

琴里の言葉に土道は、問いかける。

土道の心配をあまり気にしない様子で、琴里は口を開く。

「大丈夫よ。彼ならASTを抑えられる」

第十四話 アグニカの魂

「ふう、ここでもいいのか？」

『ええ。精霊も建物内に入ったわ。ファーストコンタクトを間違わないようにね』

「……… 了解」

「ああ、分かっている」

二人はそう言うのと、インカムから手を離れた。

話によると、なんでも〈ハーミット〉は、比較的出现回数が多い精霊らしく、その行動パターンとの統計と、令音の思考解析を組み合わせれば、おおよその進路に予想がつくという。

無論、ASTの出入りによっては微妙に進路が変わってしまう可能性も否めなかったが、そのときはまた土道とオルガを回収して、次の予測地点に向かえばいいとのことだった。

今も、デパートの周囲にはASTが待機している。十香の時と同じように無理矢理建物ごと潰そうとしてくる可能性はあったが、しばらくは精霊が建物内から出てくるのを

待つらしい。

もしもの際は先程琴里が口に出した『彼』がA S Tを抑え、精霊と会話できる時間を作ってくれているらしい。

しかし、琴里の話した『彼』が何者なのか、ずっと引つかかっていた。

あの後、琴里にその人物が何者か詮索したが、何故か教えてもらえず、結局何者か分からずじまいでこの場に転送されたのである。

三日月にも、聞いたが知らないようだった。

と、オルガが思案していると――。

『――土道、オルガ。へーミットへの反応がフロア内に入ったわ』

「……………！」

不意に響いた琴里の声に、二人は身体をこわばらせる。瞬間。

『――君も、よしのんをいじめにきたのかなあ……………？』

「……………ヴウウウアアア!? ヴウ……………ッ！」

急に頭上から聞こえた声にオルガは叫び声を上げた。そして思いつ切り後頭部を床にぶつけ、

オルガの体はリセットされてしまう。

「……………だからよ……………止まるんじゃねえぞ……………」

いつも通り団長命令を残した。一方の士道は声のした頭上へ顔を上げた。

そこにいたのは、件の少女へハーミットが逆さまになりながら、浮遊していた。

『ありやりや？驚かせちゃったかなー？』

「…………… い、いや、こんくれえなんてことはねえ」

『ちよつとちよつとー、腰でも抜けちゃったんじゃないのー』

と、逆さになっていた少女は空中でぐるんつ、と元に戻して、床に降り立った。そしてオルガの元に歩み寄ってくる。

『おにーさん大丈夫？』

「お、おう……………」

『よしのんのステルススキルが高すぎちゃったかなー。ごめんねー』

「…………… い、いや大丈夫だ……………」

そう言うと、オルガはゆっくり立ち上がる。

『随分とまあ、陽気な精霊ね』

「あ、ああ……………」

士道たちが思ったままの言葉が聞こえてくる。やはり、琴里も同じことを思ったらしい。

大人しそうな見た目とは裏腹に、パペットの演技はとても陽気なものだった。

と、〈ハミット〉の言葉の中に、気になる単語が混じっていた。

「なあ、よしのんってなんだそりゃ？あんたの名か？」

『そのとーり！よしのんはよしのんのナ・マ・エ。可愛いっしょ？可愛いっしょ？』
 「お、おお、いい名前じゃねえか」

右耳から三日月の怪訝そうな声が聞こえてくる。

『よしのんって、十香と違って名前持ってたんだ』

「あ……………確かにな……………」

言われてみればその通りだった。十香は、名前を持っておらず、土道がつけた。

『うんで？おにーさんたちは名前なんてーの？』

「俺はアツ……………鉄華団団長オツ……………オルガイツカだぞツ……………んで、こつ

ちは……………」

「あ、ああ。俺は土道。五河土道だ」

『オルガくと土道くんねー。カッコイイ名前じゃないの』

「サンキューな」

「お、おう。ありがとう」

土道はふと、思いついたことを口に出す。

「な、なあ。よしのん」

『うん?どつたの?土道くん』

「いや、大したことじゃないんだが、ええと、よしのんつていうのは——このパ
 ペットじゃなくて、君の名前なんだよな?」

言つて、青い目をした少女に目を向ける。

『……………』

すると、今まで陽気に話していたパペットが、急に黙りこくつた。

次いで、右耳のインカム越しに、ピーッ!ピーッ!という警報音が響いてくる。

『つ、土道、オルガ、機嫌の数値が一気に下がっているわ。土道、あなた
 一体何をいったの?』

「え……………っ?いや、俺はただ、なんでずっと腹話術でしか喋らないのかと思つ
 て……………」

土道がそのまま素直に口にすると、パペットがゆらりと土道に顔を近づけてきた。

『土道くんの言つてることが分からないなあ……………。腹話術つてなん
 のこと?』

穏やかな口調のままだが、とてもつもない圧を感じた。

オルガは慌てて叫び、土道の頭をわしやわしやと掴む。

「わーわーわー!そうだよな!—あんたはあんただよな!—悪いな、こいつが訳分かん

ねえこと言つてよ」

「ちよ……… つ！オ……… オルガ。いきなり何すんだよ……… ツ！」

「……… すまねえ。だが今はこつちに話合わせろ」

小さくそう言い、士道を制する。

すると。

『ううんつ、もー、士道くんつたらおちやめさんなんだからー』

さつきまでの凄味が嘘だったように霧散し、パペットが甲高い声を響かせた。

「……… な、なんだったんだ、今の」

「さあな。だけど精霊が相手なんだ。油断大敵つてことだろ」

士道は小さく頷くと、『よしのん』に視線を戻す。

「ええと——」

士道が言い淀んでいると、琴里が苛立たしげに声を響かせてきた。

『間を開けないの。とにかく、精霊に逃げられないようにして』

「……… ど、どうやって………」

『そんなの、決まり切つてるでしょ。せっかく大型パートの内部にいるのよ？時間

あつたらちよつとデートしよう、でいいのよ。あ、そうだ』

「……… どうした………？」

何か思いついた琴里が声を上げる。それに嫌な予感を感じたオルガは恐る恐る聞く。『十香の時は士道がデートに誘ったわよね。だから今回はよしのんとのデートをオルガに誘ってもらおうわ』

「はあ!？」

その言葉に、珍妙な声を上げてしまった。その声に目の前にいるよしのんが首を傾げる。だが、今のオルガはそれすら目に入らなかつた。

『だってそうじゃない。あんたにもこれから精霊をデートに誘えるようになってもらわないと』

「く………っ」

琴里の言葉に、唇を引き結ぶ。確かに正論であつた。

恐らくオルガはこれからも士道と共に精霊をデートに誘わなければいけないときが来るだろう。そう考えると、デートに誘うということに今の内に慣れておく必要があつた。

それを理解し、オルガは渋々ながら頷いた。

『物分かりがよくて良かったわ。いい?「デートしない?」じゃなくて「デートしよう」って言うのがポイントよ。選択肢を相手に渡さないの』

「お、おう………」

オルガは少し躊躇しながらも、『よしのん』に向き直る。

「時間があつたらちよつとデートしよう」

なんの脈絡なく、そのままの台詞を発してしまう。

『なんか「しよう」つてオルガっぽくない』

『……そのままつて。もうちよつと柔軟に対応なさいよ』

「……うっせ」

そのまま口にしてしまったが、『よしのん』はさほどオルガの台詞に気にしてない様子だった。

『ほっほ〜！いいねー。見かけによらず大胆に誘ってくれるじゃーないの。うふん、もちろんオーケイよん。ていうか、ようやく話せる人に出会えたんだし、よしのんからお願いたいくらいだよー』

「そ、そっか……」

『……ま、結果オーライにしといてあげる』

琴里の溜息交じりの声を聞きながら、オルガたちは『よしのん』と共に、デパートの中を歩いていった。



「……………」

折紙は、ワイヤリングスーツと、ありったけの弾薬を積んだアウトレイジ装備を纏った臨戦態勢で、デパートの上空を浮遊していた。

周囲には、同様の武装を装備したAST隊員が数名デパートの上空を浮遊していた。その他にも四機のグレイズが待機しており、あたりに気を張っている。

グレイズは320mmバズーカ砲を肩部にマウントした機体と120mmライフルとシールドを装備したスタンダードな装備の機体が数機ほどビルの影に隠れている。

ASTは、空想を現実再現する装置・顕現装置リアライザを用いる魔術師ウイザードと「エイハブ・リアクター」という相転移炉そうてんいろを搭載されたモビルスーツを運用し、災厄たる精霊に対抗するための部隊である。

「ハーマット」がビル内に侵入してから、約一時間が経過しようとしていた。ハーマットが潜伏したまま全く出てくる様子がなかった。

『——随分と粘るわね』

通信機越しに隊長の目下部燎子の声が聞こえてきた。

『ハーマット』にしては珍しいわね。こんな一所にとどまっているなんて。いつもはビュンビュン飛び回ってるイメージだったわ』

へハーミット」の行動パターンは、ほぼほぼ逃げていただけだった。折紙たちがいくら攻撃を加えようと、この反撃をすることもなく、ただ逃げ回るだけ。

すると、珍しいと言えど燎子が声を発した。

『今日は、まだバルバトスが出てこないわね』

そう。バルバトスは精霊が現界する度に姿を現していたが、一時間近く経過しているにも関わらず、反応どころか姿すら見せていなかった。

『精霊が現界すると必ず邪魔してくるからね。破壊命令が出ているとは言え、相手するのも苦勞するから、できれば出て来ないでほしいわね』

燎子の言葉に眉をひそめる。

折紙がずっと気になっていたのはバルバトスのパイロットのことであった。燎子が先程述べたようにバルバトスは精霊が現界する度にASTの邪魔をしていた。だが今日は現れていない。どういったいきさつがあったかのかは知らないが、AST側としてはとても好都合である。

「攻撃許可は」

折紙は静かな声で問うと、燎子が嘆息めいた声を返してきた。

『一応要請はしてみたんだけどね。待機だって「ピピッ」なに？どうしたの？』

突如入ってきた通信に燎子の怪訝そうな声が聞こえてくる。燎子の首肯する声が聞

「ええ。」

『——そう。分かったわ』

「どうかしたの？」

『ようやく攻撃許可を出してくれたわ。流星に上もこのままじゃ埒が明かないって』

「そう」

折紙が短く言うと、燎子は指示を出す。

『——AST各員に通達。攻撃許可が降りたわ。へハーミットを叩き出すわよ』

「——了解」

折紙はそう返すと、両手に装備した対精霊用ガトリングへオールディストを構え、油断なくビルディングと、網膜に直接された精霊反応を注視する。

瞬間、精霊とは異なる反応が表れた。

「……………ツ!？」

突如として表れた反応に驚愕の表情を作る。直後にビーツというブザーが鳴り響く。

「この反応、へエイハブリアクター………?」

『味方の反応じゃない……………まさか——』

『——うわああああああッ!!』

燎子の言葉を聞き終える前にパイロットの叫び声が聞こえる。声のした方を振り向くと、一機のグレイズの右腕が切り裂かれていた。切られた右腕が地面へと落ちる。その様子を見ていた折紙の横を何かが通り過ぎる。

『くっ………、総員へアンノウンに目標変更。撃てッ!』

燎子の声で折紙たちはそれに向かって、トリガーを引く。しかし一発も当たらず、それはスラスターを噴出しながら空を駆ける。

『何よ、あれは………』

燎子は呻くように声を発すると、それは空中で静止する。その姿を捉えた途端、折紙たちは呆唾然とする。

白銀と青のカラーに背部の特徴的な巨大なスラスターウィングを広げ、紅き双眼が光り輝く。

洗練されたフォルムを持つモビルスーツ。

「………ガンダム………」

折紙が、忌々しげに呟く。

そこに居たのは、アグニカイエルの魂そのものにして、ギャラルホルンの正義。

最古のガンダムフレーム——ガンダムバエルだった。

第十五話 白き翼の悪魔

「フツ……ククツ…… ははははははっ……!!」

士道たちのいるデパート付近にて、金髪の男——マクギリス・ファリドは上空から武装した人間たちとモビルスーツを哄笑を上げながら愉しげに見下ろみおろしていた。

ただし、見下ろすと言っても、彼自身が飛んでいるわけではなく、マクギリスはとある物に乗り込んでいた。そのコックピットからASTを見下ろしていた。

彼の乗り込む機体は、人型のシルエットに白と青のカラーに羽根のように広がった二対のスラスター、そして赤く輝く双眼。

何も知らぬものが見たら、それはアニメに出てくるような巨大ロボットの姿を真っ先に思い浮かべるだろう。

それはかつて権力の象徴だったものであり『錦の御旗』。

笑いを止めASTへと向き直る。翼状のスラスターを広げ、マクギリスはその名を高らかに叫んだ。

「——今、マクギリス・ファリドの下にバエルは再び蘇ったッ！」

当たり前の話だが、その通信はASTには届いていない。しかし今の彼にとってそん

なことはどうでもいいことだった。

自分が望んだ玉座に着く。それだけでもマクギリスにとっては輝かしいことだった。と、通信が入ってくる。通信を繋ぐと、可愛らしい声が聞こえてくる。

『——あー、お取り込み中のところ悪いんだけど、あなた仕事忘れてないわよね』

「ああ、もちろん覚えてるさ——五河司令」

件の五河士道とオルガ・イツカの妹にして、今のマクギリスにとって上司である五河琴里の声だった。今のマクギリスとはある理由で彼女の下にしていた。

『あんたには士道とオルガが精霊と対話している間、ASTの横やりが入らないようにするのが仕事なんだから。少しは真面目にやりなさいよ』

そう。マクギリスの仕事というのは、ASTの注意を自分へ引き付け、ASTを精霊と士道たちからできるだけ引き離すことだった。要するに囮である。

「了解」

琴里の言葉に小さく答えると、操縦桿を強く握りしめた。

白い翼のガンダム——バエルはスラスターから火を噴き、腰部に携えた金色に煌めく二本のブレードを引き抜くとASTに斬りかかった。

『くっ………』

折紙は脳内でスラスターユニットに指示を出し、バエルの攻撃を避ける。バエルに向

けて追尾式のミサイルが放たれる。だが——相手はただのモビルスーツではない。

スラスターを駆動させながら、放たれたミサイルを猛スピードで切り刻み、羽の電磁砲で破壊していく。

一瞬にして撃ち込まれたミサイルがたった一機の機体によって爆散させられた。

これがガンダム・フレームの力——精霊ほどではないが、危険視されている力だ。

A S Tが対精霊用ガトリングヘオールデイスト、グレイズはライフルとバズーカを一斉にバエルに向けて放つ。弾薬の雨が放たれるが、これを身を躲して避ける。

「少し大人しくしてもらおう」

マクギリスが言うと、一機のグレイズの目の前に降下する。するとグレイズは腰部のバトルアックスを引き抜く。

「——遅いつー！」

ガギインツ！

と、グレイズの右腕部が宙を舞った。バエルの一閃でフレームごと斬り裂いたのである。

圧倒的な力を手にし、マクギリスは再び笑みを浮かべる。

「——これがガンダムフレーム、これがバエル。私が求め続けたものだ……！」

またも弾薬の雨が降り注ぐ。が、バエルはスラスターを駆動させながら、後方に下が

り、そして上昇する。

『おおおおおっ！』

パイロットの裂帛とともに別のグレイズがバトルアックスを振りかぶりながら、襲い掛かる。バエルはこれを回避すると、グレイズの背中に蹴りを入れた。蹴られたグレイズは地面に叩きつけられ、再起不能になる。

残ったモビルスーツはバズーカを構えたグレイズだけとなる。

スラストーウイングを広げて急降下し、肉薄する。グレイズはバズーカを放ち、応戦するが、バエルはそれを回避した。しかし、それがまずかった。

「……………まずいっ！」

今飛んでいった砲撃の方向には、土道たちのいるビルがあったのだ。

機体の向きを変えるが、ASTの砲撃によって思うように向かうことができない。無理矢理振り払いビルに向かう。だが――

ドゴオオオオオオン――！

轟音が鳴り響き、土道たちのいるビルに直撃した。



「——なあ琴里」

『——何よ』

「外から銃撃が聞こえるんだけど、本当に大丈夫なのか？」

『問題ないわ』

士道たちのいるビルに砲撃が直撃する数分前。

士道とオルガ、そして『よしのん』は、デパートの中を歩き回っていたのだが、時折銃声や破壊音が聞こえてきていた。先程から士道とオルガは琴里に聞いていたが、琴里からはあまり『よしのん』を不安にさせないように気にするなど釘をうたれていたのだが——

「まったく、本当に大丈夫なのか？」

オルガが不安そうな声を漏らす。

それもそうだろう。気にするなどは言われていても、時折銃声が聞こえてくるともあれば精霊が恐怖心を覚えて精神状態が不安定になったりしてしまうかもしれない。

その証拠に遠くから響いてきた轟音に『よしのん』がその身を小さく震わせていたりした。

「琴里が言ってたそいつが本当に安心できるかは分かんねえんだろ？ 実際そいつが何者なのか分かんねえ以上信用はできねえよ」

「ああ、そうだな」

オルガの言葉に土道は小さく頷いていると。

『——土道ッ！オルガッ！今すぐそこから離れなさいッ！』

琴里の声が聞こえてきた。

「どうした？何かあったのか？」

『ASTの砲撃がそっちに向かっていったわ！そこに居たら、爆発に巻き込まれるわよ！』

「っ！なんだとっ！？土道！よしのんと一緒にここから離れるぞ！」

オルガは叫んだ。が、遅かった。

ドゴオオオオオオオオン——！！

「うわっ………！！」「っ………！！」

けたたましい爆発音とともにオルガたちの目の前にあつた外壁が爆発した。

恐ろしい爆風によって後方に吹き飛ばされてしまう。なんとか少女を抱えて倒れ込

む。

「……… 行って………、オルガ大丈夫か」

「……… ケホッ、コホッ！こっちは大丈夫だ。ほら、大丈夫かよしの

ん………ん？どうかしたか？」

「………！………！………！………！………！」

オルガは手を伸ばそうとしたが、少女の表情を見て怪訝そうな顔をつくる。

顔色は真つ青になり、なにかに怯えているかのように声にならない悲鳴を上げていた。

するとオルガはとある違和感に気づく。

「……… パペットが無い？」

そう、先程まで少女のつけていたパペットが少女の腕から消えていたのだ。

「どこに行ったんだ——」

オルガが小さく呟いた次の瞬間。『よしのん』が小さく叫び声を上げた。

「———〈氷結傀儡〉………つ！」

デパートの床を砕き、下から現れたのは巨大な人形だった。

「……なっ……!!?」

「……これは……!!?」

全長三メートルはあろうかという、ずんぐりむつくりのぬいぐるみみのフォルムのような人形である。体表は金属のように滑らかで、所々に白い文様が刻まれていた。そして、その頭部と思しき箇所には、長いウサギのような耳が見受けられる。

『よしのん』は、顕現させた人形の背中に張りついたその時——人形の目が赤く輝き、その鈍重そうな体軀を震わせ、グウオオオオオオオオオオ——と、低い咆哮を上げながら、人形から白い煙のようなものが吐き出される。

「冷た………ッ!?!」

あまりの寒さに思わず足を引っ込める。それもそのはずその煙は、まるで液体窒素から発せられているもののように、非常に低温だったのだ。

『……このタイミングで天使を顕現………!!?二人とも、逃げなさい!』

「はあ?!天使って何だよ!?!」

突然の琴里の叫び声にオルガは大声を上げた。

『目の前に現れたでしょう!精霊を護る絶対の盾・霊装と対を成す最強の矛!精霊を精霊たらしめる「形をもった奇跡」よ!十香の塵殺公を忘れたの!?!』

「んじゃあ、あのデツケえウサギは十香のと同じものってことか!?!」

『よしのん』が小さく手を引いたかと思うと、氷結傀儡ザドキエルが低い咆哮とともに身を反らした。

次の瞬間、デパート側面部窓ガラスが次々と割れ、フロア内部に凄まじい勢いの雨が入ってくる。

しかし、それは窓が割れて入ってきたというよりも雨粒が窓ガラスを叩き割ったかのような感じだった。

「いい……………っ!？」

「待ってくれっ……………!? ヲウ! ヲウ!」

土道は床に倒れ込んで、続けてオルガも倒れ込もうとするが——間に合わず、オルガの体に固まった雨粒が突き刺さり、そして希望の花が咲いた。

「だからよ……………止まるんじゃねえぞ……………」

オルガを穿った雨粒は、透明な液体となつて床に流れていった。

と、そこで、『よしのん』の駆る氷結傀儡ザドキエルが動き出した。

氷結傀儡はその鈍重なシルエットに似合わぬ俊敏な機動で地を蹴ると、そのまま割れた窓から飛び出していつてしまった。

「た、助かったのか……………?」

「……………どうやら、そうみてえだな……………」

ふらつきながら、立ち上がったオルガが言う。オルガの体には先程の雨粒に貫かれた跡は制服に残っていたが、体のほうの傷はなさそうだった。

『ええ。反応は完全に離脱したわ』

琴里の言葉を聞いて、二人はその場にへたり込み、深くため息を吐いた。

『二人ともお疲れ様。フラクシナスで回収するわ。バエルの方にも帰投しておくようにいっておくわ』

「え……………」

「は……………!?ちよつと待て、琴里！今なんていった!?!」

『何っていきなり何よ。あんたたちのことを回収するって……………』

「そうじゃねえ。その後だよ！誰を帰投させるって言ったんだ!」

突然の大声にインカムの向こうで琴里は動揺する。

『な、何よ…………… まあいいか。丁度いいし、あんたたちにも話しておくわ』

オルガの言葉に懐疑的な反応を示すが、改まったように言う。

『へフラクシナスの新たな戦力——ガンダムバエルよ』

第十六話 再開のアグニカ（馬鹿）

「結局、よしのんいなくなっちゃったな」

作戦が終わり、士道とオルガはフラクシナスの通路を歩いていった。

結局よしのんは反応が消滅^{ロスト}し、士道たちはフラクシナスに回収され、今から艦橋に向かおうとしていた。

「仕方ねえよ。今回はASTの横槍が入ってきたんだ。次また頑張りやいい」

オルガはそう言うが、士道は気がかりなことがあった。それは先程の琴里との通信で出た『ガンダムバエル』という言葉聞いてからオルガの顔があまり浮かかないものとなっていたからである。

「……………なあ、オルガ」

「ん？」

「そのさつきからあんまり浮かない顔してるけど、もしかしてさつき琴里が言ってたことを気にしてんのか？」

顔を歪めていたオルガに士道はそう尋ねる。

「——バエルのことか？」

「へ？あ、ああ…… さつき名前聞いたとき大声出して反応してたからさ。何かあったんじゃないかって」

「なるほどな。いや前の世界で色々あつてだな」

前の世界というのはオルガと三日月は恐らくこの世界の人間ではないのだ。オルガたちはかつて「鉄華団」という組織で戦っていた。しかし二人は敵対する組織に討たれその人生を終えたのだった。

「バエルと戦って倒されたってことか？」

「いやそうじゃなくて…… バエルというより乗ってる奴と色々あつてな……」

「『乗ってる奴』？」

「戻ったぜ——」

中に入り、オルガは口に出そうとした言葉を止めた。

オルガたちは視界に入ってきたものはなんとも奇妙なものだったのだ。それを見た瞬間、オルガたちは目を白黒させた。

奇妙なものと言えど、そこまでおかしなことが起きているわけではないのだ。

真つ先に目に入ったのは腕を組み、呆れた顔をしている妹——五河琴里の姿。

そしてとある人物が琴里の目の前に正座させられていた。しかしオルガたちが白黒

させているのはそこではなかった。

男がそこに正座させられている。問題はその人物の格好だった。

なんとその人物は上に何も羽織っておらず、上半身裸だった。

そう、上半身裸である。はたから見ればただの不審者である。

一瞬「おいおい、神無月さんまた琴里に怒られるようなことしたのか……？」と思つたが、神無月は琴里の隣に立っていた。それになによりもその人物は金髪ではあつたが神無月と比べて髪が短かった。

「——ああ、あなたたち戻ってきたのね」

と、ここで琴里がオルガたちが戻ってきたことに気づいて顔を上げた。

その表情を見て土道は仕方なさそうに言う。

「……その琴里。この人が何をしたのか知らないけど、おにーちゃんたちは琴里の味方だからな？」

「違うわ！なにと勘違いしてんの!?!」

土道の言葉に琴里が声を上げる。次に小さくため息を吐き、頭を抱えた。

「……まあいいわ。土道、オルガ、あんたたちにも紹介するわ。ほら、立ちなさい」

琴里の言葉でその人物が立ち上がる。オルガたちからの視点では顔が見えなかったが、こちらに顔を向けたことで初めてその顔を伺えた。

歳は二十代前半といったところか。翡翠色の瞳に淡い色の金髪。日本人離れた風貌と端正な顔立ちをした美青年だ。恐らく、物語で言う『白馬の王子』とはこのような人物のことをいうのだろう。最も上裸という格好を除けばの話だが。

「——今日からへフラクシナスに配属されこととなったマクギリス・ファリドだ。よろしく頼むよ、五河士道。そしてオルガ団長」

流暢な日本語で自己紹介をするとマクギリスと名乗る男は手を差し出してきた。

「マクギリスじゃねえか……」



「それで、なんでチョコレートの人もここにいんの？もしかして俺たちと同じの転生つてやつ？」

そう始めに切り出したのは三日月だった。

今、フラクシナスの応接室には土道、オルガ、三日月、琴里、そしてマクギリスがいた。あのあとマクギリスがオルガたちと話がしたいということだったのだ。

ちなみに三日月が言った『チョコレートの人』というのはマクギリスの三日月が勝手につけたあだ名である。

「相も変わらず本質を見抜くか。凄まじいなこの感覚……」

三日月の言葉に感心するかのようにはマクギリスが言う。

「——そう、彼の言うとおりという因果か私も君たちと同じでこの世界に転生したらしいな」

彼がいる時点でもしかしたらと思っていたが、やはりオルガの詠みは当たっていた。

自分たちが転生しているということはもしかしてと思っていたが、どうやらマクギリスもこの世界に転生していたらしい。しかも、ガンダムバエルとともに。

「……そ、そのマクギリスさん」

と、黙っていた土道が自重しながら言う。するとマクギリスが土道の方を向く。

「どうかしたかい？ イツカ シドウくん」

「あ、土道で良いです。それよりオルガから話は少し聞いたんですけど、前の世界でマクギリスさんとオルガってどんな関係だったんですか？」

「ああ、確かにある程度は話して置かなければいけない」

マクギリスがそう言うとかつてのことを話し始めた。

鉄華団はかつてマクギリスと同盟を組み、『ギヤラルホルンの変革』という目的のためにギヤラルホルンの象徴であつたガンダムバエルを手に入れた。

『——今、三百年の眠りからマクギリス・ファリドのもとにバエルは蘇つたッ！』

だが、そのおかげで鉄華団はギヤラルホルンを敵に回すことになり、圧倒的劣勢を強いられて、壊滅的な状況にまで追い込まれることになつてしまつた。

要するに直接的な原因とはいかなくても、オルガからしてみれば、マクギリスは鉄華団を追い込んだ原因の一つであつた。

「——正直驚いたわ。あんたもオルガたちと同じだつたとは……」

琴里がそう言うのと、あごに手を置いた。琴里も少しばかり動揺しているようだつた。士道も同様に驚いているようだつた。

「それで、あんたはここラタトスクで何してんだ。さつき琴里からフラクシナスに配属されたつて言つてたが、今度は何が目的だ？」

表情を険しくしながら、マクギリスに問いかける。オルガとしても其処が気がかりだつた。『ギヤラルホルンの革命』をうたつたこの男がただ大人しくしているとは思えなかつたのだ。

オルガに睨まれたマクギリスは、フツと小さく笑う。

「別に何か目的があるという訳ではないさ。私も君たちと同じく、精霊を救うためにこうして活動してるんだ」

『精霊を救うため』？ それ本気で言ってるのか？」

「ああ、信用して貰えないだろうか？」

マクギリスの言葉にオルガは怪訝そうに顔を歪める。

正直に言うと、納得できないというのが、本心であった。

ラタトスクという組織自体も完全に信用したわけではないが、琴里が言うくらいである。それにこの男が腕が立つというのはオルガも充分承知していることだった。

しかし、何を考えているのかイマイチよく分からないのがこの男だ。どのような腹の内があるか分からない以上はこの男を完全に信用するわけにはいかないのもまた事実だった。と、ここで――

「――あんたたちの事情は分かったし、オルガの言い分もよく分かる」
気難しい表情をしていた琴里が口を動かす。

「ここにいる以上はマクギリスのことを信用してあげてちょうだい。別に仲良くしろとまでは言わない。それでも彼は私たちと同じく精霊を救おうとしているの。それは確かよ」

オルガの目を観ながら、琴里は声を響かせる。

「……だからお願い。今だけは彼のことを信用してあげて」

「……っ」

琴里の言葉に息を詰まらせる。血の繋がりは無いとはいえ、妹にそこまで言い寄られては信用しないと口にする訳にはいかなかった。

「……ったく」

オルガは頭を掻きむしりながら言った。

「……分かった。あんたのことを信用してやる」

「ありがとう、オルガ団長」

「だが、勘違いすんな。琴里に言われたからだ。あんたが本当に精霊を救うために戦うっていうんなら、これから俺たちにその意志が本当かどうかを見せてくれ」

不適な笑みを浮かべ、オルガは手を差し出した。

するとマクギリスはオルガの手を見て少し首を傾げた。

「これは？」

「あ？信頼の意味を込めての握手に決まってるだろ」

当たり前のようにオルガは答えて見せる。すると突然マクギリスは高らかに笑い出した。

「……フツ、フツ、はっはっはっは！はっはっはっは！はっはっはっは！」

「き、急になんだよ!？」

「はっはっは——いや、君の方こそ以前と比べたら随分と丸くなつたじゃないか!

——はっはっはっは! はっはっはっは!」

「オイ! テメエ、それどういふことだ!？」

マクギリスは笑い、それにつつかかつて声を上げているオルガを見て、琴里と土道は眉を潜める。

「三日月、こいつつて毎回こんな感じなの?」

「……ん、チョコの人は大体こんな感じだよ」

三日月はあつけらかなとした様子で話す。

「そ、そうなのか……なんか色々とすごい人だな」

琴里は頭を抱え、土道は苦笑を浮かべた。

「ハッハッハッ……そうか、敵でもなく、単なる同盟でもない今回は正真正銘の味方か。だがそうだな。今度は私が君たちをサポートする番か。オルガ団長」

ようやく落ち着いたマクギリスはオルガの顔を見ながらそう呟いた。

「あ?」

「——君の『信頼』に応えられるようにこれからよろしく頼むよ」

マクギリスもオルガと同じように手を差し出した。

「お、おう。よろしく頼むぜ」

少し困惑しながらそう言って、オルガとマクギリスは固く手を握った。



へよしのんとの邂逅、マクギリスとの再開から一日が経った。

今日は土曜日のためいつもだったら十香や琴里たちがいて少し騒がしいのだが、五河家のリビングには二人の人影があった。

オルガと三日月である。

オルガは皿を洗い、三日月は家庭菜園の本を読みながら、二人きりで静かに過ごしていた。

と、ここで三日月が口を開いた。

「——ねえオルガ」

「どうした？ミカ」

「そういえば士道と十香は?？」

「ああ、今日はあの二人ならへフラクシナスの方にいるぜ」

皿洗いを終えてタオルで手を拭きながら言う。

「へフラクシナス？なんかあったの？」

「いや、マクギリスの野郎が昨日メールを寄越したんだよ」

実はあの後、十香と合流して家に帰ったところマクギリスから連絡が来たのだ。

『明日、夜刀神十香と五河士道の二人とへフラクシナスで話がしたい』と。

最初は突然のメールに不審に思ったが、特に用事もなかったため行ってみると士道が言ったのだった。

「チヨコの人が話すことってなんだろ。やっぱり精霊のことかな」

三日月は読んでいた本を閉じる。

「どうだろうな、へフラクシナスで話をするらしいから仮に精霊のことを話したとしても、外に漏れるってことは無いだろうな。まあ、あの野郎が漏らさなければの話だが」
「オルガはまだチヨコの人のこと許してないの？」

「……え？ああ……そりやあな」

正直に言うと、オルガ自身まだ納得しきれていなかった。

味方と言っても、あの男がまた腹の中でロクでもないことを考えてるようにはか思えないのだ。

最も先の戦いではオルガたちもそれを承知の上でマクギリスと同盟を組んでいたわけなのだが……。

「でもオルガ自身、どっかで割り切ってんじゃないの？ チョコの人のことは過去のことだつて」

「そいつは…まあ否定はしねえよ」

「俺は少なくとも前の世界のことだつて思ってる。俺たちの新しい人生は、もう始まつてるんだ」

オルガの方を真つ直ぐ見ながら三日月は言ってくる。

「ここにいるのは土道や十香たちだ。チョコの人とのあの関係は前の世界のものでしょ？」

「ミカ……。ああ、そうだな」

三日月の言う通りである。過去は前の世界での話であつて今、こうして生きている自分たちには関係のない話だ。三日月の言うとおり水に流すべきなのである。

オルガはそう小さく呟くと視線を手元に落とした。

「あ、そうだ、ミカ」

「ん？」

「今から買い物に行くんだが、お前も行くか？ そろそろ冷蔵庫の中身がヤバくてな」

昨日下校時に寄ってくるつもりだったのだが、よしのんの件やマクギリスとの再開など色々なことがあつたせいではできなかったのである。

オルガの言葉に三日月は小さく唸ると口を開いた。

「んー……俺はいいかな。琴里もまだ寝てるし、家族に何かあると困るから」

「そうか。てか、アイツは寝てて大丈夫なのか？土道だけならまだしも、十香もいるんだろ？琴里の方からアイツのことを伝えておくべきだったんじゃないやねえか？」

時刻は午前一〇時を回ったところだが、琴里はまだ眠ったままである。

「大丈夫でしょ。何かあつても令音たちが止めてくれるよ」

「だったら大丈夫か……んじゃ、行つてくるぜ」

そう言うオルガはリビングから出ていった。



「……なあシドー」

「ん、どうした？十香」

急に十香に声を掛けられ、足を止める土道。

十香と土道はマクギリスによってヘフラクシナスに呼ばれていたのだった。

「私と話をしたい人間がいてそいつと話をするためにここにいるのだよな？」

「え？ああ……そうだけど、どうかしたのか？」

「いや少し嫌な感じがしたのだ」

不安げな表情を浮かべながら、十香は声を発した。

「嫌な感じ……っ？」

「ああ、何というのだろうか……まるでASTと対峙したときのような嫌な感じがするのだ……」

「なっ……」

士道は言葉を詰まらせた。

それもそのはずここはラタトスクの空中艦へフラクシナスの中なのである。

その中で十香の言うASTの気配が本当ならばへフラクシナス内に敵が潜伏してるということになれば一大事だ。いっどこから十香を狙っていてもおかしくない。

しかしそんなことがある訳がない。

以前、琴里によるとへフラクシナスは四六時中、リアライザ顕現装置によつてASTから見つかることはないのである。

なのでこの艦内にウィザード魔術師がいるということはイレギュラーなのである。

「と、十香！そ、そんなこと無いはずだ！ここにはお前を救いたいと思ってる人達が沢山いるんだ！そんな中にASTのような物騒な連中がいるわけないだろ!？」

士道は声を上げながら十香を説得する。士道の言葉を聞くと十香は力強く頷いた。

「そ、そうだな！私が考え過ぎだったただけだよな！」

「ああ、言っただろ？ここにはそんなことする人はいないって」

そう言ってるうちにマクギリスの待つ談話室に着いた。

「失礼します」

二人が中に入ると、椅子に座ったマクギリスとその隣に茶髪の男性が立っていた。

「昨日ぶりだね、五河士道くん」

穏やかな笑みを浮かべながら、マクギリスが声を掛けてくる。

「ど、どうも……」

士道は自重気味に挨拶を返す。

「シドー、こいつは一体誰だ？」

「ああ、この人は……」

士道が紹介しようとした途端にマクギリスが言葉を遮った。

「始めまして、五河司令から話は聞いてるよ。君が夜刀神十香さんだね」

十香に対しても先程の笑みを崩すことなく、マクギリスは続けて自己紹介をしている。
く。

「私はマクギリス・ファリド——精霊へハーミットへ心奪われた男さ」

第十七話 悲哀

「……………はい？」

マクギリスが今し方発した言葉に土道は目を白黒させた。

精霊ハーミットことよしのんの対話から一日が経過した。土道と十香はマクギリスに呼ばれてプラグシナスに来ていたのだが……

今この男は『精霊（ハーミット）に心奪われた』と言っていた。

土道の記憶が正しければ、昨日会ったよしのんを見た目は琴里と同じ中学生くらいの少女だった（そもそも年齢という概念があるかよく分からないが）。

一方でこの男は恐らく20代前半くらいの青年である。

そんな彼女にこの男が心奪われたということは年の差的に事案である。ロリコンである。

と、そんな思考をしていると、マクギリスの隣に立っていた茶髪の男が口を開いた。

年齢はマクギリスと同じ、或いは一つ、二つほど年上だろうか、寡黙そうな風貌に肩に掛かるほどに伸ばした茶髪の男だった。

「——准将、その言い方は誤解を生むのでは？」

男はマクギリスの放った言葉を指摘する。するとマクギリスは小さく笑った。

「ふつ、確かにそうかもな。ならこう言い換えよう、精霊へハーミット」に惚れてしまったとはどうだろうか」

「いえ准将、一番問題の所が訂正されていません」

男は半眼を作ると、額に汗を浮かべた。

「えつと……すいません、そちらの方は……？」

二人のやり取りに土道は困惑気味に眉をひそめる。

「ああ、すまなかった。自己紹介が遅れてしまった。彼は石動・カミーチエ、私の優秀な副官であり、この「フラクシナス」のクルーの一人だ」

「よろしく頼む」

紹介された石動という男が頭を下げる。

「そして、改めて私はマクギリス・ファリド、このラタトスクでガンダム・バエルのパイロットをしている」

土道も「……ど、どうも」といった感じで小さく会釈する。

だが十香は怪訝そうな表情を浮かべて、マクギリスのことを睨みつけている。

「それで貴様か、私とシドーをここに呼んだのは？」

「そうさ、今日君たちを読んだのは「ハーミット」と一つ助言をしたくて君たち二人を呼

んだ」

「助言だと……?」

マクギリスの言葉に十香は目を細くする。

「と、その前に先に〈ハーマミット〉についての話をしておこう」

「そうだ、さつきから貴様が言う《ハーマミット》とは一体なんなのだ?」

「そうか、彼女にも話さなければいけないな、丁度いい。その前に君のことを十香ちゃんと呼んでもいいかね?」

「うむ、構わないぞ」

マクギリスの言葉に十香は頷く。そして彼女の目を見つめながら話し始める。

「では十香ちゃん、私の言う〈ハーマミット〉とは君と同じ精霊のことだ」

「なに? 精霊だと……?」

「見てもらった方が早いな。石動」

「はっ」

マクギリスの言葉に十香は目を大きく目を見開いた。するとマクギリスは石動にそう言つて石動は手元の端末を操作して、土道たちの目の前のテーブルに置く。端末には破壊された街の中で佇むよしのんの姿が映されていた。

「この娘が精霊なのか……?」

「そう。実は私、以前に〈ハーミット〉と対話したことがあってね」

「え？マクギリスさんがですか!?!でも、どうして……?」

「特に理由などないさ。偶然、彼女と対峙した機会があったそれだけだ」

士道の質問にあっけらかんとした様子で小さく笑って答える、マクギリス。

先程の言葉に驚いた十香は画面の中の少女をじっと見つめ続けていた。

「その時に彼女と会話を交わし、その時に私は彼女の姿に心奪われた」

どこか遠い目で淡々と言葉を並べていった、恋焦がれているような目をしながら。

「だが、何故、シドーがこの娘のことを知っているのだ?」

「……え?いや、それは……」

「ああ、それは士道くんたちは先日の空間震の際に彼女に会っていたからさ」

「なんだと!?!」

どう答えればいいのか士道が戸惑っている。マクギリスが十香の問いに答える。すると十香は声を上げた。

「……し、シドー、貴様私が心配していたというのに他の女と会っていたというのか……」

「?」

「ち、違う!十香!そういう訳じゃなくて」

「大事な用事というのも、まさかこの娘と会うことだったというのか?」

「いや、そ、それは……」

あながち十香の言っていることはその通りではあるのだが、本当のことを話した所で、十香に伝わってくれるかどうかは分からなかった。

士道の言葉に食らいついてくる十香に割り入ってくるマクギリス。

「確かに君の言う通りだ、彼とオルガ団長らは昨日、彼女と会うためにわざとシエルターに避難しなかった」

「ちよ、ちよつと!? マクギリスさん!？」

「やっぱりそうなのか、シドー!？」

マクギリスの（間違っではない）言葉を聞いた十香の表情は不安の色に染まる。

「私よりもあの娘といた方がいいのか!？」

「そ、そんな訳ないだろ……!？」

「まあ二人共落ちつきたまえ」

さらに詰め寄ってくる十香に士道は困惑して声を上げてしまう。と、ここでマクギリスが二人を制する手ぶりをして声をかける。

「貴様! 邪魔をするな! これは私とシドーの問題だ!」

「落ち着きたまえ。君の言い分も分かる。ひとまず私の話を聞いてもらいたい。十香ちゃん、君は今苛立ちを覚えている、それは彼らが君に黙って他の女の子と出会ってい

たことが原因かい？」

「つ、そ、それは――」

マクギリスの言葉に十香は息を詰まらせてしまう。

「おや、では違つたかね？」

「……………」

十香はテーブルに肘を突くと、観念したように頭をくしゃくしゃし、大きな溜め息を吐いてから、重苦しい様子で唇を動かした。

「……………わからないのだ」

「わからないとは？」

マクギリスが、首を傾げながら聞き返す。

「貴様の言うとおり、シドーたちが私を置いていつて他の女の子と会っていたこと、それが原因でもある……………のだが――しかし、それとは別に何故、私は今こんな気分になつてしまつているのか、わからないのだ……………」

頭を抱えながら、言葉が続ける。

「少し思つてしまつたのだ……………。シドーやオルガ、ミカは私と初めて話をしてくれた……………私に名前を付けてくれた人間だ。でもこの娘の方が大切なんじゃないかと思つたら、悲しくて、怖くて、何がなんだかわからなくなつてしまつたのだ……………こんなことは

初めてだ」

十香の言葉に顎に手を当てながらマクギリスは声を発する。

「……なるほど」

「私は……どこがおかしいのだろうか」

「いやそんなことはない。むしろ君が今感じているその感情はいたって正常なものだ」

「そ、そうなのか？」

「ああ、心配する必要はない。だが一つ、誤解は解いておこう」

「誤解……？」

君は自分が大切だと思われなくなることを危惧して、不安に思ったのかもしれないが、彼らが君のことを大事に思っていない、という証拠はない」

「っ、ほ、本当か……？」

「ああ、そうでなければ、初めてのデートの日、土道くんが君を庇って、自ら撃たれに行くような行動はとらないと思うがね」

「……あ……」

すっかり怒りで頭から抜け落ちてしまっていたが、土道は、先月のデートで十香を庇ってくれていたではないか。

「……っ、私は……」

十香はうめくように喉を震わせると、再び頭をくしゃくしゃとかきむしり、土道の方に向き直ると、謝罪の言葉を発した。

「すまない、シドー……」

「……十香」

「私は、よく分からないまま勝手に苛立ってしまった……その、シドーたちから見放されるんじゃないかって……それが怖くて……お前に当たってしまったのだ、本当にすまなかった」

そう言つて十香は小さく頭を下げた。

「や……お前に本当のことを言わなかった俺が悪かったんだ、そのせいでお前に勘違いさせちゃった。ゴメンな」

「シドー……」

言うのと、同じ様に土道も頭を下げた。どうやら勘違いによるわだかまりが消えたようだった。

「……ていうか」

デート時に自分がとつた行動の話を聞いて土道は、頬に汗を垂らした。

「俺が十香を庇つたこと、知ってたんですか……」

「君たちの話は既に聞いていたからな。自分の身を顧みずに撃たれに行くとは少々驚い

たが」

マクギリスは前髪をいじりながら、小さく笑う。

そして再び神妙な面持ちになると口を開いた。

「十香ちゃん、土道くん、我々の目的は、君と同じ、自分の意思ではどうにもならない力に苦しんでいる精霊たちを救うことにある。そして精霊の霊力を封印できるのは、土道くんとオルガ団長、二人だけだ」

二人の方を見つめながらマクギリスは言い放つ。

「恐らく彼らはこれからも他の精霊と接していく機会があるだろう。その時は互いに支え合っていってくれ」

「はい！」

「うむ！」

マクギリスの言葉に二人は強く首を縦に振った。



雨の中で傘をさしながら、オルガは一人商店街に向かっていった。それからどれくらい歩いただろうか。

「あ？……なっ!？」

突然オルガは道の途中で足を止めた。見覚えがあるウサギ耳の付いた緑色のフードの姿があつたからである。

「よ、よしのん……?？」

オルガは小さく声を発した。するとこちらの気配に気付いたのかハツとした様子で振り向いてきた。

「ひっ……い……」

そして、顔を青くしながら今にも泣き出してしまいそうな顔を作り、右手を天に掲げる。

あの動作には見覚えがあつた。あれは昨日よしのんが、巨大な人形を顕現させた時のものだ。

「ま、待ってくれ！俺だ！鉄華団団長、オルガ・イツカだ！」

「………っ!？」

オルガのことを思い出したのか、右手をゆっくりと元の位置に戻す。そしてオルガの様子を窺い始めた。

「……よ、よう。今日はどうかしたのか……?？」

「………」

「……あーその、なんだ……今日はスゲえ雨だよな」

「……………」

よしのんは何も言葉を返してこようとしない。ただこちらを警戒するように睨んでくるだけだった。

「……つたく、こんな感じじゃ、どうすりゃ……ん？」

そう言つて頭を搔く。

と、ここでオルガの目にはあるものが留まった。

それはよしのんの左手だった。昨日、会ったときは確かに左手にパペットを付けていた。しかし今、見間違ひじゃなければ昨日見たパペットの姿が見当たらなかつたのである。

「おい、アンタ、もしかしてあの人形を探してんのか？」

「……………」

そうオルガが尋ねると、よしのんが力強く何度も頷いた。そしてオルガにパペットの居場所を問うような不安げな表情をオルガに向ける。

「悪いな、すまねえけど俺もどこにあるかは知らねえんだ……」

オルガがそう言うと、よしのんはこの世の終わりのような表情をすると、その場へへたり込んでしまう。そしてそのままうつむきながら、嗚咽を漏らし始める。

「どうすりゃ……そうだ。ちよつと待ってくれるか？」

オルガがそう言うと、よしのんは嗚咽しながら小さく頷いた。そしてオルガは携帯電話のボタンを押した。

『……もしもし、オルガどうしたの？』

しばらく呼び出し音が続くと、三日月が電話に出る。

「ミカ、琴里を呼んでくれるか？」

『いいけど、どうしたの？』

「……よしのんを見つけた」

『わかった』

オルガの言葉にすぐに答えると、電話の向こうから『琴里〜』という声が聞こえてくる。すると眠たげな声があった。

『……なあに〜？三日月……？』

『……オルガがよしのん見つけたって』

三日月がそう言うとパチン！パチン！と頬を思いつ切り引つ叩くような音がした。そして先程とは違う凜とした声が響いてくる。

『……オルガ、詳しく状況を聞かせてちょうだい』

「お、おう」

少し気圧されながら、これまでの状況を説明した。

『……なるほど。静粛現界か、十香の時と同じね。インカム持ってる?』

「あ?一応、持ってるぜ」

『よろしい、ちよつと待機してなさい』

「お、おい!待機って……」

あまりに適当な指示にため息をつく。

しかし他にできることもない。大人しくインカムを装着するとよしのんの方を見る。

先程よりは落ち着いたが、まだ小さく体を震わせていた。

しかしパペットをどうにかしなければ、よしのんの封印どころか精神状態が不安定な

ままになってしまう。それはオルガとしてもあまり気が進まない。

「な、なあ、よしのん」

「……っ!」

オルガが声を掛けようとした途端、よしのんはまたも体を震わせた。そして手を振りかぶると、辺りの水溜りが隆起し、弾丸のように炸裂し、オルガに被弾した。

「ぐうううッ!」

「……っ!?!」

オルガのうめき声に驚いたのか、さらに近くの水溜りが隆起して地面の破片がオルガ

に炸裂する。

「ぐううつうぐううぐうつ!!」

それが連鎖し続けて計4回、オルガの体に炸裂した。

何回か意識が吹っ飛びかけたが、なんとかして（身体に破片がささってるけど）立ち上がる。よしのんはそんな様子を奇妙そうに油断なくじつと見てくる。

「……わりいな、驚かせちまったみたいで……。でもこんくれえなんてことはねえ……」

そして額に冷や汗を浮かべながら、力無く両手を上げたままで言葉を続けた。

「その……よ、もしあんたが良かったら、俺もあんたのパペット探すの手伝せ」

「……………」

オルガがそう言うと、よしのんが驚いたように目を開いた。

そして数秒後、初めて顔を明るくし、力強く縦に首を振り、ようやく濡れた地面から腰を上げた。

と、ここで妹様の声がインカムに響いてきた。どうやら家からフラグシナスに移動していたらしい。

『聞こえる？オルガ』

「おう、聞こえるぜ」

『このまま彼女を放っておくことはできないわ。とりあえず今、三択表示されてるから

それに従って……』

「わりの、今からパペット探すことになった」

琴里の言葉を遮り、オルガが重ねてくる。すると琴里は声を上げた。

『———はあ!?!何勝手にあんた一人で話進めてんのよ!?!』

「仕方ねえだろ、こいつがパペットを無くしちまって困ってんだ。探してやるのが通すべき筋つてもんだろ」

『それはその通りだけど……はあ、分かったわ。あんたの言うとおりね。でも次は気をつけなさい、勝手に行動されて精霊の機嫌を損ねられたら溜まったもんじゃないわ』

「わーったよ」

『でもあんたに正論で返されるのはなんか腹立つわね』

「なんでだよ!?!」

オルガに正論で返されたのが少し気に食わなかったのか、琴里は不機嫌そうに言い放つ。

『それよりよしのんのことを忘れないであげてちょうだい』

よしのんからオルガを見ると、オルガは大きな独り言をしているように見えたのか、不思議そうにこちらを見つめていた。

「おっと、すまねえな。そんでだけど、パペットをいつ無くしちまったか分かるか?」

そう問うと、よしのんは逡巡するように視線を泳がせてから、その桜色の唇を開いた。

「……き、のう……」

そしてうさ耳付きのフードをギュツと握って、たどたどしく言葉をつむぐ。

「こわい……人たち、攻撃され……気づいたら……、いなく、なっ……」

「つてことは、昨日、ASTに襲われたときか」

オルガが言うと、よしのんはこくと首を縦に倒した。

辺りの様子を見回すと、崩落した建物や、ヒビの入った道路が、広がっている。この中からパペットを探すのは骨が折れそうだった。

『「こつちからもカメラをあるだけ送るわ。できるだけ彼女とコミュニケーションを取りながら搜索してちょうだい」』

オルガは了解を示すようにインカムを小突くと、再びよしのんに目をやった。

「んじゃあ、行くか、よしのん」

「……………」

よしのんが首肯し、しばし口をモゴモゴさせてから、声を発してくる。

「わ、たし……は、」

「ん？」

「私……は、よしのん、じゃなくて……四糸乃。よしのんは……私の、友だち……」

「四糸乃……？　そうか。あつ、そうだ」

そう言うのと、オルガはさつき倒れたときに落とした傘を拾うと、四糸乃に差し出した。「無いよりかは、あつた方がマシだろ？」

そう言うのと、四糸乃がオルガに問いかけるように目を向けてきた。

「あ……？　いいんだよ、俺は別に大丈夫だから使えよ」

四糸乃はしばしの間逡巡するように傘と土道を交互に見た後、

「あ……り、が……う……」

『格好いいことしちゃって』

「べ、別にいいだろ。それより土道たちとマクギリスはまだそっちにいるのか？」

『ええ、十香と土道はマクギリスと話しをしてるわ。マクギリスにも連絡はしたけど、とりあえず精霊の精神状態も安定してるからまだ話していいと伝えておいたわ』

「了解、んじゃサポート頼んだ」

オルガは言うのと、搜索を開始した。

「……………そっちはパペット見つかったか？」

『駄目ね。こっちからも探しているけど見当たらないわ』

しばらく搜索を続けて、時刻は既に十二時半を回り、オルガが四糸乃とパペットの搜索を始めてから二時間が過ぎていた。

ラタトスクも協力してパペットを探しているが、話を聞く限りだと目立った収穫も無さそうである。

『とりあえずこつちで昨日の映像の方も確認してみるわ。そつちは引き続き搜索を続けてちょうだい』

「了解」

そう言つて搜索に戻ろうとしたが、この雨の中での作業ということもあつて疲労が溜まつてきた。

すると、その時。

きゆるるる、という可愛らしい音が響いてきた。

「あ?」

「……………!」

オルガが四糸乃の方に視線を向けると、またも怯えるように肩を震わせた。

「…………お前、腹減つたのか?」

オルガが問うと、四糸乃は顔を真っ赤にしてブンブンと首を横に振つた。しかしそのタイミングで再びお腹から音が鳴る。

「……………っ!」

四糸乃はその場にうずくまると、フードを引つ張つて完全に顔を隠してしまった。

「どうやら精霊もお腹が空くらしい。」

「どうしたもんか……そうだ。四糸乃、一回休憩するか？」

オルガが言うのと、四糸乃は首を横に振った。だが、またもお腹が鳴ってしまふ。

「……………」

「あまり遠慮すんな。ここであんたが倒れでもしたらよしのんを探すことができねえぜ？」

四糸乃は少しの間考えを巡らせると、躊躇いがちち首肯した。

「なら、決まりだな。つってもこの格好じゃ流石にマズいな……」

財布は持つてはいるが、今のオルガの格好は雨でびしょ濡れである。こんな格好では店に入るのは困難だろう。

「琴里。休憩する場所だけど、俺の家でも大丈夫か？」

『わお。少し見ない間に随分大胆になったわね。押し倒す気なら気を付けなさいよ』

「……………んなわけねえだろうが」

『分かってるわよ。……ま、他に場所も無いでしょうし、なんかあつたら三日月に殴ってもらえばいいし』

「……………お前の中で俺ってそんなに信用ねえのか？」

琴里の言葉に対し、小さくため息をこぼすと、四糸乃に声を掛けた。

「そんじゃあ……行くか！」

四糸乃は、無言のまま、小さく頷いた。



「さてと、鶏肉と……それに卵があるな。確か昨日炊いたご飯が炊飯器にあつたつけな。なら親子丼にでもするか」

冷蔵庫の中を見回し、必要な材料を取り出す。

そして調理を始め、作っている途中でちらりとリビングの方を見る。

とりあえず三日月には家に戻ってもらつてた。

リビングにはソファに座りながら、物珍しそうに辺りを見回す四糸乃の姿があつた。オルガは家に帰ってから着替えたのだが、あれだけの雨を浴びていながら、四糸乃の格好は先程と変わらないままだった。

「すぐにできるから、少し待ってくれ」

四糸乃に待つように言うと、慣れた手付きで親子丼を作っていく。水で割つためんつゆを熱し、そこに切り終えたタマネギと鶏肉を投入。火が通つたところに溶き卵を流し入れる。

そしてご飯を盛ったどんぶりを流し入れ、最後にみつばを散らすと完成である。「コイツで完成つと。ほらよ、飯食ったら早いとこよしのんを見つげに行こうぜ」

そう言うと、二つのどんぶりを持っていく。よしのんの分とオルガの分である。そしてスプーンを二つテーブルに置くと、オルガは手を合わせた。

「そんなじゃ、いただきます」

オルガが言うと、オルガを真似るように四糸乃もオルガと同じようにペコリと頭を下げる。

そしてスプーンを手に取ると、オルガのお手製親子丼を一口、口に運ぶ。

「……………」

すると四糸乃はカツと目を見開いて、テーブルをペシペシと叩いた。

「どうだ、うまいか？」

オルガが言うと、首をこくこくと縦に振る。どうやら気に入ってくれたらしい。

「(そういうや、こういう料理とか家事ってタービンスの奴らとかに任せつきりだったな…………)」

食べ進めながら、オルガはそう思っていた。

タービンスとはかつてオルガたち鉄華団との兄弟組織であり、地球に向かうまでの航路の手助けをしていた組織である。

そのリーダーが『ここが俺のハーレムだ』とか言っていてタービンスの船員は全員女性だった。

オルガたち団員も洗濯の手伝いぐらいはやらされていたが、率先して家事をしていたのは基本的にタービンスの船員の女性たちだった。

五河家では両親が仕事の都合で家を留守にすることが多いので、土道と一緒に家に三人だけでも生活できるようにと、家事を教わっていたのである。

「昔の俺だったら、こんなに家事をやってるなんてあり得なかったかもな……」

一人小さく思っていると、よほどお腹が減っていたのか、それともオルガお手製の親子丼が美味しかったのか小さい口を目一杯開いて、すぐに親子丼を平らげた。

「そうか、アンタのお気に召したなら俺としても何よりだぜ」

そう言って笑うと、四糸乃が食事を終えるのを見計らうように琴里が喋りかけてくる。

『まだ少し休憩するでしょう？ できるだけ精霊の情報が欲しいわ。丁度良い機会だし、いくつか四糸乃に質問してみてくれない？』

「質問？……おう、分かった」

皿を空にして満足そうにする四糸乃に聞いてみる。

「そーいや四糸乃。アンタが無くしたパペット、よしのんだったか。アンタにとつてど

ういうもんなんだ？」

オルガがそう聞くと、四糸乃は恐る恐るといった感じで唇を動かした。

「よしのん、は……………友だち、です。そして……………ヒーロー……………です」

「ヒーロー？」

「よしのんは……………私の……………理想、憧れの自分です。わたし……………みたいに、弱くなくて……………

私みたいに、うじうじしない……………強くて、格好いい……………」

「なるほどな……………」

確かに昨日、パペット越しで話していた時の陽気な性格とは打って変わって、今の四糸乃では口調といい、態度といい、全くの別人のようであったが――

「でも、俺は今の四糸乃の方が好きだぞ？」

よしのんのモードの時の陽気さは悪くはなかったが、オルガ自身、なんとなくあのうさん臭さにはあまり慣れそうにない気がした。

それにたどたどしくても正直に打ち明けようとする四糸乃の方がどちらかと言うと好感が持てた。

だがオルガがそう言った途端、四糸乃は顔をボンツ！と真っ赤に染めて、フードで顔を隠してしまう。

「あ？どうした？四糸乃」

オルガが声をかけると、フードを握っていた手を離してゆっくりと顔を上げた。

「……………そ、んなこと、言われたの……………初めて……………つ……………た、から……………」

「……………そうなのか？ いや、そうか……………」

四糸乃は精霊だ。今まで普通の人間と接する機会というものがなかったのなら、もしかしたらそう言われるのもオルガの言葉が初めてだったのだろう。

『オルガ、今の計算？』

「あ？ 計算ってなんだよ？」

『……………いえ、違うならいいわ』

「ああ……………」

相変わらずあまりよく分からないことを言う妹である。

『とりあえず、もう少し質問を続けてみて』

「おう、分かった」

返事をして、四糸乃の方へと向き直った。

「それで、えっと、四糸乃はなんでASTの連中に襲われても反撃しようとしなんだ？ お前、あいつらに攻撃されてんのによ」

そう訊くと、四糸乃はまた消え入りそうな声を発した。

「……………わ、たし……………は……………いたいのが、きらい……………です。きつと……………あの人たちも……………い

たいのや、こわいのは……いやだと……思います。だから、私は……」

始めは「そんな連中なんてやり返しちまえ」とか魔が差した考えも頭の片隅にあったのだが、そんなくだらない考えなんて一瞬で吹き飛んだ。

その言葉を聞いた途端に、オルガは心臓を握り潰されるような感覚を覚えた。

「……………ツ!? そういうことかよ……………」

オルガは小さく独白を漏らした。

この子は自分の嫌な感情を、他者に感じて欲しくない。

例え、ASTから攻撃を受けたとしても、自分のことを憎まれたとしても、恨まれたとしても、それはまた相手が同じようにされて感じるであろう嫌な感情だから、と。

「でも……………私、は……………弱くて、怖がりだから……………一人だと、だめ、です……………。いたくて、こわくて……………どうしようも……………なくなると……………頭の中が、ぐちゃぐちゃに……………なって……………きつと、みんなに……………ひどい、ことを、しちやいます」

後半は、もう涙声だった。

「だ、から……………よしのんは……………私の、ヒーロー……………なんです。よしのんは……………私が、こわく、なっても……………大丈夫って、言って……………くれます。そして、ら……………本当に、大丈夫に……………なるんです。だから……………だ、から……………」

「……………ちツ……………」

小さく唇を噛む。両手は血でも出るじやないかと思えるくらい、強く握った。それでもしななければ——とても耐えられそうにはなかった。

彼女の言葉を聞いて、オルガは理解した。

四糸乃は決して弱くない。

彼女はあまりにも優しすぎて——そしてあまりにも悲しすぎる。

幾度となく、自分を傷つけてきた相手であろうとも、傷つけないようにすることがどれほど困難なことであろうか。

自分の感情を相手に押し付けたくない、ただそれだけのためにASTに反撃しようとしなかったのだ。

こちらが傷つけられ、邪魔をしようとするなら、相手を徹底的に潰すことでしか、前に進むことができなかったオルガ達にとって考えもしなかったことだろう。

しかしこれだけは分かった。

彼女は強い。だが、それは——非道く歪な慈悲だった。

「……………だったらよ……………」

オルガは、思わず席を立てていた。

テーブルを迂回して、四糸乃の隣に腰を下ろすと、四糸乃の頭を撫でた。

「俺が」

「……っ、……………」

「俺が……お前を救ってやるよ」

四糸乃が目を丸くするが、構わずにオルガは続けた。

「俺が、絶対によしのんは見つけ出す。そしてお前の所に返してやるよ。よしのんに守ってもらおう必要なんか、俺がなくてやるよ。お前が嫌だって思うもんから守ってやる。俺が……お前のヒーローになる」

フード越しに頭を撫でながら、柄でもないセリフを吐く。

四糸乃の優しさには、重大な欠陥があった。

彼女が持つその聖人のような優しさが、自分に何一つ向けられたものではなかったからだ。

与えられないのなら、他の誰かが与えるしかない。

ここまで優しい少女をオルガは知らない。だがこのあまりにも優しすぎる少女に何も救がないのは、なんとも理不尽なことではないだろうか。

ならば何と言われようと、オルガは自分がすべきことを理解した。

四糸乃はオルガの言葉にしばし目を白黒させていたが、数十秒のち、小さく唇を開

いてきた。

「……あ、りがとう、ごぞいま……す」

「おう、こんくれえなんてことはねえ」

四糸乃が、素直にそう言ってくれたことが嬉しかった。それに対してオルガはうなずいた。

と、ここで右耳から琴里の声が聞こえてくる。

『——オルガ、少し話があるわ。四糸乃には申し訳ないけど一度部屋から出てくれる？』

「……話？分かった」

琴里に返すと、オルガは席を立ち上がる。それを見た四糸乃は不思議そうな顔を向けてくる。

「……………？」

「わりい、少しトイレに行くてくる。すぐに戻るから自由にしててくれ」

そう言つてオルガは、リビングから出ていって廊下に出る。

「それで、話つてなんだ？」

『あなたに良いニュースよ。パペットの所在が判明したわ』

「……なに!?それでそれはどこにあるんだ？」

『それがね——』

と、琴里が言いかけたその時、リビングから何かが壊れるような音が聞こえてきた。

「……………ツ!?!四糸乃!?!」

オルガが叫んでリビングに入ると、先程の水溜りの時のように隆起した水がテレビの画面に突き刺さっていた。

そして辺りを見回すが、リビングには四糸乃の姿が無くなっていた。

『……………消失しちやったみたいね。今、映像を確認したけど四糸乃がテレビのリモコンを触って驚いてたわ。恐らくテレビの音に驚いちゃったのかも』

「……………そうか」

オルガは小さく呟く。四糸乃から安易に目を離したのが良くなかった。彼女はまだこちらの世界に慣れていないと思うのに。

「……………わりい、目を離した俺の責任だ」

『いいえ、部屋から出るように言ったのは私よ、ごめんなさい』
そう琴里が謝罪してくる。

『でもまたいつ彼女がこちらの世界に来るか、分からないわ。その時に彼女に返せるようにパペットは取り戻さないと』

「そうだった、それで肝心のパペットはどこにあるんだ?」

『それが少し厄介な所にあつてね』

「厄介な所？」

琴里の言葉にオルガは、首をかしげた。



「……………」

四糸乃がオルガの家に来ると聞いて、三日月は自宅に戻っていた。

三日月は先程と同じように家庭菜園の本を読んでいた。

三日月の家もオルガたちと同じように両親が出張で家を留守にすることが多い。

基本的に三日月は五河家で食事を摂っている。

だが、今日は、急遽、五河家が四糸乃の休憩場所になったのである。オルガや土道と違い、三日月は四糸乃との面識がない。

そのため四糸乃と会話できるオルガのみにするために大人しく、自宅に戻ってきていたのである。

と、ここでぐうぐうと三日月の腹が鳴った。

「……………腹減ったな……………」

確か、栄養ゼリーが残っていたような気がする。それだけで食事を済ませようとする
と、土道に叱られるのだが、簡単に食事を済ませられるものがない以上そうするしか
ない。

ゆつくり立ち上がって、ゼリーを取りに行こうとする。

と、ここで三日月の携帯が鳴った。携帯を手にとるとそこにはオルガからのメールが
届いていた。

「……………オルガ?」

小さく口を開いて、メールの内容を確認して……

『ミカ、頼む』『鳶一の家に行ってくれないか?』

「……………何これ?」

思わず、眉を潜めた。

第十八話 注文の多い鳶一家

「ハハ……だな」

左手に菓子折の入った紙袋、右手に地図の描かれたメモ用紙を持った三日月は、目の前に聳えるマンションを見上げた。

「……オルガの命令じゃなきや、こんな仕事やってない」

『しょうがないでしょ。彼女とまともに話せるのなんてあなたぐらいなんだから』

三日月がぼやくと、右耳のインカムから琴里の言葉が聞こえてくる。

そう——三日月は今、鳶一折紙の自宅があるマンションを訪れていた。

四糸乃が消失した際の映像を丁寧に洗ってみたところ、帰投する寸前、折紙がパペツトをその場から持ち去ったことが判明したのである。

それを入手するために数日前に折紙に連絡を取り、家に招いてもらうことになった。本来であれば、パペツトを取り返すのは、四糸乃と対話をしているオルガに任せるべきなのだが、あいにく折紙と面と向かって話ができるような人間は、三日月ぐらいしかいなかったのである。

だが、三日月が折紙の家に行く気があまり進まないという気持ちもオルガは分からな

くもなかった。

折紙は4月21日、土道と十香の初デートの日に一度土道を殺した。

家族に手を出そうとする者は誰であろうと許さない性格の三日月にとつて、折紙は土道の仇なのである。

だからこそ、家族を一度手に掛けた折紙の家に行くということに、三日月は、どうしても気が進まないのであった。

「……オルガが言うんだからいいけどさ。というか、パペットを取り返すのなんて俺じゃなくてへラタトスクなら……」

『……やったわよ、とつくに』

それぐらいのこと簡単にできるでしょ、と言いかけたところで琴里の溜め息が聞こえてくる。

『数日前から三度に渡って潜入を試みたけれど、全部失敗したって言ってるの。』

部屋中に赤外線を張り巡らされてるわ、催涙ガスは噴射されるわ、要所にセントリーガンまで設置されてるわで、うちの機関員6人が病院送りよ。一体何と戦っているの彼女
「あー」

「何それ？めんどくさい」

『数にものを言わせて強引に押し入ればもちろん奪取は可能でしょうけど——向こうか』

らお誘いいただけるとは、それに越したことはないじゃない？」

「まあ、確かに」

正直あまり気が進まない仕事だったが、オルガの命令とへラタトスクの一人として、精霊を救う為に必要な仕事ならば仕方がないことだ。

それに――三日月自身、折紙ときちんと話しておきたいこともあった。

マンションの自動ドアをくぐり、エントランスに設えられている機械に、折紙の部屋の番号を入力すると、すぐに折紙の声が聞こえてきた。

『だれ』

「三日月。三日月・オーガス」

『入って』

そう名乗ると、すぐさまエントランス内側の自動ドアが開く。

三日月は、マンションに入り、そのままエレベーターに乗って六階まで上がり、指定された部屋番号の前に到着した。

「んじゃ、よろしく」

『ええ。任せてちょうだい』

言うのと、琴里がそう返してくる。そして呼び鈴を鳴らすと、すぐさま折紙が玄関で待ち構えていたかのようなタイミングで、扉が開かれた。

「ごめん。何その格好？」

琴里に言われた通りの軽い挨拶を言おうとしたが、玄関から出てきた折紙の姿を見て、三日月は首をかしげた。

ここは鳶一家。折紙がどんな格好をしていようと、それは彼女の自由だ。

だが今の折紙の姿は、さすがに予想外のものだった。

濃紺のワンピースに、フリルの付いたエプロン。頭には可愛らしいヘッドドレス。

そう、今彼女は、頭頂から爪先まで、完璧なメイドさんスタイルだったのだ。

三日月に言われ、折紙は、不思議そうに自分の装いに目を落としてから、首を傾げる。

「きらい？」

「いや、別に」

「なら、入って」

質問に短く返すが、折紙は気にする素振りも見せず、そのまま三日月を部屋に招き入れた。

「お邪魔します」

ノブを掴んで扉を閉め、靴を脱いで部屋に上がると、三日月は眉を潜めた。突然インカムから、ノイズのような音が鳴ったのである。

『く……っ、まさ——ジャミング——三——、通——ない——、なんとか——』

そこまで聞こえたところで、ぷつん、と音声が途切れ、何も聞こえなくなる。

「ジャミング？」

「どうしたの？」

「いや、なんでもない」

「そう」

折紙にそう言つて廊下を進んでいく。

琴里の言つた通り、鳶一家には色々と細工が施されているらしい。恐らくそのせいで、ここでは通信ができないらしい。もしかしたら、カメラも同様に操作不能になっているかもしれない。

今はへフラクシナスとの通信が取れない以上、三日月一人でこの任務を成功させねばならなくなつてしまつたということだつた。

そして、折紙に促されるままに、リビングに足を踏み入れる。

「……ん？なんだ、この匂い……」

と、リビングに入った瞬間、ふわつと甘い香りがした。

「ねえ、折紙。この匂いなに？」

「お香を炷いている」

「ふーん……」

「座って」

言われて、リビングの中央に置かれていた背の低いテーブルの前に座る。

「……………」

そして、三日月が座つたのを見届けてから、折紙も腰を落ち着けた。

三日月の、すぐ隣に。

あまりにも距離が近かったので、折紙から少し離れた位置に座ろうとする。

すると、折紙も離れる前と同じ距離感で近づき、すぐ隣に座ってきた。

「……………」

「なに」

「…………いやなんでもない」

三日月は涼し気な顔で、隣に座ってきた折紙を見ると、折紙が不思議そうに首を傾げる。

一瞬、なぜ隣に座るのか聞こうとも思ったが、言ったところでこの状態は変わらない気がしたので、もうあまり気にしないことにした。

「あのさ」

短く切り出すと、三日月は気になっていたことを口にした。

「一つ訊きたいことがあるんだけど」

「なに」

「アンタ、精霊が嫌いなんだろ。なんで嫌いなの？」

「……………」

三日月がその言葉を発した瞬間、折紙の雰囲気が変わった気がした。

「なぜ」

折紙は、三日月の目を見ながら問うてきた。

「いや、別に。前に聞いて単純に気になっただけだよ」

はつきり言つて、三日月にとって折紙は敵であり仇でもある。状況次第では潰さなければいけない人物である。

特に必要な情報ではあるが、三日月が持っていた純粹な疑問だった。

「精霊は現れるだけで世界を壊す。そこに『居る』だけで世界を殺す。あれは害悪。あれは災厄。生きとし生けるものの敵」

「……………」

「私は、忘れない」

無言で見る三日月の横で、さらに言葉を続けていく。

表情も、抑揚も、何も変わっていないのに、その言葉には折紙が持つ精霊への怒りを三日月は感じ取った。

「五年前、私から両親を奪った精霊を」

「五年前………もしかして、それって南甲町での火災のこと？」

「知ってるの？」

「うん。なんとなくだけど、覚えてる。あの日のことは」

折紙の質問に三日月は、小さく頷いた。

現在、三日月が住んでいる家から、南甲町は少し離れているのだが、そこにはかつて五河一家が住んでいた家があったため、遊びに行く機会が何回かあったのだった。

「公式には伏せられているけれど、あの火災は——精霊が起こしたもの」

「……………そうなんだ」

三日月は間を空けて小さく返す。

「その身に、真つ赤な炎を纏った精霊。私は——あの精霊に全てを奪われた。絶対に許さない。精霊は、全て私が倒す。もう、私と同じ思いをする人は、作らせない」

静かな、しかし強固な意志を思わせる声でそう言い、折紙はくつと拳を握った。

「そして、無論それは——夜刀神十香も例外ではない」

「へえ……………」

折紙が発した言葉に、眉根を寄せた。

「彼女は今、精霊とは認められていない。でも、私は彼女の存在を許容できない」

「ふうん……」

「それに、私の敵は精霊だけではない」

そう言うのと折紙は、三日月のことを真っ直ぐ見つめて言い放ってきた。

「それは——ガンダム・バルバトス」

折紙が放った言葉に目を細める。

「恐らく貴方も見たはず。4月20日、あのととき現れた。巨大なロボットの姿を」

「……あーアレか」

見たというより、バルバトスに乗っているのは三日月だが、敵に正体を明かすわけにもいかなないので、ここは大人しく話を合わせておくことにした。

「アレもアンタたちの敵？」

「そう」

三日月の問いに、折紙は抑揚のない声で続けてくる。

「……?どうかした？」

「丁度いい機会。私もあなたに訊きたいことがある。つかぬことを訊くかもしれない」

「なに？」

「……………っ」

その言葉に三日月が首を傾げて、折紙がじつと見つめ、声を発しようとした、その時

である。

ウウウウウウウウウウウウウウ

と、外から空間震警報が鳴り響いた。

「警報……？」

「……………」

折紙は数瞬の間黙りこくると、小さく息を吐くと立ち上がった。

「――― 出動。あなたは早くシエルターへ」

それだけ言って、折紙は廊下に出ていった。一人部屋に残されて三日月は呆然としていたが、

「……………とりあえず、パペット探そ」

そう小さく口にした後に、その場から立ち上がると、リビングを後にした。

第十九話 凍て付く大地

「……………っ!？」

目を開けて。四糸乃は、狼狽に身を震わせた。

闇の中で微睡むかのような感覚が掻き消えると同時に、ひんやりとした空気が頬を撫で、視界に街の景色が流れ込んできたのである。

「え…………、あ…………っ」

辺りを見回すと、どこか知らない、街の真ん中。

四糸乃の周囲だけが、爆発でもあったかのように消し飛んでいる。

そして、空からは、冷たい、雨。

何度、飽きるほどに経験した、現界の感触。

ただ違いがあるとすれば——その左手に四糸乃の無二の友だちがないこと
だろう。

「……………っ!」

空から、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

そこには――四糸乃の予想通り、機械の鎧を纏った幾人もの人間と巨大な機械の巨人がそこにいた。

「――目標を確認。総員、攻撃開始」

『はっ』

そんな会話の後、人間達と巨人の手足から、いくつもの弾が四糸乃目がけて放たれる。

「……………っ!!」

四糸乃は息を詰まらせると、地面を蹴って空に舞った。

そのまま、人間達の攻撃を避けるように、複雑な軌道を描きながら逃げていく。

「逃がすんじゃないわよ!」

『了解!』

後方からそんな声が響き、さらに何発もの弾が射出された。

それぞれが致死の力を持つ、必殺の一撃。

霊装が無ければ、四糸乃を百回殺しても釣りが出るだろう、悪意と殺意の化身。

「……………っ!」

四糸乃は、錯乱気味に空を舞いながら、声にならない叫びを上げた。

動機が激しくなって、

お腹が痛くなって、

目がぐるぐると回る。

誰かに悪意を、殺意を向けられていることが、四糸乃には許容しきれなかったのだ。いつもは違う。

いつもなら、四糸乃の左手には『よしのん』がいてくれる。

そして、『よしのん』はとても強くて頼りになるから、こんな攻撃はものともしなかった。

だから、四糸乃も平気だった。

みんなを傷つけずにいられた。

だが、今はいない。

どうしようもないくらいに恐怖感が、四糸乃の心に広がっていく。

ガチガチと歯が鳴って、

ガタガタと足が震えて、

グラグラと視界が揺れる。

もう、どうしようもないくらいに、頭の中がグシャグシャになる。

「う、あ、あ……」

雨が、さらに強まっていく。

「よし、このまま一気に行くわよ！」

リーダー格の女が言うと同時に、人間たちの禍々しい武器が、一斉に四糸乃に向けられる。

そして、そこから、今までで一番たくさんの殺意が、形となって降り注ぐ。

——そして。

「……………
《氷結傀儡》……………ツ!!」

災厄の名とともに、それを、振り下ろした。

「……………ちっつ、一足遅かったか……………」

上空からマクギリスは、銃弾の雨をASTから浴びさせられる《ハーミット》の姿を見ながら、小さく舌を打った。

空から、マクギリスの白銀モビルスーツと、石動の駆る紺色の装甲こモビルスーツ二機が飛来する。

騎士の甲冑のような装甲を身に纏い、身の丈ほどの大きさがある巨大な大剣バスターソードを携えている。

ラタトスクが開発し、作り上げた、ヴァルクユリアフレームのモビルスーツ・ヘルム
 ヴィーゲである。

魔術師たち

「彼らの相手は私がする。石動、お前は、彼女を刺激しないようになるべく距離をとって
 グレイズと戦闘しろ」

『はっ』

そう言うと、ヘルムヴィーゲがモビルスーツ隊の目の前に降り立つ。

そして、飛来したバエルの姿に気づいたのか、隊長格の女がこちらに視線を向けてき
 た。

『ちっ……またあのガンダム・フレーム？それにまたアンノウンを!』

突然現れ、先日、好き勝手にやられたのもあつて忌々しげに言い放つ。

『く——モビルスーツ隊はそのままアンノウンを、B部隊はへーミットへの攻撃の
 継続!残りは目標をガンダムに変更!ここで食い止めるわよ!』

女が叫ぶと、一斉に部隊が散開し、こちらに向けて大量の弾丸が襲いかかってくる。

「ふ——私は今、機嫌が悪いのでな」

操縦桿を動かして、指示を出す。

こちらへ向けて放たれたミサイルを、バエルは、蒼い炎を吹き出しながらかわしてい
 く。的を失ったミサイルはそのまま地面にぶつかり爆散する。

バエルは煙の中からその姿を表すと、腰部に装備したバエル・ソードを引き抜き、A
ST隊員たちに切りかかった。

「少しばかり憂き晴らしに付き合ってもらおう！」



「なっ……なんだ、こりゃ……?!？」

「こいつは、一体どうなって、やがんだ………う？」

自宅にいた土道とオルガは、外へ出て目の前に広がる光景に目を疑った。

何しろ、見慣れた街並みが一面銀世界になっていたからだ。

それも、雪が積もったというより、純粹に街が凍りついているのだ。

『警報が聞こえなかった？ 四糸乃よ』

今まで沈黙を保っていたインカムから、琴里の声が聞こえてくる。

「これを引き起こしたのが、四糸乃の仕業だったのか？」

『ええ。あまり悠長に構えているような状況じゃあないわね。本来なら排水されるべき
雨水まで取り込んで凍結しているから、このままの状態が続けば、地盤や地下シエル
ターの方にも深刻な影響が出る可能性があるわ』

「ああ、だが肝心のパペットが……」

『それなら心配いらないわ』

琴里がそう言うのと、丁度良く、声が聞こえてきた。

「——オルガ！」

道の向こうから走ってきたのは、パペットを握った三日月だった。そして五河家の目の前に着くと、手にしたパペットを渡してくる。

「ありがとな、ミカ」

オルガが礼を言うと、三日月からパペットを受け取った。

ふうと息を吐き、琴里が続ける。

『さて、改めてだけど、オルガ。四糸乃を止められるのはあの子と話したことがあるあなたと、そのパペットだけよ。行ってくれるかしら？』

「もちろんだ。これ以上、あいつのことを放っておけるかよ」

『……オルガ、それにシンと三日月、君たちに私の方からも一つ、いいかな？』

と、インカムから眠たげな声が聞こえてくる。令音だ。

『……色々と調べてみたが———どうやら、君の疑問はあながち間違つてなかつたようだ』

「あいつのこと、何か分かつたんですか？」

『……時間がなから手短に伝えよう。四糸乃は――』
令音が、簡潔に事態を説明してくる。

「……………ッ！」

それを聞くと、その場にいる三人は心臓を、ぎゅうと締め付けられるような感覚が、身体を通り抜けた。

オルガは唇を噛みしめ、拳を強く握っていた。

そして三日月は少し悲愴な面持ちになっていた。

だが、不思議とそれを聞いて腑に落ちた。

そして、それと同時に四糸乃を救わなければ使命感に駆られていた。

「琴里」

神妙な面持ちになるオルガを見て、意図を察したのだろう、琴里が声を響かせてくる。

『分かったわ。士道たちはフラクシナスで回収するから、あなたは、右手に真つ直ぐ、大通りに出るまで走りなさい。その位置なら先回りできるはずよ。マクギリスと石動たちが既にASTと交戦してるから気をつけなさい』

「……………了解。んじや行ってくるぜ」

士道と三日月の方を一瞥する。すると二人は、オルガの意思をくみ取り、無言で頷いた。

視線を前方に戻して、速やかに足を踏みしめて、雨の中を駆けていった。

凍り付いた路面に足を取られながら、なんとか速度を維持して走っていく。

そしてすぐに人気のない大通りに差し掛かり、足をグツと踏みしめた。

すると、兎のような巨体の天使・〈氷結傀儡^{ザドキエル}〉が目に入ってきた。

オルガは、喉が潰れんばかりに声を張り上げた。

「四糸乃オオオオオオオッ!!」

「……………」

猛スピードで迫る人形の背に張り付いていた四糸乃が、びっくりと反応を示す。

「どうやら、オルガの姿に気がついてたらしい。」

凍り付いた路面を滑るように移動していた〈氷結傀儡^{ザドキエル}〉が、オルガの目の前で停止す

る。

そして鈍重そうなフォルムの人形が、身をかんだかと思うと、その背に張り付いて

いた四糸乃が、涙でグシャグシャになった顔を上げた。

「よう、四糸乃。また会ったな」

「……………オルガさ、ん……………」

四糸乃が身を起こし、うんうんと首を縦に振る。

それを見ると、オルガはへつと小さく笑ってみせた。

四糸乃が〈氷結傀儡^{ザドキエール}〉の背から腕を引き抜く。四糸乃の指には指輪のようなものはめられており、そこから糸が伸びていた。恐らくそれを使って操り人形のように天使を操っていたのだらう。

「四糸乃、お前に渡すもんがあるんだ」

「……………？」

四糸乃が、涙を拭うと、問うように首を傾げる。

オルガは、ポケットに入れていたパペットを取り出そうとした瞬間。

『オルガ！』

琴里の声が響くと同時、オルガの後方から四糸乃目掛けて、光線のようなものが放たれた。

「なに……………ッ!？」

オルガが声を詰まらせ、後方を振り向くと、そこには数々の砲門を構えた人間が浮遊していた。

「…………… 鳶一、折紙……………ッ!」

忌々しげにオルガは言い放つ。

しかしそれだけではなかった。いつの間にか士道と四糸乃の周囲には、ASTの魔術師たちが集結しつつあった。

一瞬、その後ろでマクギリスの搭乗するバエルと他の魔術師ウィザードが交戦している姿が目に入る。

『その少年。危険です。その少女から離れなさい』
魔術師ウィザードの女性から、事務的な台詞が発せられる。

だが、

「う——あ、あ、あ、あ、あ……ッ」

すぐに前方から、そんな声がして視線を戻すと、四糸乃が、AST隊員たちの姿を見て、ガタガタと身体からだを震わせていた。

「これは……ッ！」

四糸乃が震える様子を見て、息を詰まらせる。

「あ、つあああ、うああああああ——ッ！」

叫び、四糸乃が再び両腕を〈氷結傀儡ザドキエル〉の穴に差し入れる。

そして凄まじい冷気をあたりに撒き散らしながら、後方へと滑っていった。

「ぐッ、四糸乃……落ち着けッ……！」

だが、こんな状況で落ち着けと言う方が無理がある。そんなことはオルガにだって分かりきっている。

オルガの懇願も届かず、四糸乃が操る〈氷結傀儡ザドキエル〉は、さらに周りの空気を吸い込ん

でいった。



凍て付いた街の中を一人で十香は、走っている。

先程、士道と三日月からシエルターに避難するよう促されたのだが、オルガのことが心配になり、士道たちの静止を振り切つて無理矢理来たのだ。

「あ——あれは……ッ！」

凍り付いた街を走っていた十香は、視界の先に見えた光景に戦慄した。

開けた道路の上に、オルガと、先日見た青い髪の少女、それに奥で戦闘しているバエルとASTたちの姿が確認できたのである。

そして、人形を駆る少女が後退し、周囲の大気を吸い込むように人形を仰け反らせる。

「——っ」

それを目にした途端、十香は、腹の底がぞくつと冷えるのを感じた。

なぜだろうか、本能とかそういうものでしか語りようがないが、なんとなく、理解できる。あれは——よくないものだ。

言語化しづらいのだが、そう、十香の〈サンダルフォン塵殺公〉が放つ一撃と非常によく似た空気の

震え方をしているのである。

「……………つ、オルガ！」

声を張り上げるが、そんなことをしても無駄なことは分かりきっている。

十香は、咄嗟に踵を地面に突き立てた。

「サンダルフォン 〱塵殺公〱……………ッ！」

十香の持つ最強の剣の名を呼ぶ。だが、何も起こらない。十香は顔を歪める。

「くっ……………」

だが、こうなることを想像していなかったわけではない。一応、琴里たちからも色々な説明を受けていた。

自分の存在についてや、琴里たちは、十香をどうしようとしているのか。

そしてその過程で、土道が十香の力を封印したということも、聞いていた。

そのことに不安がなかったといえれば嘘になる。何しろ今まであった力が、突然無くなってしまふのだ。誰だつて不安になってしまふのは当然だろう。

だけれど次第に、それが土道たちとともに人間としての生活を送るために必要な要素だということが理解できていた。

十香は、今の生活がたまらなく楽しい。

折紙は未だに鼻持ちならないし、琴里や令音も、完全に信用に足るわけではない。

だが。

〔サングルドフォン〕 〈塵殺公〉……つ！ 〈塵殺公〉！

人間として生きるために一度手放したはずの力を、オルガを助け出すために再度求めなければならなかった。

幾度も幾度も踵を突きつける。だが、何度試しても 〈サングルドフォン〉は顕現しない。

〔くっ……頼む……出てくれ、サングルドフォン〕……つ！

歯を噛み締め、眉根を寄せ、泣いてしまいそうになりながらも、地面を蹴り続ける。

脳裏を、土道が凶弾に倒れたときの光景が鮮明に蘇る。

ごっそりと抉り取られた腹部。力無く倒れ伏す土道。何もできなかった自分。

もう、あんなのは経験したくない。

〔………つ！〕

ゆらゆらと、ぐらぐらと、十香の精神状態が、不安定になる。意識が飛んでしまいそうなほどのストレスが、十香の頭の中で蹂躪する。

〔く——あ、あああああああッ！〕

〔………うお………つ！〕

周囲に展開したAST隊員たちは、大気を吸い込み始めた〈氷結傀儡^{ザドキエル}〉に、繰り返し
攻防を仕掛けていたが、それらは全て周囲の雨に阻まれていた。

そして、四糸乃が〈氷結傀儡^{ザドキエル}〉から、凄まじい冷気の奔流を放ってくる。

「なっ」

オルガは思わず、息を飲んでしまう。

詳しいことは分からなかったが、あれがオルガの命を確実に刈り取るであろう一撃だ
ということは、なんとなく予想がついた。

このタイミングと速度では、到底避けられるようなものではなかった。

オルガは思わず目を瞑り——数秒の間、身を固くしたあと、違和感に首をひねっ
て目を開けた。

「こ、これは……………」

何しろ、いつの間にかオルガの目の前に巨大な玉座が聳え、四糸乃の攻撃から守つて
いてくれたのだから。

「十香の……………」

それを見て、呆然と呟く。

金属のような質感を持った豪華な玉座。鋼色の肘掛けに、剣の柄が顔を覗かせる背も

たれ。

それは、十香の無二の武器〈塵殺公〉サウダルフオンに他ならなかった。

「な、なんでこれが……」

『簡単よ』

右耳から、琴里の声が聞こえてくる。

「どういうことだ？十香の力は、土道に封印されているんじゃないのか……？」

『前に言ったでしょ。土道と十香には見えないパスが通ってて、十香の精神状態が不安定になると、力が少し逆流する恐れがあるって。フルパワーには程遠いけれど、まさか天使まで顕現させちゃうなんてね』

「だ、だけど、なんで十香の天使がこんなところに……」

オルガがポカンとしていて、周囲にも動きがあつた。

突然玉座が出現したことで、四糸乃は得体の知れないものを見たような表情を作り、凄まじいスピードで逃げてしまった。

A S T 隊員たちもスラスターを駆動させ、それを追っていく。

「……そ、そうだ。俺も四糸乃を追わねえと」

と、

「オルガ！」

後方から、可愛らしい声が聞こえてきた。

玉座の持ち主は、考えるまでもない。十香だ。

「十香。て——は？」

十香の方に振り向いたオルガは、十香の姿を見て、間の抜けた声を発した。

いつも通り来禅高校の制服を着ていたのだが、胸元やスカートなど、身体の所々に、美しい光の膜が揺れていたのである。

「十香、その格好……？」

「ぬ？」

オルガが言うと、十香は目をぱちくりさせて自分の

身体に目を落とした。

「おお!?なんだこれは! 霊装か!」

指摘されて初めて自分の様子に気づいたらしい。十香が驚きの声を上げる。

そしてしばしの間、ぺたぺたと光の膜を触ったあと、ハッと顔を上げると、オルガの方に視線を戻してきた。

「そんなことより、オルガ、無事か? 怪我はないか?」

「あ……ああ、心配いらねえさ」

オルガは目の前に聳え立つ玉座を見上げながら、答えた。

しかし、いつまでもこうしているわけにもいかない。
精霊たる、十香の、天使サングルフォンへ「塵殺公」。そして、霊装。

完璧な状態ではないとはいえ、それが人智を超える異能であることに変わりはない。
た。

オルガは数俊ばかり考えを張り巡らせた後に、十香に向き直った。

「十香、頼みがある」

「ぬ……？なんだ、急に改まって」

十香が、不思議そうに首をひねってくる。

オルガは躊躇うことなく、深々と頭を下げた。

「お、オルガ？」

「——十香！俺に力を貸してくれ。マクギリスたちは今、魔術師ウィザードたちの相手をしてる。多

分、俺一人だけじゃ今の四系乃を、追うことすらできねえ」

「……………」

十香はしばしの無言のあと、小さな声を響かせてきた。

「四系乃というのは——あの娘のことか？」

「ああ、あいつはお前と同じ……………」

「精霊、なのだろう？」

「え……………」

「以前、マクギリスからそのことは聞いた」

「そうだったのか……………だったら話は早え。手伝つてくれ！」

それを聞くと十香は、渋々といった様子でこくりと頷いた。

「……………分かった、構わん」

「十香！」

だが、とそのまま言葉を続けてくる。どこか……………悲しそうに。

「……………その前に一つ質問してもいいか？」

「……………なんだ、急にどうした？」

「お前にとってあの娘は……………なんなのだ？」

突拍子のない質問にオルガは困惑する。

「は、はあ……………？いきなりなんだよ？」

「いいから答えろ」

「……………四糸乃は、あいつは……………俺が救わなきゃいけないやつだ。俺はあいつに約束したんだ。俺がヒーローになってやるって」

「……………なら、あの娘がお前にとって大切なのだな。……………私、より」

「……………そんなわけ無いだろ！お前だって俺たちの大切な家族に決まってるだろ！」

オルガは顔を上げ、十香の顔を見ながら叫んだ。

「え……………」

「そうだ。俺はお前を大切な家族の一人だと思ってる。俺だけじゃない。土道やミカもだ。家族に誰が一番だとか、そんなこと関係ねえ。俺にとって家族は、みんな大切なんだ……………」

「……………」

「四糸乃には、居場所がない。お前と同じように、自分の意思だけじゃどうしようもならない力を持つってるせいで。それに俺は約束したんだ、あいつのヒーローになるってな」

「……………」

再び、頭を下げる。

「だから頼む！十香！」

「……………」

沈黙が、流れる。

だが……………それはそう長くは続かなかった。

すう……………はああああ、と深呼吸のような音が聞こえてきたあと。

「……………っ、はは」

小さな、笑いにも聞こえる声が響いた。

顔を上げると、十香が、額に手を当てていることがわかる。

そしてその口元が、小さく動いていた。

「……ああ、そうか。そうだった。なぜ忘れていたんだろう。」

私を救ってくれた

のは、こういう男たちだったな……」

「十香……？」

雨のために、十香の言葉が聞き取れなかった。訝しげに聞き返す。

しかし十香は答えず、バツと身を翻した。

「あの娘を、追えばいいのだな？」

「……ッ、十香！」

「それ以上は言うな。時間が惜しい」

「……フツ、そうだな」

十香は数歩足を動かし、その場に蹲えていた〈サンダルフオン塵殺公〉をガン！と蹴る。

すると巨大な玉座が前方に倒れながら、その形を微妙に変化させていった。

「こ、これは――」

「乗れ。急ぐのだろうか？」

十香は横になった玉座の背もたれ部分に飛び乗ると、オルガを促すように言ってくる。

「あ、ああ……………」

オルガは戸惑いながらも、十香に続けて〈塵殺公〉サンダルフォンの上に乗った。

「――掴まっているろ」

「……………ッ!?!」

凄まじい加速で以て、〈塵殺公〉サンダルフォンが凍った地面の上を滑り始めた。

全身を殺人的な風圧と重力が襲う。オルガは咄嗟に背もたれの装飾にしがみついた。

だが十香は何に掴まるでもなく、足の裏に強力な磁石でも備わっているかのように、背もたれに悠然と立っていた。

「速度を抑えていては見失う!このまま行くぞ!」

「グッ……………うううっ、お、おう……………っ!」

前世でも、ここまで殺人的な加速と風圧を感じたことはなかった。

一瞬でも気を抜けば、そのまま後方にふっ飛ばされてしまいそうである。

『――まったく』

と、右耳のインカムに、やれやれといった琴里の声が響いた。

『マクギリスにも困ったものよ。十香に四糸乃のことを軽率に教えるなんて。それにあなたもよ、オルガ。十香が応じてくれたからいいようなもの』

「わりの、説教はあとでいくらでも聞いてやる……………!」ただ、今は、黙って力を貸してく

れ！」

『もちろんよ。精霊を助けるのが私たちの使命。協力には惜しまないわ』

「すまねえ……！！恩に着る……！！」

と、そこでさらに〈塵殺公〉のスピードが加速する。オルガは首に力を入れ、どうにか〈塵殺公〉の背もたれに足をつくくと、十香に支えられながら氷上を進んでいった。

第二十話 氷渦の中で

「……………ふ」

バエル・ソードで周りを浮遊する魔術師ウィザードを薙ぎ払う。

『……………!?』

なんとか〈随意領域テリトリ〉で肉体へのダメージは防いだが、衝撃は殺し切ることができず薙ぎ払いに巻き込まれた何人かの魔術師ウィザードは後方に吹き飛ばされ、壁や地面に体を打ちつけられて気絶する。

「彼らを殺さぬように加減するのはいささか難しいものだな」

吹き飛ばされた魔術師たちの様子を一瞥しながら、小さく愚痴る。

恐らくマクギリスたちはその気にさえなれば、この場にいる魔術師たちを皆殺しにできはすだろう。

だが、マクギリスたちがASTを実際に殺そうとしないのには理由があった。

あくまでラタトスクは『精霊保護が目的なのであって、ASTの壊滅が目的ではない』と。

そのように上層部から念押しされていたのだった。

だがモビルスーツの巨体では、力加減次第ではあっさり殺すこともできるだろう。彼らが死なないように上手いこと力をセーブするのは難しかった。

と、そのときだった。周囲の雨風が突然雹のように氷結し、マクギリスの背後にいたへハーミット、その周りを氷嵐が渦巻き、結界を作り始めたのである。

「石動！今すぐへハーミットから離れろ！」

マクギリスが叫ぶと、スラストスターウイングを広げへハーミット、の結界から逃れる。

石動の駆るヘルムヴィーゲも同じように近くから離脱していた。

上空からちらと、下方に視線を向ける。

下方には、ゴオオオオオと低い唸りを上げながら渦を巻く、半径十メートルほどの半球。

きっとハーミットが自分の身を守ろうと、作り出したのだろう。

その周りには半径三メートルほどの丸い氷の塊と、結界に巻き込まれて、真っ白に凍結させられたグレイズの姿があった。

『あれが、精霊の力……………』

目の前の光景を見て、石動は呆然と声を発する。

あのまま留まり続けていたら、ああなっていたかと思うとぞつとする。

『しかしあの結界が張られていては我々も手出しできませんね……』
「そうだな」

あの結界は霊力によって編み込まれたものだ。迂闊に近づけば、AST隊員と同じように凍結させられるだろう。

だが、あの結界を突破する手段がない訳でもない。

「あの結界は、顕現装置^{リアライザ}で出力された魔力に反応して、局所的に防性を高めている。つまり魔力を纏っていない物理的な攻撃ならば、あの結界を突破できる可能性がある」

『ですが無暗に結界を切り抜けようとすれば……』

「ああ随意領域^{テリトリ}ごと凍結させるような代物だ。モビルスーツなど一瞬にして身動きが取れなくなるだろう。そうなると――」

それこそ巨大な物量を結界にぶつけでもしない限り、と口にしようとした途端、マクギリスは眉をひそめた。

突然、ビルの先端部分がメキメキとイヤな音を立てて、浮遊し始めたのである。きつとAST隊員と顕現装置^{リアライザ}の仕業だということは理解できた。

だが、あのようなコンクリートの塊など、持ち上げてどうするつもりかと疑問に思っただり。た利那。

AST隊員が巨大なコンクリートの塊を、結界に向けて放り投げた。

「まさか」

恐らく、ASTはあの巨大なコンクリートの塊を結界にぶつけるつもりなのだろう。あれほどの重量なら、結界を破壊することができるはずだった。

まずい、と直感的に察知したマクギリスは背部の電磁砲を巨大な塊に向けて放った。

ガアアアアーンという轟音とコンクリートは砕けたが、砕けた残骸も、先程と比べると小さくはなかったが、結界を壊すには十分な大きさだった。

少しでも穴を開けさせれば、そこから一斉射撃をするだろう。そうなれば逃げ場を失っている（ハーミット）は一溜まりもないかもしれない。

それだけはなんとしても避けなければいけなかった。

「くっ」

マクギリスは操縦桿を操作してバエルに指令を出す、

残りの残骸を破壊しようと、機体を翻した。

「そのときだった。」

粉碎された瓦礫に幾つも線が引かれたかと思うと、それに沿って瓦礫が細かく切り刻まれていったのだ。

地面に触れる頃には、残骸はもはやただの破片と破片になっていた。

「何が」

と、声を発した瞬間、モニターにもう一つ精霊反応が現れた。

『じゅ、准将！〈プリンセス〉です！』

石動に言われ、反応が現れた方を見ると、AST隊員と〈プリンセス〉——夜刀神十香が斬り合っていた。

「なぜ、彼女が……」

『——オルガたちの邪魔をさせないために駆けつけてくれたみたいよ』
フラクシナスの回線から、琴里の声が聞こえてくる。

数分前、オルガたちは四糸乃の下へ向かう途中でASTがビルをむしり取って、同じく結界の上に運んでいるのを目にしていた。

十香はそれを見ると、オルガに四糸乃を託して、こちらに向かってきたとのこと。
琴里の呆れたようなため息が耳に入ってきた。

『あの子にも困ったもんだわ。ラタトスクとしては精霊にあまり危険なことはさせたくないんだけどね。それにあんたもあんたよ、マクギリス。まさか四糸乃のことまであの子に話してたなんて。十香に余計な情報を与「えてんじやないわよ』

「その件については申し訳ないと思ってる。だがこれからのことで彼女の誤解を解くため

には必要なことだと思っただけ」

『はあ……弁明の言葉、考えときなさい。とりあえず今は、十香のサポートに回って頂戴』

「承知した」

琴里の指示に言葉に頷くと、十香とASTたちの方に顔を向ける。

ASTはハーミットから目標を十香に変更し、攻撃を行っていた。

距離さえ取れば攻撃を仕掛けてこないハーミットを後回しにするのは当然の考えだった。

それを見て、マクギリスは自嘲気味に呟く。

「しかし、精霊——プリンセスのサポート、か。やはり物事はこちらの思惑通りには進まないものだな」

『それにしても、どこか楽しげにも聞こえますが』

「そうか？ いや……そうかもしれないな。何せ、災厄と呼ばれた少女とこうして肩を並べることができるのだからな」

そう言っただけ小さく笑う。

だがいつまでもこうして、あのまま十香をASTの相手をさせ続けるわけにもいかなかった。

オルガがハーミットを救う時間を稼ぐ、それが今の自分たちの役目だった。
「行くぞ、石動」

『はっ！』

マクギリスの言葉に石動が力強く答えると、二機のモビルスーツは再び戦場に向かった。



「さてと——どうしたもんか……」

荒れ狂う氷嵐の結界を目の前にして、オルガは頭をかいた。

3分ほど前にASTの相手をしに向かった十香と別れた後、サンダルフォンへ塵殺公に乗って四糸乃の所に向かっていたのだが、結界に触れた途端にサンダルフォンへ塵殺公が凍り付いてしまった。恐らく靈力に反応したのだろう。

目の前には真つ白に凍り付いたサンダルフォンへ塵殺公が横たわっていた。

「……………やるしかねえな……………」

意を決すると、パペットを服の中に移動させる。それを身体で覆うように前屈みになり、オルガは足を一步前に踏み出した。

『オルガ、待ちなさい。何をすするつもり?』

右耳に、静止の言葉が入る。

「ああ? 急にどうかしたか?」

司令官モードとは思えない殊勝な言葉に、オルガは足を止めなかった。

『何、呑気なこと言ってるの!?! 吹雪が吹き荒れている領域は、結界内の外周およそ五メートル地点まで。五メートルよ? その距離を、散弾銃撃たれながら進むようなものよ? しかも、その範囲内で靈力を感知されたら、十香の〈サンダルフォン塵殺公〉みたいに凍り付かされるわ』
まくしたてるように、琴里が続けてくる。

『言ってる意味がわかる? 結界外縁部にいる間は、傷が治らないって言ってるのよ。一発きりの銃弾とはわけが違うわ。途中で力尽きたら――』

「――それでも行かないといけないんだよ」

『――ッ』

「俺は約束したんだ、四糸乃のヒーローになるって約束をな」

琴里の言ってることも理解できる。強がっているってのも分かってる。

氷嵐は凄まじい勢いで今もなお吹き荒れ続けている。

そんな中に、単身でましてや生身で突つ込もうなんて馬鹿のやる話だ。

だがオルガにはここで止まるわけにはいかない理由があった。

「あいつは今までよしのんしかいなかった。周りを傷つけないようにたつた一人で苦しんでたんだよ。怖いのも、痛いのも、苦しいのも、全部」

『……………ッ』

「潰し、殺し合う。そんな世界で生きてきた俺は、他人を傷つけない、そんなあいつの哀しみを俺は理解できてやれるかは分からねえ。だけど——あいつの居場所に、あいつのヒーローになることぐらいならできる。もう一人には俺が絶対にさせねえ」

自分の決めたことには筋を通す——それがオルガのやり方だった。

それは転生した後でも変わることはない。

例えなんと言われようとも、オルガは四糸乃を救うまで足を止めない、そう決めたのだ。

「頼む琴里、俺に行かせてくれ」

オルガが懇願の声を上げると、インカムの向こう側からとても大きなため息が聞こえてきた。

『……………分かったわ。どうせ止めたって無駄なんでしょう…………？』

「琴里……………」

琴里の言葉を聞き、顔を上げる。

『ただし絶対に生きて帰ってきなさい。四糸乃の霊力封印するだけして、そのままくた

ばつたらただじゃおかないわ。あんただって——私たちの家族なんだから」
 「……ああ分かつてるよ。絶対に戻ってくる」

静かに答えると、足先を吹雪が渦巻く結界に向けた。

そして裂帛の気合いと共に結界に向かって駆けていった。

「ウオオオオオアアアア——ッ!!」

結界に足を踏み入れたとき、オルガの耳には吹雪の音しか聞こえなくなった。



「う、え……………つ、え……………つ」

結界の中心部で、四糸乃は〈氷結傀儡^{ザドキエル}〉の背にうずくまり、一人泣いていた。

吹き荒れる氷弾の中とは思えないほどに、静かな空間である。ただただ、四糸乃の嗚咽と涙をすすする音だけが、いやに大きく反響するだけだった。

とても怖くて、外に出られない。でも、ここは——とても、寂しかった。

「よ、し、のん……………つ……………」

涙に濡れた声で、友達の名前を呼ぶ。

答えてくれるはずがないのは、四糸乃も分かっていた。だが、その名を呼ばずには

いられなかった。

『は・あ・い』

「……………ツ!？」

四糸乃はビクツツと肩を震わせると、バツと顔を上げてあたりを見回した。

「……………」

そして、四糸乃は涙を拭って目を見開いた。

なぜなら結界中心部と外縁部の境目あたりに、見慣れたパペットが確認できたからだ。

「!よしのん……………っ!？」

四糸乃は叫ぶと、〈氷結傀儡^{ザドキエル}〉の背から飛び降り、そちらにパタパタと走っていった。見間違えるはずがない。

それは紛れもなく、数日前にいなくなってしまった四糸乃の友だち『よしのん』だった。

だが

「……………ひっ……………」

バタン！と、よしのんの後ろから誰かが倒れ込んできて、四糸乃は思わず足を止めてしまった。

否——正確には、今倒れ込んできた人が、よしのんを手に着けているようだった。その人物は、全身が血塗れ傷だらけになっていた。

きつと四糸乃の境界を無理矢理通ってきたのだろう。

もはやこれは人というより死体だった。それは四糸乃の目にも明らかだった。

その男の人が倒れ込んだ場所からは夥しい量の血が流れていた。

しかしすぐに、四糸乃はその認識を改めねばいけなくなった。

なぜなら突然、半死人の身体に無数にあつた傷が少しずつまるで——時間が巻き戻るかのよう^にに塞がり始めたのである。

四糸乃が呆気にと取られていると、何事も無かつたかのようにその人物の身体から傷が消え去った。

すると、いきなり身体を動かし、仰向けに倒れると大の字になった。

そして、ようやくその容貌が見てとれるようになる。

「……………!? オルガさ……………」

四糸乃は、驚愕に染まった声を発した。

そう、そのボロボロだつまた人間は、あのオルガ・イツカだったのである。

オルガは仰向けのまま、その場でふうううう……と、深く息を吐き出した。

「ツ……ああ……死ぬかと思つた……」

ギリギリのところまで結界内部に到達できたオルガは、大きく胸を上下させて深呼吸をし、止まりかけた心臓の鼓動を落ち着けてから、むくりと身体を起こした。

外部は機銃掃射さながらの猛吹雪だったというのに、中心部は実に静かだった。なんとも奇妙な空間である。

「——四糸乃……」

オルガは名前を呼ぶと、ウサギのパペットを掲げるようにしながら立ち上がった。

「約束通り、お前を助けに来た……ツ！」

すると四糸乃は目を丸くしたのち、

「う、え、ええええ……」

目に涙を溜め、泣き出してしまった。

「えっ……う？ちよ、な、泣くなつて！なんか俺いけなかつたか……？」

オルガはそれを見て慌てると、四糸乃がふるふると首を振った。

「違……ます、来て、くれ……嬉し……て……っ」

そうやって、再び「うええええ……」と泣き出してしまふ。

そんな様子に苦笑しながら、右手で四糸乃の頭を優しく撫でた。

そして、右手に装着していたパペットを、ぴこぴこ動かしてみる。

『やつはー、お久しぶりだね。元氣だったかい?』

などと、口をもごもご言わせながら、見よう見真似で腹話術をする。

拙すぎる芸だったけれど、四糸乃は嬉しそうに首を何度も前に倒した。

あくまで『よしのん』は、四糸乃の腹話術で動く人形のはずなのである。

オルガは、先程の令音から伝えられた言葉を思い返した。

『……………調査の結果、こちらがモニタリングしていた精神グラフの後ろに、もう一つ非

常に小さな反応が隠れていることが分かった』

「え……………それってつまり……………」

『……………要するに、パペットを着けているときにだけ、四糸乃の中にもう一つ、並列しているということさ』

「なっ……………そのことをあいつ自身は気づいているんですか?」

『……………どうだろうね。ただ一つ確かなのは、デパートで君たちと会話していたのは、

四糸乃ではなくパペットを介して発言していた別人格だったということさ。四糸乃自身はそのとき、全ての対応をよしのんに任せ、意図的に心を閉じ込めていた状態に近い。それともう一つ。よしのの発生原因について、興味深いことがある』

「興味深いこと？」

『……………ああ。己以外の人格を自分の中に生み出してしまう理由はいくつかあるが――

――ポピュラーなのは、虐待などの強い苦痛やストレスから逃れるため、といったところだろう。要は、辛い思いをしているのは自分ではなく別の誰か、と思い込むた

めに、もう一つの人格を作り出してしまふのさ』

「それって、ASTに命を狙われてたからか……………？」

『……………いいや。なんとも信じがたいことに、この少女は、自分ではなく、他者を傷つけないために、自分の力を抑えてくれる人格を生み出した可能性がある』

「……………」

『……………オルガ。きつと、彼女を救ってやってくれ。こんなにも優しい少女が救われないのは……………嘘だろう』

「ありが、とう……………ぎ、ます」

と、不意に四糸乃が頭を下げてきた。

「え？」

「……よしのんを、助けて、くれて」

オルガは一瞬頬を書くと、小さく笑って「ああ」と頷いた。

「次は——四糸乃。今度は、お前を救う番だ」

「え……………」

四糸乃が不思議そうに返してくる。オルガは四糸乃と視線を合わせるように、その場に膝を突いた。

インカムからは、何も聞こえてこない。きつと結界を通る際に壊れてしまったのだろう。

四糸乃の精神状態を知りたかったが、こうなっては仕方がない。

しかし、いざキスをするとなると緊張してしまう。霊力の封印にはキスが必要不可欠なのは聞いてるし、土道が十香の霊力を封じたのも目の前で見ていたが、こうして幼気な少女とキスをするというのはいささか罪悪感というか、恥ずかしさを感じられずにはいられなかった。

だがどちらにしろ、腹を括るしかないのだ。

パペットを失った四糸乃との触れ合いと、今この会話と。

それだけの時間で、オルガの四糸乃に最低限の信頼を得ていると信じて。

「あー、えーとだな、四糸乃。お前を助けるためには、その、一つやらなきやいけないことがあるんだよ」

「なん……………ですか？」

四糸乃がきよとんとした様子で首を傾げる。オルガは乾くのどに唾液を流し込んでから、言葉が続けた。

「……………キスって知ってるか？唇と唇を近づけることなんだけど……………」

と、オルガがキスの説明を始めた途端――

「……………へ？？」

四糸乃は、オルガの唇にちゅつと口づけてきた。

瞬間、身体の中に何やら暖かいものが流れ込んでくる感覚が、オルガを襲った。

これが以前、土道が話していた事なのだろうか。

「……………なっ!?よ、よ、四糸乃……………ッ!?お前……………?？」

「違い……………ました、か……………?？」

「あつ、へつ、い、いや……………違わないけど……………」

しどろもどろな調子でそう言う。

突然のキスに驚いて、最後の方は声が小さくなっていた。

オルガの言葉を聞くと、四糸乃はこくりと首肯した。

「オルガ、さんの……………言う事なら、信じます」

と、その瞬間——四糸乃の後方に佇んでいた〈氷結傀儡^{ザドキエル}〉や、彼女の纏っていたインナーが、光の粒になって溶けていく。

そしてオルガと四糸乃を囲っていた吹雪の結界もまた、急激に勢いをなくして掻き消えていった。

「……………つ、お、オルガさ……………、これ——」

四糸乃は何が何だか分からないといった様子で、目をぐるぐると回した。そして半裸状態の身体を隠すように、身を屈める。

「へ……………う……………いや、その……………すまん……………」

そんな反応をされると、オルガも改めて恥ずかしくなってきたしまった。

恥ずかしくなってしまうと、オルガの方も頬を赤らめてしまう。

そんな自分の顔を見せたくなくて、手で顔を隠して四糸乃から少し目を反らした。

あんなカッコつけたこと言っておいて、恥ずかしそうにしているのは、少し決まりが

悪い気がした。

と、そこで。

「ん……………」

四糸乃が、眩しそうに目を細めた。雲の切れ間から――太陽の光が、注いできていた。

「暖か――い……………」

まるで初めて太陽を目にしたかのように、四糸乃が小さな驚嘆を発する。彼女がこちらに現界した際は、いつも雨が降っていた。

きっと四糸乃は、今まで太陽を見たことが無かったのかもしれない。

「き、れい……………」

「太陽を見るのは――初めてか？」

ぼうつと、小さく四糸乃にオルガは声を掛ける。

「は、い……………」

「――空って綺麗だろ？」

オルガが訊くと、四糸乃は小さく首肯する。

「はい……………き、れい……………です」

四糸乃は天を見上げて言う。

オルガも、それにつられて顔を上にやった。

そして、すぐに四糸乃が見つめていたものを見つける。

灰色の雨雲が掻き消えた空には、
見事な虹が架かっていた。

生前、火星では一度も見ることがなかった虹。

自分たちの新しい居場所に架かる虹は、この上ないほどに美しいものであった。



「な……なんじやこりやああッー！」

オルガが四糸乃の靈力を封印してから二日が経った。

検査を終えたオルガたちは、ようやく家に帰ってくることができたのだが、次の日、朝起きてみると、少し前まで空き地だった五河家の隣に、マンションのような建物が聳えていたのである。

「何って……言ってなかったっけ？ 精霊用の特設住宅を造るって」

と、後方から琴里が、眠たげに目を擦りながら言ってきた。

「これが、前に言ってたやつか……？」

「ええ。見た目は普通のマンションだけれど、物理的強度は通常の数百倍、顕現装置リアライザも働いているから、靈力耐性もバッチリよ。多少暴れても、外には異常が漏れないわ」

「いや、そういうことを聞いているんじゃないかな……！ 一体いつの間に造ったんだよこれ……！ 一日二日じゃできねえだろこんなの！」

「やあねえ。陸自の災害復興部隊だって、破壊されたビルを一晚で直しちゃうじゃない」
「……………なるほどな」

言われてみればそのとおりだった。きつとこれも、顕現装置リアライザとやらを使った結界なのだろう。

「……………つてことは、住居ができるまで、つてのは結構な詭弁だったわけだ」

「人聞きの悪い。十香が外部で暮らすための試用期間でもあるつて言ったでしょ」

「そういうえば、十香はどうしたの？」

「十香だったら、マンションに引越す準備をしていると思うわよ」

「なら、俺らも引越し手伝うとするか」

そう言つて背中を伸ばすと――。

「ん……………？」

オルガは不意に眉を上げた。

可愛らしワンピースを纏い、頭に顔を覆い隠すようなキャツケットを被った少女か

ま、飛び跳ねるように走ってきたからだ。

「おお！四糸乃じゃねえか！」

身に纏っているのは、霊装ではなかったが間違いない。

何しろ、少女は左手に、ウサギのパペットを着けていたのだから。

『やつはー、オルガくん』

パペットがパクパクと口を動かしながら、甲高い声を響かせてくる。

『やー、やつと会えたねえ。助けてもらったのにお礼言えなくてごめんねー』

「い、いや、別に良いんだよ。だけどなんでこんなところにいるんだ？検査はもう終わったのか？」

「——彼女は君に用があるとのこと、特別に外出の許可を出したんだ」

すると、聞いたことのある男の声が聞こえてくる。

声の方を見ると、マクギリス・フアリドがそこにいた。

「マクギリスじゃねえか。アンタもなんでここにいるんだよ」

「私は、あくまで彼女の付添人さ。なんでも君にお礼が言いたいらしくてね」

そう言つて、四糸乃の方を見るとパペットが首を縦に振る。

『そーそー結局お礼もできなかつたでしょー？だからマクギリスくんに言つて頼んだのさー』

「マクギリスくん……………?」

よしのんの呼び方に眉根を寄せるオルガ。

こんなやつにくん付けをするのかと、疑問に思ったが、まあ……………口には出さないでおこう。

「そうだ、オルガ団長。私の方からも君たちに向けて話があるんだった」

「話?なんだよ?」

「実は私——明日から君たちの学校に教師として勤務させてもらうことになった」

「はあ!」

突然の一言に思わず声を上げてしまう。

マクギリスは、そんな様子に気にすることなく話を続ける。

「教科は英語を受け持つことになった。村雨解析官と同じ教師として、近くにいれば何かと君たちをサポートできるだろう?それに……………」

「……………それに、なんだ?」

「君と三日月くんの学生生活がどんなものか、少し気になってだね?」

「アンタ、サポートは建前でそっちが本音だろ!」

たまらず声を上げると、マクギリスはこらえきれないと言った様子でハッハッハッと、大きく笑う。

「ハツハツハツ——まあもちろんラタトスクの人間として精霊との対話やASTの対応といった君たちのサポートもするさ。それが私の仕事なのでね」

「……………アンタがラタトスクとして俺らのサポートをしてくれるんだったら少しはマシか。だったら——」

渋々といった様子で言葉を発する。そうしてオルガは以前と同じように不敵な笑みを浮かべてマクギリスの前に手を差し出した。

「——これからもよろしく頼むぜ。マクギリス・ファリド先生」

マクギリスはフツと小さく笑うと、オルガの手を握り返した。

「ああ、こちらこそ改めてよろしく頼むよ——オルガ・イツカくん」

狂三キラー

第二十一話 悪夢との邂逅

「わたくし、精霊ですよ」

6月5日、月曜日。

黒板の前に立った転校生の言葉に、来禅高校2年4組の教室はシンと静まりかえつた。

ただ、皆が皆、同じ顔をして黙りこくっていたわけではない。

最も多いのは彼女が放った言葉の意味を理解できず、「なんなのこの子。夢見がちなの？イタイ子なの？」

それに次いで多いのが、彼女のぞつとするほどに美しい容貌に目を奪われ、そもそも言葉を聞き逃していた男子たちである。

だが五河御留我——もといオルガ・イツカは、そのどちらにも属していなかった。

眉間に深いシワを刻み込み、頬に汗をひとすじ垂らして、腕を組みながら、教卓の横

に悠然と立った転校生を注視する。

黒髪を二つに結わえた少女である。肌は真珠のように白く滑らかで、襟元からのぞく首は、少し力を入れて握れば折れてしまうのではないかと思えるほど細かった。

もつとも特徴的なのは前髪である。恐ろしく端整な顔立ちをしているのだが、前髪が異様に長く、顔の左半分を覆い隠してしまっているのだ。

前髪に隠れていない右目——その視線に晒された瞬間、オルガはまるで悪魔に魅入られてしまったかのような陶酔感を覚えたのである。

もし両目で見つめられていたなら、オルガも他の男子の仲間入りをしていたかもしれない。

その点に関しては、素直に感謝せざるを得ない。

ちらと黒板の方に目をやると、そこには白のチョークで名前が記してある。

「時崎……………狂三」

オルガは誰にも聞こえないくらいの音量で、その名を呟いた。

『精霊』——その言葉の意味を知っている人間は少ない。

精霊がなぜこんな所にいるのか、そもそも本当に彼女は精霊なのか、考えれば考えるほど、疑問がさらに深まっていくばかりだ。

ふとオルガは前方に視線を戻した、その瞬間、

「……………っ！」

オルガは息を詰まらせ、肩を震わせた。

だがそれも仕方あるまい。時崎狂三が、長い睫毛に飾られた右目で、オルガの方を見つめてきたのだから。

「……………っ、なっ!?」

オルガが身じろぎさえできないでいると、狂三は目と唇をにつ、と微笑の形にした。

「皆さん、どうか仲良くしてくださいまし」

言って、小さく頭を下げる。

—————
それが、時崎狂三とオルガ・イツカの二人の物語の始まりだった。



唇を舐めると、汗の味がした。

身体の周囲に展開されたテリトリー随意領域は、重力を始めとして、温度や湿度も思いのままにコントロールすることができるといえる。

故に、わずかとはいえ発汗が認められるということは、そんな外敵条件以外の原因が

考えられるということだった。

例を挙げるとするならば、過度の運動か、重度の疾患か——それとも、異様な緊張か。

「……………」

鳶一折紙は呼吸を整えるように唾液を飲み込むと、手にした高出力レーザーブレード〈ノーペイン〉の柄をぐつと握り直した。

今折紙野華奢な肢体を包むのは、着慣れた高校の制服ではなく、着用型接続装置と戦術顕現装置搭載ユニットだった。

現代の魔術師が魔性の技を振るうために纏う、機械の鎧である。

これを身に纏い、随意領域を展開させた魔術師は、まさに超人といってもいい。しかし今。超人であるはずの折紙が追い詰められてしまっていた。

折紙は障害物に身を隠したまま、脳内に指令を発した。

瞬間、折紙の周囲に展開された随意領域内部の光が屈折し、折紙の視界から見ることができないはずの景色が網膜に映り込んでくる。

廃墟を模した特別演習場、その中心に髪を一つに結った少女が悠然と佇んでいた。

「……さ、あと一人です。どこからでもかかって来やがってください」

少女は、足元に倒れたAST隊員を一瞥もせず、そう言ってきた。

たかみやまな
崇宮真那。

折紙は少女の名を心中で反芻しながら、その姿を改めて見直した。

年の頃は十四、十五と言ったところか。左目下の泣きぼくろに飾られた貌は、まだどこかあどけなさが見て取れた。

だがその小さな体軀を包むのは、少女にまるで似つかわしくない機械の鎧——CR
——ユニットだった。

折紙たちのそれとは少し型の異なるワイヤリングスーツに、両肩には盾のような兵装。折紙たちの装備よりも一世代新しい試作機という話である。

だがその結果は——見ての通りだった。

つい先程、折紙の耳にAST隊員の悲鳴が響いてきた。これで九人目だ。

ここからは見えないが、周囲に広がった障害物の陰には、無力化された八人のAST隊員が倒れているはずである。

九名が既に無力化され、折紙もまた、近接用レーザーブレード以外の装備を失っていた。

反して真那は、未だ傷一つ負っていない。

「……さあ、このままでは時間切れになってしまいやがりますよ？」

真那がふうと息を吐きながら、敬語になりきっていない敬語で言ってくる。

このまま隠れていても仕方がない。折紙は身体を浮遊させ、真那の前に姿を現した。

「お。ようやく腹が決まりやがりましたか？」

「……………」

折紙は脳内に指令を発し、背中のスラスターを駆動させた。

もとより折紙の手に残った武器はヘノーペイン〈一つのみである。接近戦を仕掛ける以外に道は残されていない。身体を前傾させ、凄まじいスピードで空を駆ける。

「潔し。嫌いじゃねーです、そういうの」

真那は唇の端を上げると、肩のユニットを可変させ、両の腕に装着した。

「ヘムラクモ」
——
双刃形態ソードスタイル

すると次の瞬間、盾の先端部から巨大な光の刃が姿を現す。

しかし、折紙は止まらなかつた。

「ヘノーペイン」を振りかぶり、さらにスピードを上げる。

だが、このまま呐喊しても返り討ちに遭うことはわかりきっていた。

「……今」

故に、自分と真那の随意領域テリトリーが触れた瞬間、随意領域テリトリーを急速に収縮させる。

瞬間、随意領域外に顔を出してしまったスラスターの後部が、本来の重量を取り戻す。

折紙はそれに合わせてワイヤリングスーツとスラスターの接続を解除すると、光の刃

を消したへノーペインの柄を抱き込むようにして身体を丸め、真那の脇をすり抜けた。
「なっ……？」

流星にこの行動は予想外だったのだろう、真那が目を丸くする。

「っ！あめーです……っ！」

しかし真那はすぐ落ち着きを取り戻すと、光の刃でスラスターを縦に両断した。

だが———それが折紙の狙いだっただ。

「っ！」

へノーペインの刃を再度出現させ、真那の背中に切っ先を向ける。

真那がスラスターの迎撃を気にとられている一瞬の隙を衝いた、必中の一撃である。

———しかし折紙の攻撃が真那に届くことはなかった。

「な……っ」

レイザーブレイドの切っ先が真那の装備に届いた瞬間、全体の体表を手の平でくまなく撫で回されているかのような感覚が生まれ———折紙の動きが止められていたのがある。

「———ふう、危ねーです」

真那が首を回し、折紙に視線を送ってくる。

もしかしたら真那の反応速度であれば、スラスターを迎撃した次の瞬間に、折紙の対

応することもできることは予想していなかったわけではなかった。

だがその上で、三十センチにまで凝縮した折紙の随意領域テリトリであれば、その中で活動することが不可能ではないかと想定していたのだが……どうやらその予想は甘かったようだ。

「残念、詰みです」チエツク

真那が身体をゆつくりと回転させ、折紙の肩口に光の刃を触れさせる。

その瞬間、頭上からブザーが鳴り響き、次いで、ヘッドセットから音声がかえってきた。

『演習終了。』セツト 崇宮真那三尉の勝利です』



「それじゃいつてきます」

「いつてらっしゃい、あ、士道は少し残ってちようだい」

「へ？俺か？」

士道、オルガ、三日月が登校しようと五河家の玄関で準備をしていた時だった。

玄関から出ようとしたところ、士道が琴里に呼び止められる。

いつの間にか琴里のリボンも黒くなっており、司令官モードになっていた。

明らかに不機嫌そうな態度になって、腰に手を当てながら仁王立ちしていた。

これから土道が苦勞させられることがなんとなく予想がついた。

「ええ。少し話したいことがあるの」

「すまん、二人とも先に行つててくれないか？」

「おう、んじゃ先に行つてるからな」

オルガと三日月は土道の言葉に甘えて家を出る。

瞬間、オルガの網膜を眩しい日差しが襲った。思わず顔を覆つてしまう。

「ん……」

今日は6月5日。もう梅雨に入っているはずなのに、何故かここ最近は快晴続きだった。

例年なら雲に遮られているはずの日光が激しく地面に照りつけ、気温を上昇させている。

「今日も暑いね」

「だな、動いてないのに暑いぜ……」

流石に暑さに耐えかねて、今のオルガたちの制服も夏服に移行していた。

と、そこで。

「……ん？ねえ、オルガ」

「あ？どうした？ありやあ……」

陽光の中、五河家の真ん中に立っていた人影を目にして、思わず目を開く。

そこにいたのは琴里と同年齢くらいの女の子だった。

薄手のワンピースを纏い、目を覆い隠すかのように目深に白の麦わら帽子を被っている。帽子のつばの下から青い髪とサファイアの瞳が覗いていた。

そして左手にはコミカルな意匠のウサギの^{パペット}人形が装着されていた。

「おお、四糸乃じゃねえか」

そんな個性的な風貌をした少女の名を忘れられるわけが無い。オルガは四糸乃の元に歩み寄った。

『やつはー、土道くん、三日月くん。ひっさしぶりだねー！』

と、四糸乃の左手のパペット——よしのんが口をパクパクさせてくる。

「よう。よしのんも久しぶりだな」

小さく頷いて、パペットの方に返す。

「今日はどうしたんだよ。もう検査は終わったのか？」

『んー、検査自体は結構前に終わってたんだけどねー。ちよーつと練習してたのさー』
「練習って？」

オルガが言うと、『よしのん』が四糸乃の帽子のつばをくつと上げた。
「……………」

四糸乃が、怯えるようにビクツと肩を揺らす。そして、こくんと唾液を飲み込む仕草を見せたあと、震える唇を開いた。

「お……………つ、おはよう、ごさいます、オルガさん……………つ！」

先月よりも少しだけはつきりした声音で、四糸乃が言ってくる。

「おお!？」

オルガは目を見開いて感嘆の声を上げた。

恥ずかしがり屋で人見知りな四糸乃は、対外的な反応をほとんど『よしのん』に任せ、自分ではあまり喋りたがらないのである。少なくともオルガは、四糸乃のこんなに大きな声を聞いたのは初めてだった。

「す……………いやねえか、四糸乃！」

オルガがそう言うと、四糸乃は帽子のつばを下げ、しかし口元をこもごと嬉しそうに動かした。

「四糸乃、こんなに話せるようになったんだ」

オルガの後ろから三日月が顔を出す。すると、四糸乃は三日月を見ると、恥ずかしそうに帽子で顔を隠してしまった。

「あ……………つ、み、かづき……………さんつ……………」

「あつ、なんかごめん」

どうやらまだ他の人と会話をするのは、まだ恥ずかしいようだ。

そういうえば、今の四糸乃の格好は最後に会った時と少し違うところがあつた。

「四糸乃、今日は麦わら帽子なんだな」

「……………つ、……………は、はいっ」

四糸乃が一瞬『よしのん』の陰に隠れようとして踏み留まり、小さく頷いてくる。

「今日は……………暑いからつて、その、令音さんが……………それで……………」

「ああ、なるほどな。よく似合つてるよ。可愛いぞ」

「……………つー！」

オルガが言うのと四糸乃はボンむ！と赤くして俯いてしまった。照れ屋なところはまだ直つていないようで、苦笑してしまった。

「——さてと、俺たちもそろそろ行くか」

「そうだね。そういうえば士道はどうする？」

「あいつなら……………まあ大丈夫だろ。先に行つててくれとか言つてたし」

オルガがそう言うのとほぼ同時に、四糸乃がぺこりと頭を下げた。

「きよ……………今日は、これで……………失礼、します。いつてらっしやい……………オルガさん、三日月

さん」

「おう、また来いよ」

「うん、またね」

オルガと三日月が軽く手を振る。四糸乃はもう一度深くお辞儀をすると、とてとてと道の向こうに走っていった。

「んじゃ……行くか、ミカ」

オルガと三日月は、日の光で熱せられたアスファルトの道を歩き出した。



「おお！お前らやっと来たか。今日は随分と遅かったな」

「いや……ちよつと道中色々あつてな……」

五河家から歩いて三〇分程の場所に来禅高校がある。

いつもなら八時頃には着くのだが、結局土道が学校に着いたのは、朝のホームルームが始まる一〇分前だった。心なしか土道の様子が家を出た時よりもへとへとになっていた。

「ところで……なんだよ、アレ」

「あー……まあ一種の悪ノリみたいなものだろ」

土道が黒板の方に目を向けると、相合い傘の落書きが描かれていた。しかも傘の下に

は『五河』『夜刀神』の文字があった。

「あー？なんだよいつもより遅いと思ったたら十香ちゃんと一緒にかよ。うーわ、うーわ」
落書きの近くに立っているクラスメートの殿町宏人がからかってくる。

彼の手にはチョークが握られていたため、十中八九彼がああ落書きを描いたのだらう。

「小学生かよ」

はは……と、乾いた笑いを浮かべる。

「もうすぐホームルーム始まるんだから、時間まで消しといてよー」

「へーい」

三日月が注意すると、殿町は特段悪びれる様子もなく落書きを消した。

「む……むう、一緒に学校に来るのは駄目だったのか……？知らなかったぞ……」

十香からのピュアな視線を向けられ、流石の殿町も少し焦ってあたふたと手を振る。

「い、いやー、んなこたあないの十香ちゃん？これはリア充爆発しろ的なアレとかー」

「……まったく何やってんだよ、殿町。あんま2人を困らせてんじゃねえよ」

「そ、そんなオルガ！お前は俺の味方じゃないのか!？」

オルガからの指摘を受けて、殿町は困惑の声を発する。

「十香が本気にしちまうだろ?というか俺がいつお前の味方だって言ったよ」

「お前忘れたのか!俺たちは先月、非モテ男子高校生同盟を結んだばつかだろ!」

「勝手に俺を変な同盟に入れんじゃねえ!」

殿町の言葉に思わず声を上げる。

——と。そこで、スピーカーからチャイムが鳴り響いた。

「お、ホームルームが始まるぞ。十香、ちゃんと席に着け」

「うむ」

士道から言われ、十香は大人しく席に着いた。

周囲に散らばっていたクラスメートたちも、次々と着席していく。

ほどなくして、教室の扉が開き、岡峰珠恵教諭ことタマちゃんが入ってきた。

「はい、おはようございます」

なんて、いつもの如くほわほわした挨拶を済ませると、タマちゃん教諭は出席簿を開こうし——その手を止めた。

「あ、いけない。今日はみんなにお知らせがあるんです。ふふ、なんとねえ、このクラスに、転校生が来るのです!」

ピシッとポーズをつけながらタマちゃんが叫ぶ。すると教室中から『うおおおおお おお!』と地鳴りのような声が響いた。まあ、転校生といえば、学校の中でも大イベン

トの1つだ。実際、十香が来た時も、皆浮かれていた。

「……………ん？」

だが、オルガは首を捻った。

「転校生といえば、十香が2ヶ月前にこのクラスに転校してきたばかりだ。別にうちのクラスが他のクラスより人数が少ないって訳でもないだろ……………」

「さ、入ってきてー」

ゆっくりと扉が開き、転校生が教室に入ってくる。

その姿を見た途端、オルガの思考は中断した。否、中断させられた。

「」

姿を現したのは、少女だった。この暑い中、冬服のブレザーをきつちりと着込み、足には黒いタイツを穿いている。そして漆黒の前髪で顔の左半分を隠しており、右目しか見取ることができなかった。

だが、それでもその少女が精霊の十香勝るとも劣らない魅力を持っていることは想像できた。

「あ」

思わず惚けた声漏れる。だがそんな自覚は今のオルガには無かった。時間が引き延ばされたような感覚、彼の視線は彼女に釘付けだった。

それほどまでに彼女の持つ妖艶な雰囲気にもオルガの心は掴まれてしまっていた。

「さ、じゃあ自己紹介をお願いしますね」

「ええ」

タマちゃんに促され、黒板に『時崎狂三』と名を記す。

「時崎狂三と申しますわ」

そして、そのよく響く声で、少女——狂三はこう続けた。

「わたくし——精霊ですよ」

「……………ッ!？」

その言葉を耳にした途端、オルガは我に返った。

ざわめく生徒たちの中で、土道達もオルガと同様の反応を示している。

狂三はそれに気づいたのか、心なしかオルガの方を見て微笑んだような気がした。

「……………」

「え……………ええと……………はい！とつても個性的な自己紹介でしたね！」

狂三がもう言葉を継がないことを察してのことだろう、タマちゃんが手を叩いて話が終了したことを示す。

「それじゃあ時崎さん、空いてる席にすわってくださいますか？」

「ええ。でも、その前に、1つお願いがあるのですけれど」

「ん？なんですか？」

「わたくし、転校してきたばかりでこの学校のことをよくわかりませんの。放課後にでも構いませんから、誰かに案内していただきたいのですけれど」

「あ、なるほど。そうですね……じゃあクラス委員の——」

だが狂三は、先生の言葉の途中で前方に歩き出すと、オルガの席の真ん前までやってきた。

「ねえ——お願いできませんこと？オルガさん」

「へ……？」

オルガは予想外の事態に、目を点にして呆然と声を発した。

「お、俺か……？というかアンタ、なんで俺の名前を——」

「駄目ですの……？」

狂三が、さも悲しそうな、断られたら泣いてしまいますわ、みたいな顔を作る。

「い、いや、別にそういうわけじゃ……」

「じゃあ決まりですわね。よろしくお願いしますわ、オルガさん」

狂三はニコリと微笑むとらポカンとしたクラスメートの視線の中、軽やかな足取りで

指定された席に歩いていった。

第二十二話 学校案内

天宮駐屯地敷地内の一角。南関東東全域の霊波情報を統括する観測室で、AST隊長日下部燎子は、眉根を寄せてうめくような声を上げた。

「——間違いないの？これは」

コンソールを操作している男——蘆村二曹に視線を向けると、頬に汗を滲ませながら首を縦に振ってきた。

「残念ながら。ここの観測機の精度は、国内でも最高クラスです」

「……そうよね」

画面上には、とある人物のスキニングデータが表示されている。

否、人物、というには少し語弊があるかもしれない。何しろその数値は、対象が世界を殺す災厄であることを示していたのだから。

「……高校に、精霊が転入？笑えないジョークだわ」

今日の朝九時頃、折紙から基地に精霊を名乗る少女が転校してきたと通信があったのだ。

半信半疑ながらも件の少女のスキヤニングを行ったのだが、結果は少女が精霊であるということを示していた。

高校に転入するということは、戸籍や住民票はもちろん、他にも様々な書類が必要になるということである。

指先一つで街を壊す力を有する危険生物が、こちらの観測をすり抜けて限界したうえ、人間の社会構造を理解・応用するまでの知識を持っているというのである。戦慄するなという方が無理な話だった。

「隊長？どうかしやがりましたか？」

と、そこで背後から奇妙な敬語が聞こえてくる。そんな特徴的な言葉遣いをする隊員は一人しかいない。ちらと後方に視線を向けると、そこには予想通り真那が立っていた。

「……ん？これは……なるほど、やはり出やがりましたかへナイトメア」

「へナイトメア」……？」

怪訝そうに問う。すると真那が眉根を寄せ、忌々しげに息を吐いた。

「識別名へナイトメア」。——私が追っている、最悪の精霊です」

「最悪の……精霊」

燎子が物々しい言葉におののくように言うと、真那は「ええ」と首肯した。

「現在までで一万人以上の死者を出しやがっている精霊です。判明してねー被害者も含めれば、その数はさらに膨れ上がるでしょう」

「い、一万人……!? あ、有り得ないわ。避難指示が出ていなかったの？ それとも、そこまです規模の大きな空間震が——」

「ちげーます」

燎子の言葉を遮るように、真那が重苦しい声を発した。

「ハナイトメア」の起こす空間震の規模は標準程度です。死者もいねーことはねーですが、その数さ一〇〇人にも満たねーです」

「じ、じゃあなんで……」

「単純な理由ですよ。——直接、その手で殺してやがるんです。一万人以上の人間を」
「……っ」

以前まで天宮市に出現していた「プリンセス」や「ハーミット」は、空間震被害こそ深刻ではあったものの、自ら人間に襲いかかるようなことはしなかった。

だが、もし容易く大地を割る怪物が、己の意思で人を殺そうとしたなら。

AST隊員——否、人間であればそれがどれだけ恐ろしいことか想像に難くなかった。

「——さ、じゃあ準備をしましょうか」

「え？」

「精霊が現れがったんです。ならばぶつ殺す以外にすることはねーです」

「そりゃあそう……だけど、市民はみんな避難してないのよ？そんな中で一体——」

「心配ご無用。私に任せやがってください。アレの処理は、私の専門ですから。それに——いざという時にはこれがありますので」

言つて、真那はポケットからあるものを取り出す。

それは機械製のリングだった。表面は灰色に塗られており、円の縁をなぞるように緑色のラインが怪しく光っていた。

「それは……？」

怪訝そうな声で真那に訊く。その問いに対し、真那はあつけらかなとした態度で答える。

「新型CRユニットの試作品です。私がここに配属される直前に渡されたんでやがりますが、私もこれについてはあまりよく知らなくて——ただどうやら、対精霊用のみではなく、モビルスーツとの戦闘も視野に入れた代物との事です」

「あ、ちよ、ちよつとー」

リングの説明だけを残してそのまま去っていこうとする真那の腕を、がっしと掴む。

「？どうしやがりました。早いに越したことはねーでしょう」

「……ッ、まず説明しなさい。隊長は私よ。勝手な行動は許さないわ」
「……………」

真那はしばし思案を巡らせるように黙ったあと、小さく手を上げてきた。

「了解、従います」

しかし、すぐに燎子を値踏みするような視線を向けてくる。

「でも、くれぐれも忘れねーでください。私は『へ会社』からの出向です。その気になれば陸幕長の公認付きで行動を起こすこともできますので」

「……………わかってるわよ」

燎子は面白くなさそうに顔を歪めると、真那の手を放した。



黒板の上に設えられた時計は、もう3時を回っている。

オルガの視界の中では、見慣れた帰りのホームルームが展開されていた。教卓にはタマちゃん教諭が立っており、連絡事項を伝えている。

何の変哲もない光景なのだが、オルガは今、異様な緊張に苛まれていた。なぜなら

……

「……………」

狂三が先生の隙をついてオルガの方にちらと視線を寄越し、小さく手を振ってくる。
「(何でさつきからこつちのこと見てくんだ……?)」

ずつと視線を向けられるのは、慣れないもので妙な心地だった。

「連絡事項はこんなところですかね。——あ、それと、最近この近辺で、失踪事件が頻発しているそうです。皆さん、できるだけ複数人で、暗くなる前におうちにかえるようにしてくださいね」

「……………」

そういえば、朝のニュースでそんなことを言っていた気がする。天宮市という名前が出たため、意識の端に引つかかっていたのだ。

士道やオルガ、三日月はともかく、琴里には気をつけさせておかねばならないだろう。……まあ、あの妹様の場合、杞憂となる可能性の方が高いだろうけれど。

その後は起立の号令とともに礼をすると、タマちゃんも教室から出て行った。周りからは、席を立つ音と生徒たちの談笑が聞こえてくる。

時間は既に下校時刻となっている。だがオルガにまだ仕事が残っているのだった。

オルガと士道はポケットから小さなインカムを取りだし、右耳に装着した。

『——時間ね。用意はいい？オルガ。それにしても……』

琴里の鼻で笑うかのような声が聞こえてくる。

『まさか、本当に精霊だなんてね。——正直、オルガの妄言かと思ってたわ』

「……おっ」

琴里の言葉に半眼を作る。

だがそれも無理のない話だった。狂三から学校案内を頼まれたあの後、オルガは琴里に連絡をして狂三が本当に精霊かどうか、調べてもらったのだ。

だが実際、オルガたちも琴里に依頼した時点では半信半疑だったのだ。精霊が、転校生として現れるだなんて。

琴里に依頼した狂三の観測の結果は、昼休みにオルガの携帯電話に届けられた。

結論から言うと——狂三は、本当に精霊だったのである。

『——まあ、でも好都合よ。向こうからお誘いかけてくれるなんてね。警報が鳴ってない以上、ASTもちよつかい出せない出しようし、願ったり叶ったりじゃないり今のうちに好感度上げて、デレさせちやいなさい』

「……ああ、そうだよな……」

確かに琴里の言う通りである。だが、あまりに狂三のいとが掴めないためだろうか、オルガの胸には、なにやらモヤモヤとした物がわだかまっていたのである。

『何よ、その腑抜けた返事は。まだ精霊もキスするのは嫌だつていうの?』

「……べ、別にそういう訳じゃねえよ……いや、正直言うともまだ全然慣れねえよ……」

『なんでもいいけど、あんまり雑談してる暇も無さそうよ』

『は?』

オルガが間の抜けた声を発すると同時、その肩がちよんちよん、と突かれた。

「オルガさん、オルガさん」

「ウヴウアアアアアアアア!」

突然のことに驚き、大声を上げてしまった。

「あら、ごめんなさい、驚かせてしまいましたか?」

そこに立っていた少女——狂三が申し訳なさそうに、言ってくる。

「わ、悪い……その、時崎さ……」

「狂三で構いませんわ」

「あ、ああ……狂三……」

オルガが言うのと、狂三は楽しそうに微笑んでから言葉が続けてきた。

「学校を案内してくださいさるのでしよう?よろしくお願ひしますわ」

「お、おう」

オルガは、急に鼓動を速めた心臓を押さえるように、胸に手を当てながら首肯した。

……作り物のように美しい貌。高貴さ漂う仕草。優雅な所作。それらが全てがオルガの感覚を通つて、彼女の存在を強烈に印象づけてくる。

「それでは土道さん、オルガさんをしばらくお借りしますわね」

「あ、ああ……」

「……」

狂三の所作に土道も少し落ち着かない様子だった。ただ土道が狂三に見とれてしまったと思つたのだろうか、十香が腕組みをしながら睨んできていた。

「あ、あのだな十香……」

土道は十香に弁明するような声を発した。その様子を見て狂三はうふふと、微笑んだ。

「随分とおふたりは仲がよろしいですね。——さ！早く参りましょう。ふふ、楽しみですわ」

狂三は足取り軽やかに先に廊下に歩いていってしまふ。

「あ……おい！それじゃ土道、十香またあとでな」

「あ、ああ……」

「うむ……ではまたな」

少しばかり十香が不機嫌そうになったが、土道ならきつと大丈夫だろう。恐らくきな

こパンでも買ってけば、すぐに機嫌を直すはずだ。

そう考えて二人に一言残すと、狂三の後を追って廊下に出た。

「それで、どこから案内してくださいますの？」

教室を出てすぐの所に待ち構えていた狂三が、小さく首を傾げながら言ってくる。

「お、おう……そうだな」

オルガが決めあぐねていると、右耳に琴里の声が飛んできた。

天宮市上空で浮遊しているヘラタトスクの有する空中艦へフラクシナス、そこから琴里はインカムを通してオルガに指示を出している。

今、艦橋にある巨大モニターにはギャルゲーのゲーム画面のような表示と狂三の姿が映し出されていた。

と、画面中の狂三が首を傾げると、その可愛らしい唇を小さく動かした。

『それで、どこから案内してくださいますの？』

『あ、ああ……そうだな』

いきなり行く先を委ねられ、オルガは困惑していた。琴里はふうと息を吐きながら通話ボタンを押し、マイクを口に近付けた。

「オルガ、ちよつと待ちなさい。こちらでも検討してみるわ」

琴里が言った瞬間、メインモニタに校内の見取り図とともに、次の行き先が数パターン表示される。

①屋上

②保健室

③食堂・購買部

「——チャンスですね」

琴里の座る艦長石の後方からへフラクシナスの副司令、神無月恭平の声が響いてきた。

「行く先の順番をこちらの判断に委ねてくれたのはありがたいですね。組み合わせ次第では、良いシチュエーションを作ることでも可能でしょう」

「まあ、そうですね。——各自、選択！五秒以内！」

琴里から待つように言われ、しばらく待機していると右耳から琴里の声が聞こえてきた。

『オルガ、聞こえる？まずは食堂と購買部で案内してあげなさい』

「……そうか、じゃあ食堂と購買部に行くか。これから何かと必要になるだろう」

「ええ、構いませんわ」

狂三が可愛らしい微笑を浮かべながら小さく首肯すると、オルガの横に立った。

「では、参りましょう」

「お、おう」

購買部へと向かう道中、下校中の生徒たちから、なにやら意味深な視線が注がれた。

——わー、何あの子、かわいいー。転校生？隣にいるのって四組のオルガくんだよ、なんで？ああ、なんか直接指名されたんだってさ。え、そういえば五河って同じクラスに彼女持ちの兄弟いなかったか？確か夜刀神さんのダンナだって。確かあいつの友人の三日月も鳶一に囲われてたぞ。そういえば、あの3人いつも一緒だけど、オルガのそういう色気話は聞いたこと無かったな。てことはアイツにもとうとう春が来た……ってコト!?

……随分と好き勝手言ってくれる。

頬を引きつらせていると、琴里からの叱責が聞こえてきた。

『——オルガ、今は狂三に集中しなさい。女の子と歩いてるっていうのに、なんで無言なのよ。』

「え？あ……っつ」

女の子と一緒に歩くという緊張と、周りから注がれる好奇の視線に気を取られ過ぎ

て、狂三を放置していたのである。

「……やべ」

口の中でそう呟き、ちらと狂三の方に視線をやる。

瞬間——オルガは心臓がドクンと震えるのを感じた。

なぜなら狂三が髪に隠れていない右目で、オルガの方を、ジツと見つめてきていたのだから。

自然と狂三と目が合う。その瞬間、狂三は心底嬉しそうにニコツと微笑んだ。まるでオルガが自分のことを見てくれるのを待っていたとも言わんばかりに。

「く、狂三……さっきから俺の顔見てるけど、もしかして俺の顔になんか付いてたか？」

オルガが上擦った声でそう言うと、狂三は「ふふ」と小さく笑った。

「いえ、別にそういう訳ではありませんわ。ただ、オルガさんの横顔に見とれてしまつて」

「え!? み、見とれ……ッ!？」

狂三の言葉に顔を真っ赤に染めてしまう。琴里が呆れたように言ってきた。

『あなたが口説かれてどうするのよ、オルガ』

「わ、わりい……」

『……しかしまあ、今までにないタイプの精霊であることは確かね。人間社会に溶け込

んでるのはもちろん——向こうからこんなアプローチをしかけてくるなんて」

琴里が「ふうむ」と考え込むように喉を鳴らす。

『興味深い存在だからいろいろと情報を探りたいところね。……まあ、好感度を上げつつ質問も織り交ぜていこうかしら。——と、ちょうどいいところで選択肢が来たわね。ちよつと待ちなさい』

へフラクシナスのメインモニタに、再び選択肢が表示される。

①「朝言つてた精霊って、一体何なんだ？」

②「狂三は、前はどこの学校にいたんだ？」

③「狂三は今、どんなパンツをはいてるんだ？」

「総員、選択！」

琴里が叫ぶと、艦橋下のクルーが一斉に手元のキーを押し、すぐさま結果が琴里の専用ディスプレイに表示された。

「やっぱり、①かしらね」

「——妥当だろう。恐らく狂三は、オルガ団長が精霊を知っているということまでは把握していないはずだ。ここは一度揺さぶりをかけてみてもいいだろう」

神無月同様、琴里の後方に立っていたへラタトスクのパイロットの一人、マクギリ

ス・ファアリドがそう言ってくる。

「そうね。——ちなみにマクギリス。あなたはどれに入れたの」

「③だな」

「一応理由を訊こうかしら」

「狂三のパンツを目にした時のオルガ団長の反応が気になってね」

「人の兄のことなんだと思ってるのよ……」

愉しそうに言ってくるマクギリスに琴里は溜息を吐いた。

「……『狂三は今、どんなパンツをはいてるんだ？』……何なのこの選択肢」

と、そこで琴里はびくりと眉を揺らした。

「あ」

姿勢を変えた時だろうか、いつの間にかマイクのスイッチが入っていた。つまり——

『な、なあ……狂三は今、どんなパンツをはいてるんだ？』

それを指示だと勘違いしたオルガが、琴里が先刻発した言葉を恥ずかしげに口にして
いた。

「ぱんつ……ですの？」

「……………」

狂三がキョトンと訊き返してくるのをみて、オルガはその場で固まってしまった。

『馬鹿、今のは指示じゃないわ！本当は①よ。「朝言つてた精霊つて、一体なんなんだ？」と、とにかく早く誤魔化しなさい！』

「……………ハイ」

焦った琴里から訂正するよう言われるが、自分で言っておきながら、自分の言ったことが信じられなくてオルガは茫然と立ち尽くすしかできなかった。

「……………く、狂三、これはだな……………」

オルガは狂三に向き直ろうとしたが、狂三の仕草を見て、言葉を止められる。

狂三は上目遣いで土道を見ながら、プリーツスカートの裾をきゅつと摘んでいた。

「……………気に、なりますの？」

「ハアツ!? あ……………いやツ……………そういうことじゃなくて……………」

オルガも健全な男子高校生だ。そりゃこんな美少女のパンツが気にならないという訳では無いのだが、口が滑つてもそんなこと言えるはずがなかった。

狂三はキョロキョロと辺りを見回し、身体をさつと、近くにあつた掃除用具入れの陰に隠した。

「く、狂三……………」

狂三の行動の意味がわからず、眉をひそめる。すると狂三は恥ずかしそうに頬を染めると、小さな唇を開いてきた。

「いい……ですわよ、オルガさんなら」

そう言つてスカートの裾を掴んだ手を、徐々に上に上げていった。

「……………ハイ」

予想もなかった展開に、目を見開いたままオルガの身体はまた凍りついてしまった。

しかしこうしているうちにも、狂三はするするとスカートを捲り上げていった。黒いタイツに覆われた脚が段々と露わになり——禁断のデルタゾーンが微かに顔を出す。左右に引つ張られて薄くなった黒い生地越しに、一瞬白い下着が見えた。

「——あら？」

と、そこで狂三は手を止めた。突然オルガの顔を見て首を傾げたのだ。

「オルガさん、鼻から……」

「……………へ？」

狂三に言われ、指を鼻に当てる。するといつの間にか鼻から大量の鼻血が吹き出していた。

「ア…………ツ——」

鼻血が出てることを理解した途端、またいつもの曲が頭の中で流れ出し始めた。

キポーノーハナー♪

興奮したオルガは大量の鼻血を吹き出しながら、のぼせた頭のまま、例のごとく地面に倒れ込んで死んだ。

「……だからよ、止まるんじゃねえぞ……………」

「お、オルガさん!?!」

倒れ込むオルガに狂三が困惑し出す。

そりや目の前で人が鼻血を吹きながら倒れたら誰でも焦るだろう。

——その後、この後クラス委員の仕事が終わった三日月に見つかって、すぐに救出されたのはまた別の話である……。